

下総町

新シ山・柳和田台遺跡 青山中峰遺跡 青山宮脇遺跡

—主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書V—

平成7年3月

千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

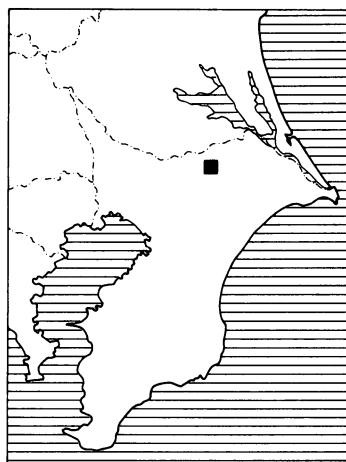
しも ふさ
下 総 町

あたらし やま やなぎわ だ だい
新シ山・柳和田台遺跡

あおやまなかみね
青山中峰遺跡

あおやまみやわき
青山宮脇遺跡

—主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書V—



平成 7 年 3 月

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター



SX-02 出土土器

序 文

周囲を海と利根川に囲まれた千葉県は、豊かな自然の恵みを受けて、古くから人々の生活がはぐくまれてきました。千葉県では、この恵まれた自然環境を生かしつつ、調和のとれた開発をめざして様々な事業が進められています。

成田空港に隣接する地域では、増大する交通量に対処する道路網の整備が急がれています。その一環として千葉県土木部では、成田市と下総町を結ぶ主要地方道成田下総線の改良事業を実施することとなりました。

予定した路線内には多くの遺跡があり、千葉県教育委員会ではその取扱いについて下総町教育委員会、千葉県土木部等関係諸機関と協議を行いましたが、路線変更は不可能であったため、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は千葉県教育委員会の指導のもと、財団法人千葉県文化財センターが実施し、既に4冊の報告書を刊行しました。今回は下総町にある新シ山・柳和田台遺跡を初め3遺跡を報告します。下総町としては初の旧石器時代遺跡が確認されたこと、新シ山・柳和田台遺跡で弥生時代の土器棺墓が見付かったことなど、成果は大きなものがありました。この報告書が学術資料としてはもとより、郷土の歴史への理解を深めるため広く活用されることを希望します。

終わりに、調査から整理作業の間、多大の御協力をいただいた千葉県教育委員会を初め千葉県土木部、香取土木事務所、下総町教育委員会、千葉県立中央博物館、国立歴史民俗博物館ほか関係諸機関の方々、発掘調査及び整理作業に従事していただいた調査補助員の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成7年3月

財団法人千葉県文化財センター

理事長 奥 山 浩

凡　　例

1. 本書は千葉県土木部による主要地方道成田下総線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、千葉県教育委員会の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが行った。
3. 本書に収録した遺跡は新シ山・柳和田台遺跡（香取郡下総町成井字新シ山381-1ほか）遺跡コード341-004、青山中峰遺跡（同町青山字岩谷台383-2ほか）遺跡コード341-005、青山宮脇遺跡（同町青山字新畠78-1ほか）遺跡コード341-006の3遺跡である。

新シ山・柳和田台遺跡の名称は、調査時の新山遺跡から整理時点で変更した。

4. 第2図に用いた地形図は国土地理院発行の成田・佐原 1/50,000である。

5. 本書の執筆分担は以下のとおりである。

序章、第I章1・3-1・3-2(1)(2)(4)～(6)・4、第II章1、第III章1・3-1・4

副所長 宮 重行 第II章2・3-2・4 主任技師 萩原恭一

第I章2・3-2(3)、第II章3-1(2)、第III章2・3-2、第V章1 主任技師 矢本節朗

第I章3-2(7) 主任技師 鳴田浩司 第II章3-1(1) 技師 高柳圭一

第V章2 主任技師 小高春雄

6. 本書の編集は宮 重行が行った。

7. 発掘調査から報告書刊行に至るまで、下記の諸機関や方々から多くの御協力と御助言を得た。記して感謝します。

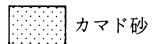
千葉県教育庁生涯教育部文化課、千葉県土木部道路建設課、香取土木事務所、下総町教育委員会、国立歴史民俗博物館 永嶋正春氏、県立中央博物館 小宮 猛氏 黒住耐二氏

8. 遺構番号は調査時の番号をそのまま使用しており、遺構の性格別に下記の記号をつけ、通し番号がふられている。

S B =掘立柱建物跡、S I =竪穴住居跡、S K =土坑、S X =その他の遺構

9. 本書におけるレベル高はすべて海拔であり、方位は座標北を使用した。

カマド用例



カマド砂



焼 土

本文目次

序文

凡例

目次

序 章.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
1 調査の方法.....	1
2 調査体制.....	1
第2節 調査の概略.....	2
第3節 遺跡の位置と歴史的環境.....	4
第4節 各遺跡の層序.....	8
 第Ⅰ章 新シ山・柳和田台遺跡の調査.....	13
第1節 調査の経過.....	13
第2節 旧石器時代.....	14
1 概要.....	14
2 第Ⅰ文化層.....	15
(1) 第1ブロック.....	15
3 第Ⅱ文化層.....	20
(1) 第2ブロック.....	20
(2) 第3ブロック.....	22
(3) 単独出土.....	24
第3節 縄文時代以降.....	26
1 遺構.....	26
(1) 特殊遺構.....	26
(2) 壓穴住居跡.....	28
(3) 掘立柱建物跡・柵列.....	32
(4) 土坑ほか.....	40
2 遺物.....	44
(1) 縄文土器.....	44
(2) 土製品.....	48
(3) 縄文時代石器.....	48
(4) 弥生土器.....	51
(5) 奈良・平安時代土器.....	52

(6) 金属製品	55
(7) 近世遺物	56
第4節 小 結	57
第II章 青山中峰遺跡の調査	61
第1節 調査の経過	61
第2節 遺 構	62
1 堅穴住居跡	62
2 掘立柱建物跡	73
3 陷穴	76
4 その他の土坑	76
第3節 出土遺物	83
1 縄文時代遺物	83
(1) 縄文土器	83
(2) 石器	84
2 奈良平安時代遺物	86
(1) 堅穴住居跡出土の土器	86
(2) 土坑出土及び一括採集の土器	98
(3) 鉄製品・石製品・土製品	102
第4節 小 結	102
第III章 青山宮脇遺跡の調査	107
第1節 調査の経過	107
第2節 旧石器時代	108
1 概要	108
2 第I文化層	108
(1) 第1ブロック	108
3 第II文化層	109
(1) 第2ブロック	109
第3節 縄文時代以降	116
1 土器	116
2 石器	117
第4節 小 結	117
第IV章 まとめ	119
第1節 新シ山・柳和田台遺跡、青山宮脇遺跡の旧石器時代について	119
第2節 新シ山・柳和田台遺跡SX-02出土土器とその性格について	121

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 周辺の遺跡	5
第3図 遺跡の基本層序	9
新シ山・柳和田台遺跡	
第4図 新シ山・柳和田台遺跡遺構配置図	11
第5図 調査区	13
第6図 ブロック配置図	14
第7図 第1ブロック器種別分布図	15
第8図 第1ブロック母岩別分布図	16
第9図 第1ブロック出土石器（1）	18
第10図 第1ブロック出土石器（2）	19
第11図 第2ブロック器種別分布図	21
第12図 第2ブロック母岩別分布図	21
第13図 第2ブロック出土石器	22
第14図 第3ブロック器種別分布図	23
第15図 第3ブロック母岩別分布図	23
第16図 第3ブロック出土石器	24
第17図 単独出土石器分布図	25
第18図 単独出土石器	25
第19図 SX-02	27
第20図 SI-01・02	29
第21図 SI-03	30
第22図 掘立柱建物跡配置図	31
第23図 SB-01	33
第24図 SB-02・03	34
第25図 SB-04	35
第26図 SB-05・06	37
第27図 SB-07・08	38
第28図 SB-09・10	39
第29図 SB-11・12	41
第30図 SK-01～05	43

第31図 SK-06・07	44
第32図 縄文土器（1）	45
第33図 縄文土器（2）	47
第34図 土製品	48
第35図 縄文時代石器（1）	49
第36図 縄文時代石器（2）	50
第37図 SX-02出土土器	51
第38図 SI-01・02出土土器	53
第39図 SI-03、土坑・掘立柱建物跡出土土器	54
第40図 金属製品	55
第41図 常滑甕	56

青山中峰遺跡

第42図 青山中峰遺跡遺構配置図	59
第43図 調査区	61
第44図 SI-01～03	63
第45図 SI-04～07	65
第46図 SI-08～11	67
第47図 SI-12～15	69
第48図 SI-16～18	71
第49図 SB-01	73
第50図 SB-02	74
第51図 SB-03・04	75
第52図 SK-01～03	77
第53図 SK-06～08、SK-13～15、SK-30	79
第54図 SK-09～12、SK-16～26	81
第55図 縄文土器	83
第56図 縄文時代石器	85
第57図 SI-01・02出土土器	87
第58図 SI-03～06出土土器	89
第59図 SI-08～10出土土器	91
第60図 SI-11・12出土土器	93
第61図 SI-13～16出土土器	95
第62図 SI-16・17出土土器	97

第63図 SI-18、SK-06出土土器	99
第64図 SK-13・15・16・30出土、一括採集の土器	101
第65図 鉄製品・石製品・土製品	103
青山宮脇遺跡	
第66図 青山宮脇遺跡調査区	105
第67図 ブロック分布図	107
第68図 第1ブロック石器分布図	108
第69図 第1ブロック出土石器	108
第70図 第2ブロック器種別分布図	110
第71図 第2ブロック母岩別分布図	111
第72図 第2ブロック出土石器（1）	113
第73図 第2ブロック出土石器（2）	114
第74図 繩文土器	116
第75図 繩文時代石器	117

表 目 次

新シ山・柳和田台遺跡

第1表 第1ブロック出土石器計測表	20
第2表 第2ブロック出土石器計測表	22
第3表 第3ブロック出土石器計測表	24
第4表 単独出土石器計測表	26
第5表 繩文時代石器計測表	49

青山中峰遺跡

第6表 壺穴住居跡計測表	72
第7表 繩文時代石器計測表	84

青山宮脇遺跡

第8表 第1ブロック石器計測表	109
第9表 第2ブロック石器計測表	115
第10表 繩文時代以降石器計測表	117

図 版 目 次

卷首図版 SX-02出土土器	図版20 SI-05・06
図版1 遺跡周辺航空写真	図版21 SI-07・08
新山遺跡	
図版2 調査前の遺跡	図版23 SI-12~15
図版3 調査区全景	図版24 SI-15カマド出土、SI-16
図版4 旧石器調査区	図版25 SI-17・18
図版5 第1ブロック出土石器(1)	図版26 SI-18カマド、SB-1~3
図版6 第1ブロック出土石器(2), 第2ブロ ック出土石器, 第3ブロック出土石 器, 単独出土石器	図版27 SK-01~08、SK-11・13・14 図版28 SK-15、SK-17~21、SK-24~26、SK -30
図版7 SX-02	図版29 繩文土器・石器
図版8 SI-01	図版30 SI-01~03、SI-05・06・08・10出土 土器
図版9 SI-02、SI-03	図版31 SI-11~14出土土器
図版10 掘立柱建物跡	図版32 SI-15~17出土土器
図版11 土坑	図版33 SI-17・18、SK-13・16・30、金属製 品・石製品・土製品
図版12 繩文土器(1)	青山宮脇遺跡
図版13 繩文土器(2)	図版34 調査前の遺跡、調査風景
図版14 土製品・石器	図版35 調査区
図版15 SX-02出土遺物	図版36 第1ブロック出土石器、第2ブロッ ク出土石器(1)
図版16 住居跡等出土土器	図版37 第2ブロック出土石器(2)
図版17 金属製品、常滑甕	図版38 繩文土器、石器
青山中峰遺跡	
図版18 遺跡検出状況	
図版19 SI-01~04	

序 章

第1節 調査に至る経緯

千葉県土木部では、成田市周辺の交通量の増加に伴う道路網整備の一環として、主要地方道成田下総線建設事業を計画した。この道路が計画された成田市北部から下総町にかけての地域は埋蔵文化財が多く所在する地域であるため、千葉県教育委員会ではその取扱いについて千葉県土木部道路建設課と協議を重ねた。その結果、路線内に所在する埋蔵文化財については記録保存の措置をとることになり、財団法人千葉県文化財センターが委託を受けて発掘調査を実施することになった。

この事業の調査成果は、既に成田市内に所在する遺跡について「芦田台1・2号塚」、「林北遺跡・長山遺跡」の2冊、下総町内については「不光寺遺跡」、「長稻葉遺跡」の2冊、合計4冊の報告書で報告してきたところである。

第2節 調査の概略

各遺跡の調査方法及び調査体制は以下のとおりである。

1 調査の方法

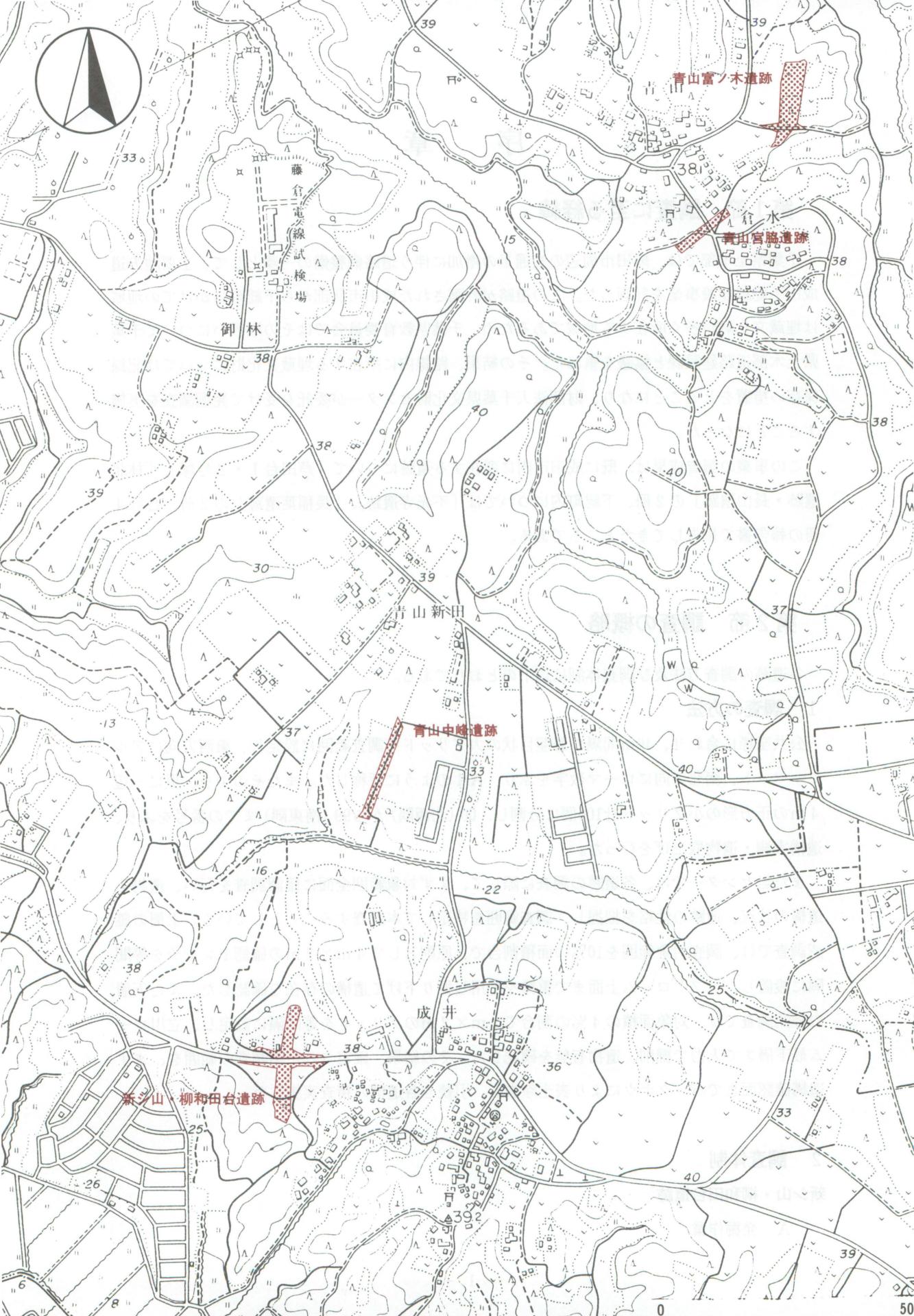
公共座標に合わせ、40m間隔の碁盤目状の大グリッドを調査範囲に設定し、東西方向にアルファベット、南北方向にローマ数字をふり、A 1のように呼称した。またその中を、更に一辺4 mの正方形の小グリッド計100個に分割し、00(北西隅)から99(南東隅)までの番号をふり、遺構実測・遺物取上げを行った。

また当センターでは、各遺跡の調査に際して、まず対象範囲全面に確認調査を行い、遺物・遺構の状況、遺跡の性格を把握し、調査範囲を特定して本調査することとしている。上層の確認調査では、調査対象範囲を10%の面積割合で、原則として4 m × 2 mの確認トレンチを等間隔に設置し、ソフトローム上面まで重機を併用し掘り下げて遺構の存在を確認した。また下層の確認調査では、対象面積の4 %の割合で2 m × 2 mのグリッドを等間隔に設定し、立川ローム最下層まで人力で掘削、遺物有無を確認した。その結果、確定された本調査の範囲を、まず遺構確認面までバックホウにより表土除去し、引き続き各遺構の精査実施した。

2 調査体制

新シ山・柳和田台遺跡

A 発掘作業



第2図 遺跡位置図 (S=1:10,000)

(平成元年度)

調査期間 平成元年 4月10日～6月30日

調査面積 対象面積3,000m² 確認調査 上層300m²／3,000m² 下層221m²／3,000m²
本 調 査 上層1,400m² 下層145m²

発掘担当者 主任技師 鳴田浩司

(平成5年度)

調査期間 平成5年 7月1日～8月31日

調査面積 対象面積2,500m² 確認調査 上層290m²／2,500m² 下層100m²／2,500m²
本 調 査 上層590m² 下層 0 m²

発掘担当者 主任技師 萩原恭一

B 整理作業

整理期間 平成6年 4月1日～平成7年 3月31日

整理担当者 主任技師 萩原恭一・矢本節朗、副所長 宮 重行

青山中峰遺跡・青山宮脇遺跡

A 発掘作業

青山中峰遺跡

調査期間 平成2年 4月5日～7月27日

調査面積 対象面積3,128m² 確認調査 上層316m²／3,128m² 下層108m²／3,128m²
本 調 査 上層2,400m² 下層 0m²

発掘担当者 主任技師 萩原恭一

青山宮脇遺跡

調査期間 平成2年 8月6日～9月28日及び平成4年 7月1日～7月28日

調査面積 対象面積1,900m² 確認調査 上層193m²／1,900m² 下層37m²／1,900m²
本 調 査 上層 0m² 下層71m²

発掘担当者 主任技師 萩原恭一

B 整理作業

整理期間 平成5年 4月1日～6月30日及び平成5年 9月1日～平成6年 3月31日

整理担当者 主任技師 萩原恭一

報告書刊行

実施期間 平成6年10月1日～平成7年3月31日

編集担当者 主任技師 萩原恭一（平成5年度）、副所長 宮 重行（平成6年度）

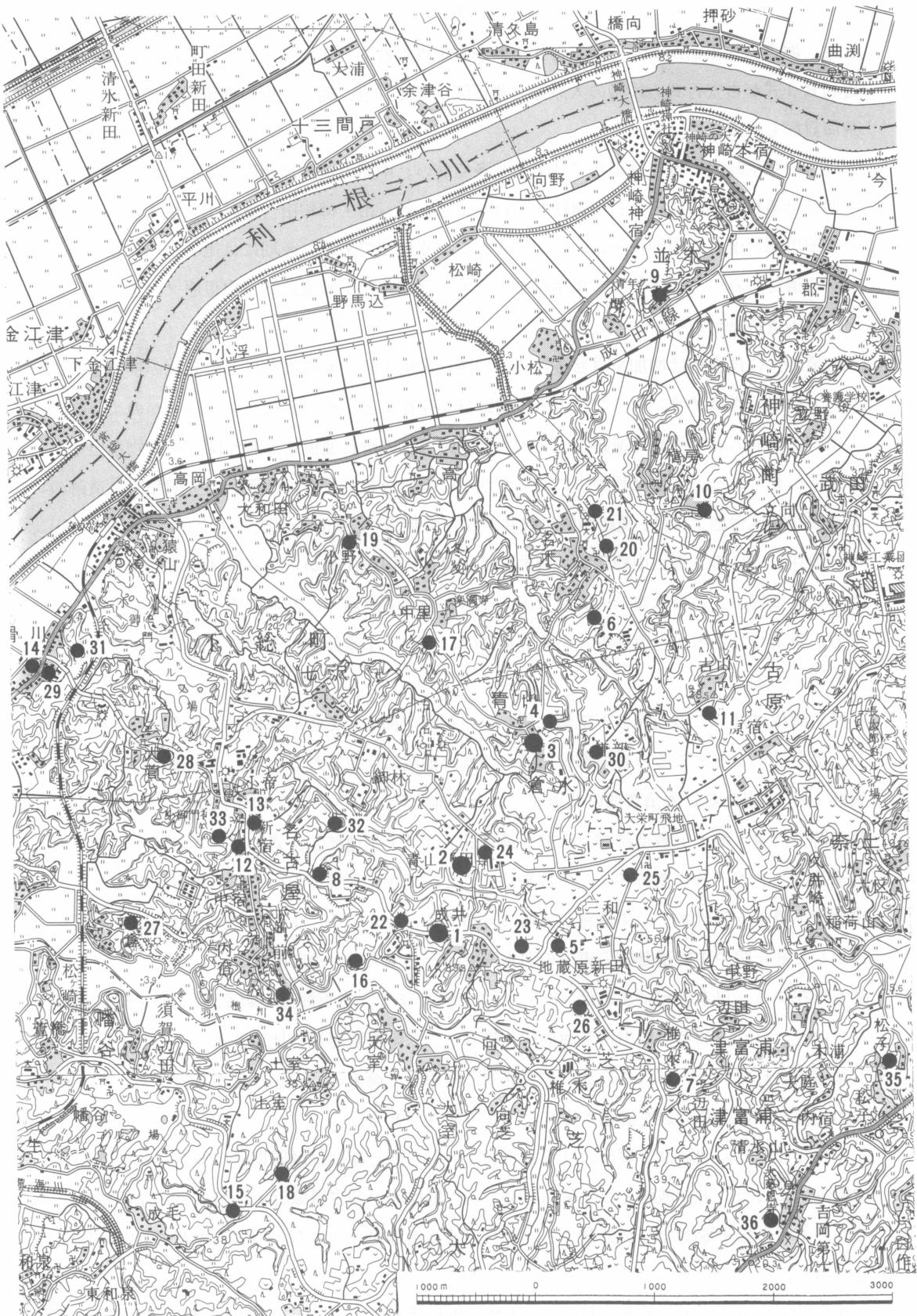
第3節 遺跡の位置と歴史的環境

今回報告する新シ山・柳和田台遺跡(1)、青山中峰遺跡(2)、青山宮脇遺跡(3)は香取郡下総町名木及び青山に所在している。下総町は千葉県北部の中央やや東寄りにあり、利根川に面した町である。この地域では利根川は西南西から東北東に流下しており、川沿い部分は沖積低地が細長く広がり、その南側には下総台地が迫っている。台地から利根川に向かっては根木名川や大須賀川など大小の河川が流れ込み、台地は河川に伴う細長い谷によって分断され、大略的に見ると北西から南東に細長く延びる短冊状をなす。さらにそれらの谷からは細かな支谷が無数に入り込み、樹枝状に開析された台地地形となっている。

新シ山・柳和田台遺跡ののる台地は、根木名川の支流であり成田空港周辺に源を発した尾羽根川と、助崎地区で尾羽根川から分流した支流に挟まれ、成井・地蔵原方面へと連なっている。また台地の尾根沿いを県道下総・横芝線が走っている。青山中峰遺跡は、前記の助崎地区からの支流と、利根川へ注ぐ境川によって挟まれた、JR滑川駅から七沢・青山新田に至る台地上にある。青山宮脇遺跡は境川と利根川へ注ぐ淨向川に挟まれた、大和田から青山をへて地蔵原へのびる台地上に占地している。同じ台地上の北側には隣接して青山富ノ木遺跡(4)がある。利根川の開析平野からは新シ山・柳和田台遺跡、青山中峰遺跡で4km、青山宮脇遺跡では2.5kmほど入った位置にあり、遺跡中央の平坦部分の標高は約40mである。

周辺の歴史的環境について見てみる。旧石器時代については調査例が少なく、実態がわかるものとしては今回報告する新シ山・柳和田台遺跡(1)、青山宮脇遺跡(3)以外では、成井原山向遺跡(5)、名木天神台遺跡(6)、VII層から遺物を出土した成田市椎ノ木遺跡(7)が知られる程度である。また名古屋横峰遺跡(8)では小形の尖頭器の出土が得られている。

縄文時代では、成井原山向遺跡(5)は爪形文土器と有舌尖頭器を出土した草創期の遺跡である。早期では井草期の貝塚・竪穴住居跡を検出したことで知られる神崎町西之城貝塚(9)が所在するほか、周辺でも沈線文系土器を主に出土する遺跡が多数発見されている。前期については、神崎町植房貝塚(10)があるが、現在までのところ、ほかには目立つ遺跡は知られていない。中期は神崎町古原遺跡(11)で阿玉台式土器が出土しており、今回の新シ山・柳和田台遺跡との関連で注目される。下総町では地点貝層を伴う名古屋坊作遺跡（名古屋貝塚）(12)が良く知られており、時期は加曽利E式と、後期の加曽利B式期である。坊作遺跡の北側に接する名古屋十二代遺跡(13)には後期加曽利B式土器を主体とする斜面の土器塚があり、加曽利B式土器以外では加曽利



第2図 周辺の遺跡(1:50,000)

E式、堀之内式土器があり、阿玉台式土器も若干得られている。後・晩期は低段丘上にある加曾利B3式から安行式の段階の大原野（龍正院）貝塚(14)や、縄文晩期の標識遺跡である成田市荒海貝塚も近接している。

周辺の弥生時代の資料は現状ではあまり多くない。中期の遺跡は南側対岸の台地に位置する中期前半須和田期の成田市石田遺跡(15)のほかには、新シ山・柳和田台遺跡(1)、根木名川中流域の成田市関戸遺跡の中期後半のものが知られている程度である。後期には尾羽根川流域にいくつかの遺跡がみつかっており、集落跡を伴うものは成井鶴ヶ峰遺跡(16)、中里原ノ台遺跡(17)、成田市長山遺跡(18)がある。

古墳時代には遺跡は増加を見せる。この地域は房総半島でも特異なほどの石枕の検出量があり、大和田玉作遺跡(19)のような一大玉作遺跡群が存在する。その伝統を引き継ぐかのような、古墳時代後期の名木不光寺遺跡(20)、名木大台遺跡等(21)の滑石製模造品製作関連の遺物を出土する遺跡が見られる。古墳は利根川に沿った地域に濃い分布が見られ、新シ山・柳和田台遺跡のある成井地区台地上には、遺跡西隣に成井華塚古墳群(22)が、東側には成井居山1・2号墳(23)等の円墳が散在している。青山中峰遺跡の台地には、東側に円墳4基からなる中峰古墳群(24)がある。さらに大須賀川との分水嶺から大須賀川の支谷に面する地域には25地蔵原・仙土台塚古墳群がある。集落では名木大台遺跡(21)、不光寺遺跡(20)、寺ノ下I遺跡(25)、天神台遺跡(27)が規模の大きなものである。

歴史時代には、この地域は下総國に属し、当初海上郡そして香取郡創設後は香取郡に含まれた。倭名抄によるところの香取郡健田郷・磯郷の地域に比定される。またその後の香取郡大須賀郷（保）に当たる。大須賀郷の北東側には今の神崎町を中心とした神崎庄が接して存在いた。集落跡では遠・地・上敷遺跡(28)、天神台遺跡(27)、寺ノ下I遺跡(26)、青山富ノ木遺跡(4)、青山中峰遺跡(3)、名木天神台遺跡(6)など多数挙げることができ、利根川沿いの広めの台地上には、古墳時代以降平安時代までの集落跡が濃密に分布するといえよう。また寺院跡では山田寺系瓦を出土した龍正院や中峰遺跡(29)の東岸の名木廃寺(30)、名木天神台遺跡(6)があり、また龍正院瓦窯跡も存在する。日本後紀によれば、805（延暦24）年まで、古東海道の駅家が荒海・馬敷に置かれていたという。前者は成田市荒海周辺、後者が大栄町南敷周辺に比定されている。そのルートは確定されていないが、この2駅を直線的に経由して潮来駅に向かうとすれば、ちょうど新シ山・柳和田台遺跡近辺を通過するルートも可能性があろう。

中世では、この地域は千葉氏の庶流大須賀氏の勢力圏となり、戦国期には後北条氏の支配域に組み込まれた。主な城跡として菊水城(31)、名古屋地区の名古屋城(32)・小帝城(33)・助崎城(34)を始め、本城の松子城(35)などが分布する。また大須賀氏菩提寺の古刹、大栄町大慈恩寺(36)も現存している。

北条氏滅亡後は、徳川幕藩体制の支配下に近世村落を形成し、明治以降、市町村合併が幾た

びか重ねられ、現在の行政区画に至っている。

参考文献

5 成井原山向遺跡

田村 隆他 1987 「先土器時代」『房総考古学ライブラリー』1 財団法人千葉県文化財センター

7 成田市椎ノ木遺跡

財団法人印旛郡市文化財センター 1987 「椎の木遺跡」『成田市産業廃棄物処理場予定地内埋蔵文化財調査報告書』

8 名古屋横峰遺跡

下総町教育委員会 1992 「大和田城址・名古屋横峰遺跡」『千葉県香取郡下総町内遺跡発掘調査報告』

9 神崎町西之城貝塚、10 植房貝塚

西村正衛 1984 『石器時代における利根川下流域の研究 貝塚を中心として』

12 名古屋坊作（名古屋貝塚）遺跡、13 名古屋十二代遺跡

小川和博他 1988 『名古屋貝塚－千葉県香取郡下総町名古屋貝塚の調査－』 下総町史編さん委員会

14 大原野（龍正院）貝塚

柿沼修平他 1983 「千葉県下総町龍正院（大原野）貝塚の調査」『奈和』第21号

16 成井鶴ヶ峰遺跡

下総町遺跡調査会 1988 『千葉県下総町成井鶴ヶ峰遺跡発掘調査報告書』

17 中里原ノ台遺跡

江尻和正他 1989 「中里原ノ台遺跡（町道名古屋中里線改良事業に伴う弥生・古墳・奈良時代集落址の調査」『千葉県香取郡下総町 文化財調査報告』VII 下総町教育委員会

18 成田市長山遺跡

石橋宏克他 1989 「成田市林北遺跡・長山遺跡－一般県道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書II－」『千葉県文化財センター調査報告』第163集 財団法人千葉県文化財センター

19 大和田玉作遺跡群

寺村光晴他 1973 『下総國の玉作遺跡』千葉県教育委員会

20 名木不光寺

永沼律朗 1993 「下総町不光寺遺跡 一般県道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査III」『千葉県文化財センター調査報告』第230集 財団法人千葉県文化財センター

21 名木大台遺跡

江尻和正 1979 『千葉県下総町名木大台遺跡 名木小学校移転新築に伴う埋蔵文化財調査』下総町教育委員会

鈴木美成 1989 『下総町名木大台遺跡第2次調査』下総町教育委員会

26 寺ノ下遺跡

成井寺ノ下I遺跡調査会 1986 『千葉県下総町成井寺ノ下I遺跡発掘調査報告書』

29 名木庵寺

沼沢 豊 1983 『下総町名木庵寺跡確認調査報告』 財団法人千葉県文化財センター・千葉県教育委員会

29 龍正院瓦窯跡

野村幸希他1982 「下総龍正院瓦窯跡の調査（予報）」『（立正大学）考古学研究室しゅう報』第22号

34 助崎城

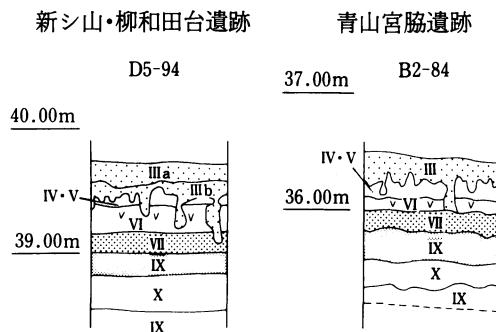
平岡和夫・伊藤一男1978 『助崎城址』 助崎城址遺跡調査団

その他

- 伊藤智樹 1985 『成田市芦田台 1・2 号塚—県道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書一』 財団法人千葉県文化財センター
- 萩原恭一他 1994 「下総町長稻葉遺跡—主要地方道成田下総建設に伴う埋蔵文化財調査報告書IV—『千葉県文化財センター調査報告』第251集 財団法人千葉県文化財センター
- 谷 旬他 1983 「関戸遺跡」『成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』II 財団法人 千葉県文化財センター
- 矢戸三男他 1975 『阿玉台北遺跡』 財団法人千葉県都市公社
- 岩堀角次郎他 1921 『千葉県香取郡誌』
- 沼沢 豊 1980 「千葉県の石枕」『房総風土記の丘年報』3
- 下総町教育委員会編 1981 『千葉県香取郡下総町埋蔵文化財分布地図』
- 越川敏夫・江尻和正 1982 「下総町で発掘された遺跡」『史談しもふさ』第3号
- 下総町教育委員会 1987 『下総町の遺跡と文化財』
- 下総町史編さん委員会 1990 『下総町史 原始古代中世編 史料集』 下総町
- 下総町史編さん委員会 1993 『下総町史 通史 原始・古代編』 下総町

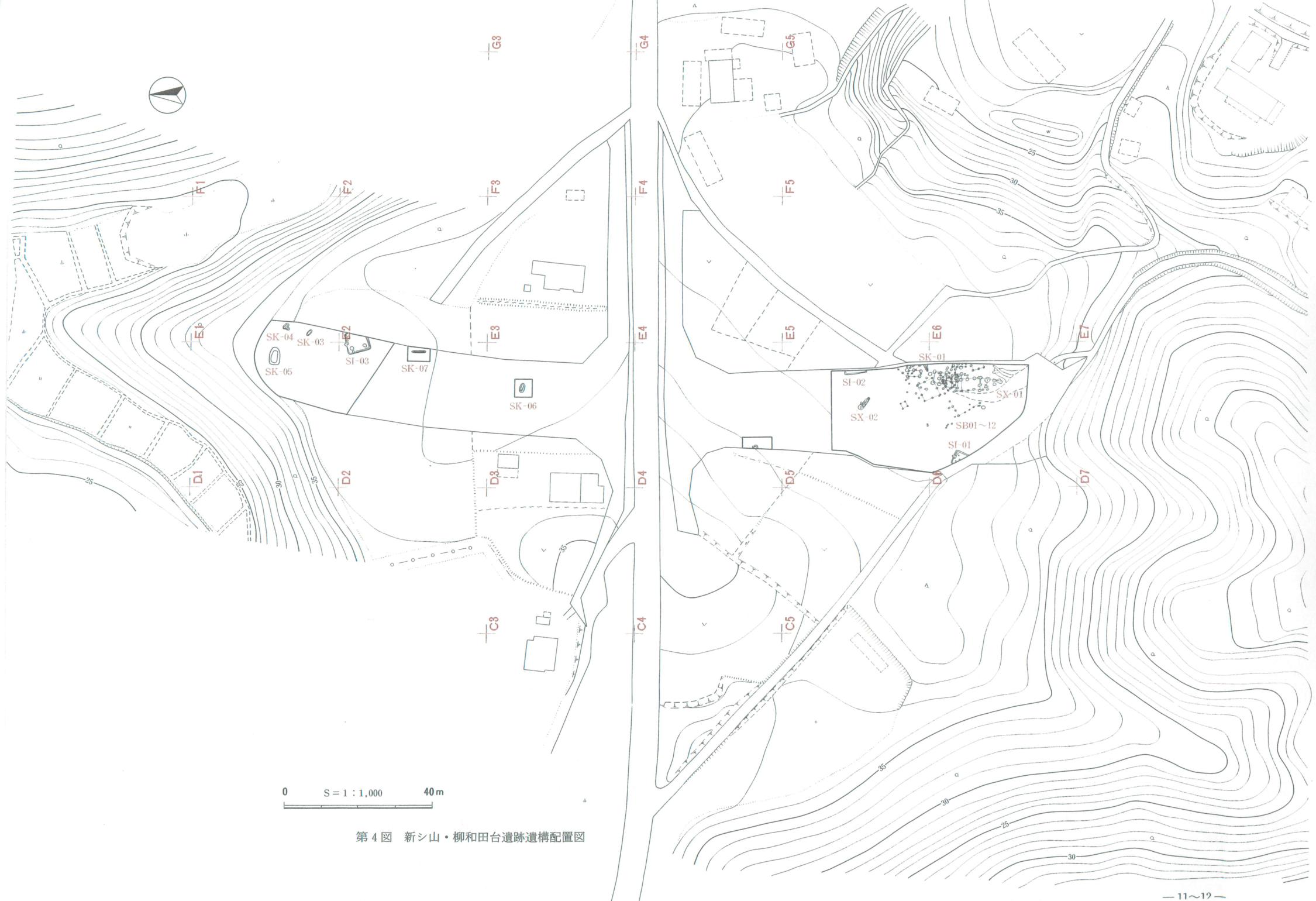
第4節 各遺跡の層序

旧石器時代の各遺跡の層序についてこの項で説明しておく。今回の報告書で掲載された遺跡で旧石器時代の石器集中地点が確認されたのは新シ山・柳和田台遺跡及び青山宮脇遺跡であり、この2遺跡を比較しながら説明していく（第3図）。



第3図 各遺跡の基本層序

- III層 黄褐色ローム土** いわゆるソフトローム層である。軟質化は下部が波状帶を示し、IV・V層までおよび、一部、新シ山・柳和田台遺跡ではVI層上部にまで及んでいる部分が確認された。また、新シ山・柳和田台遺跡ではIII層が比較的層が厚くやや色調が暗い上部とやや色調が明るい下部の部分に分層されたところがあった。これがどのような成因によるのか、また本来のローム層の何層に対応するのか不明であるが、上部をIII a 層、下部をIII b 層と呼称した。
- IV・V層 黄褐色ローム土** いわゆるハードローム層である。III層の軟質化により取り込まれたように層厚は薄い。下総台地では一般的であるがIV層とV層の識別は困難であり、同一の区分で把握している。
- VI層 明黄褐色ローム土** いわゆるAT層である。この層の区分について各遺跡で分層の基準に若干の差異がある。新シ山・柳和田台遺跡ではVI層をAT火山ガラスが下降拡散する範囲を厚くとっており、現在での下総台地の層序区分の認識からすればVI層の下半部が第二黒色帯上部（VII層）に対応することが考えられる。一方、青山宮脇遺跡ではVI層はAT火山ガラスの密集する部分をVI層としており現在の下総台地の基本層序に対応している。
- VII層 暗褐色ローム土** 第二黒色帯上部に相当する層である。上部に赤褐色スコリアを多く含む。VI層の分層の関係で新シ山・柳和田台遺跡でVII層と呼称している層はIX層になる可能性があるが第二黒色帯での分層の基準が明確でなく判然としない。青山宮脇遺跡では現在の下総台地の基本層序に対応している。
- IX層 暗褐色ローム土** 第二黒色帯下部に相当する層である。黒色スコリアを多く含む。下総台地北部では一般的であるが、IX層がa～cの三つの層に分層されることはなかった。また、青山宮脇遺跡の第2ブロックは谷頭部分に位置しており、土壤の水性化による変成作用と考えられるいわゆる「水つきローム」が確認され、IX層下部からX層にかけてローム層が一部変質していた。
- X層 明褐色ローム土** 立川ローム最下層に相当する。粘性は強い。二つの遺跡ではX層が分層される地点は確認されなかった。
- XI層 淡茶褐色ローム土** 武蔵野ローム最上層に相当すると思われる。粘性は非常に強い。



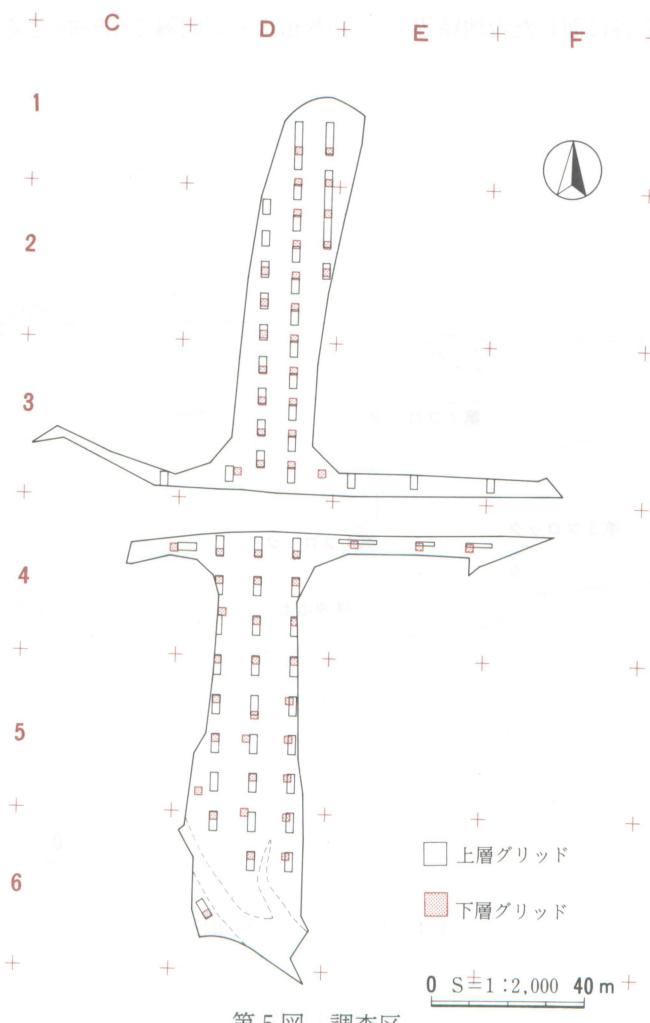
第4図 新シ山・柳和田台遺跡遺構配置図

第Ⅰ章 新シ山・柳和田台遺跡の調査

第1節 調査の経過

調査は、平成元年度に県道を挟んで南側、平成5年度に北側、それぞれ確認調査から本調査まで、通算期間で5月間行われた。確認調査では、対象範囲5,500m²に等間隔のグリッドを設定し実施した。ただし県道の脇は路線の方向に合わせたトレーニチの設定と変則的になっている。確認調査の結果、石器群、住居跡や土坑等が検出されたことを受け、千葉県文化課の指示により両年度合計で、上層1,990m²下層145m²の本調査範囲が決定され、調査を実施した。

検出された遺構は、下層で旧石器時代ブロック3か所、単独出土1か所、上層で縄文時代土坑3基、炉穴1基、弥生時代の土器棺に伴うとみられる土坑1基、奈良・平安時代住居跡3軒、



第5図 調査区

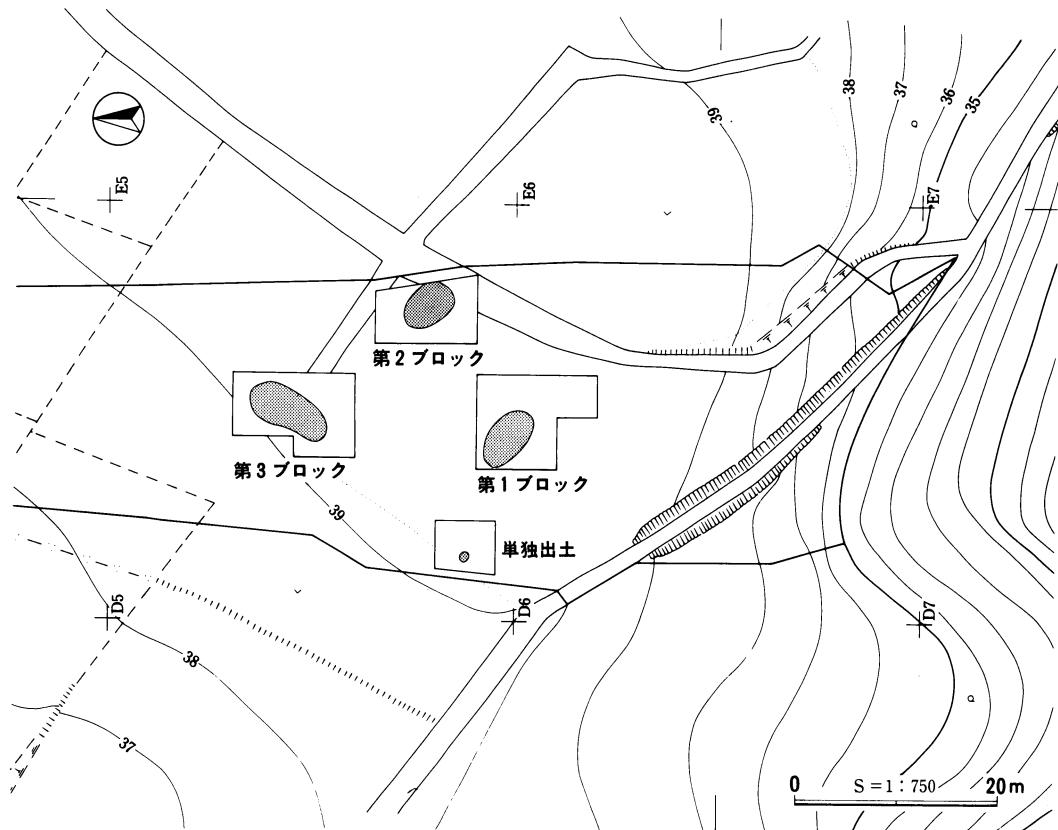
掘立柱建物跡13棟・土坑1基・井戸跡1基、ほかに時期不詳の道跡1条であった。

また本遺跡は町の遺跡台帳では柳和田台遺跡の名称が用いられていたが、事前協議・発掘調査の際は新山遺跡の遺跡名を使用した。千葉県埋蔵文化財分布地図では新シ山・柳和田台遺跡と併記されいる。小字名では北端部が新シ山に属し、大半の部分は柳和田台になっている。本来は頭に大字をつけ、次に代表的小字を付けて成井・・遺跡とすべきだが、どちらの小字名を採用しても混同するので、今回は「新シ山・柳和田台遺跡」という、県分布地図による小字名を併記した名称を用いることとした。

第2節 旧石器時代

1 概 要

旧石器時代の遺物は確認調査段階で4か所で検出された。本調査に移行する過程でその内の1か所は確認調査時の遺物のみの単独出土であることが確認され、その結果、遺物集中地点(ブロック)は3か所となった。これらの3か所のブロックは独立台地上に形成される新シ山遺跡の南側を開析する谷に面した台地縁辺部に、10数mほどの間隔で比較的近接して分布していた。



第6図 ブロック分布図

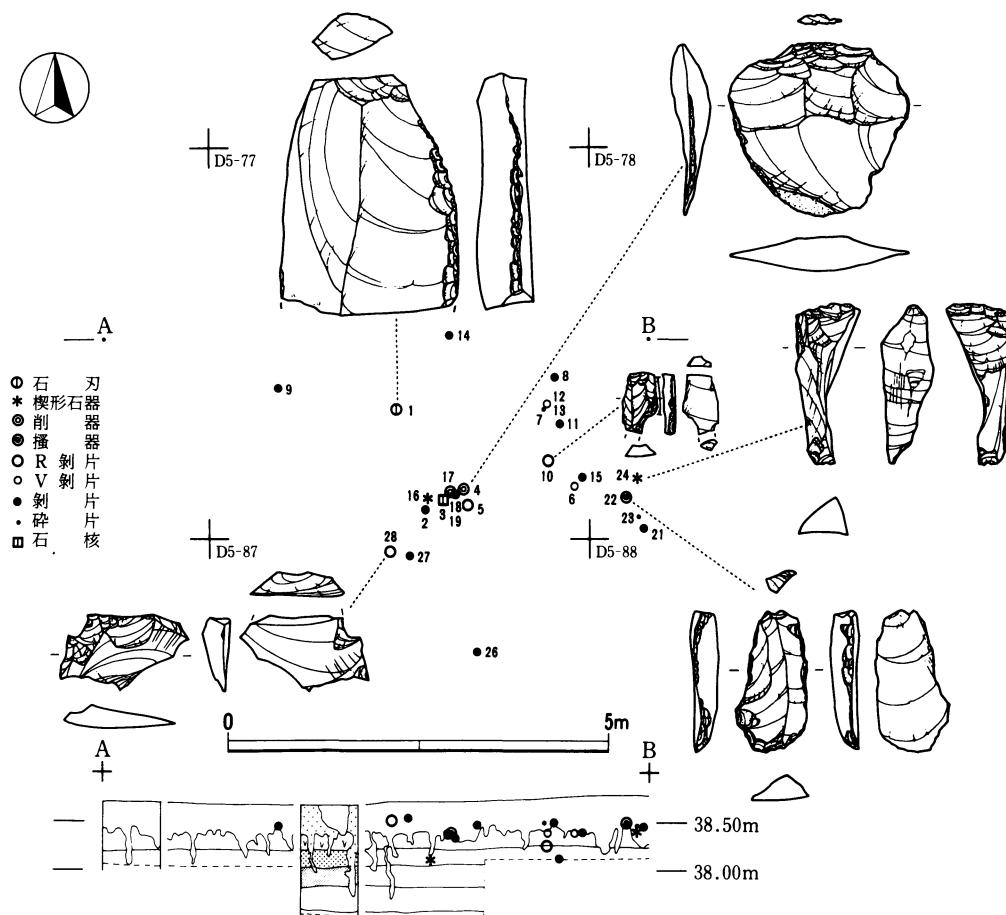
調査の結果、VI層上部に産出層準があるブロックが1か所、III層上面に産出層準があるブロックが2か所検出された。これらのブロックは出土層準から検討して2つの文化層を設定して報告する。第I文化層はVI層上面～III層下面に産出層準をもつ文化層で、第1ブロックが帰属する。第II文化層はIII層上面に産出層準をもつ文化層で、第2ブロック、第3ブロックが帰属し、単独出土の遺物も出土層準から第II文化層に含めて扱うこととする。第I文化層には大形石刃、小形石刃と楔形石器、搔器が伴出する特徴的な石器群が検出されている。第II文化層では中形から小形の黒曜石製石刃が認められる。

2 第I文化層

(1) 第1ブロック

分布状況（第7図、図版4）

調査区の南側東端に位置している。地形では南側に入り込む谷に向かって延びる尾根の頂部に位置し、現地形ではほぼ平坦な面に分布している。D5-77・78・87区にまたがって分布し

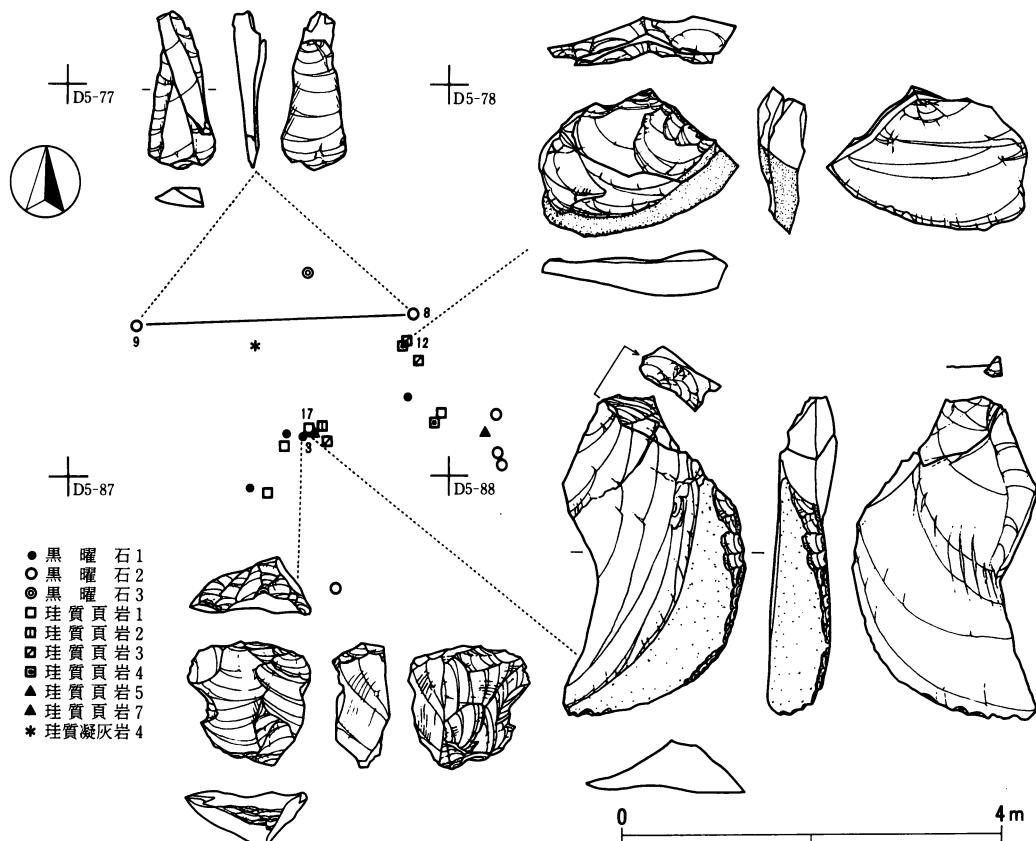


第7図 第1ブロック器種別分布図

ており、分布範囲は南北3.2m、東西3.8mを測る。やや東西に長い不整橿円形状を呈するが、東西に2つの遺物の集中部があり、その周りの遺物は散漫に分布している。垂直分布ではおよそ0.5mの高低差があり、土層断面への投影ではVI層下部からIII層下部にかけて分布し、VI層とIII層の境界付近に垂直分布の集中が認められる。この部分での土層堆積状況を見るとIII層（ソフトローム）がVI層上部を一部切り取るように厚く堆積しており、遺物の本来の産出層準はVI層上部に帰属すると考えられる。

母岩分布（第8図）

10母岩が認められる。母岩は珪質頁岩が7母岩14点、黒曜石が3母岩12点でこの2つの石材が拮抗するように大半の母岩を占める。珪質頁岩の母岩はごく少数で構成されるかあるいは単独母岩のものが多く、当ブロックでの石器製作の痕跡が希薄である。一方、黒曜石の母岩は石核、小剝片、碎片を含み、集中的な石器製作はみられないものの、その痕跡を留めている。他の母岩には珪質頁岩が1母岩あるにすぎない。母岩と器種の関係をみると、大形石刃は珪質凝灰岩1の単独母岩のものであるが、小形の石刃、楔形石器は黒曜石の母岩で製作されている。大形の横長剝片と搔器は珪質頁岩の母岩である。当ブロックには横長剝片の接合、小石刃の接合を示す好資料があるが、それらは近接あるいは最も近い資料との接合を示している。



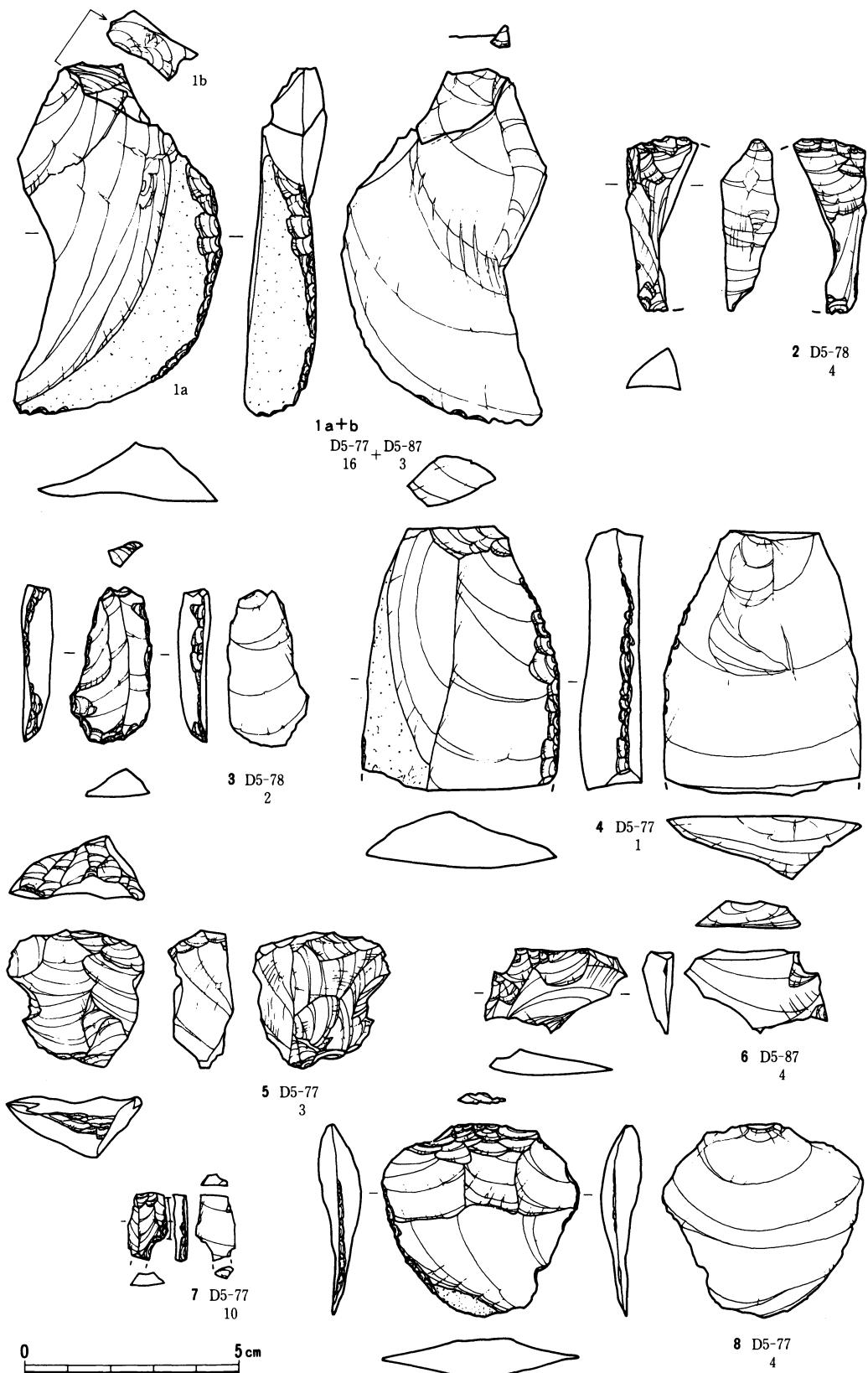
第8図 第1ブロック母岩別分布図

出土遺物（第9・10図、第1表、図版5・6）

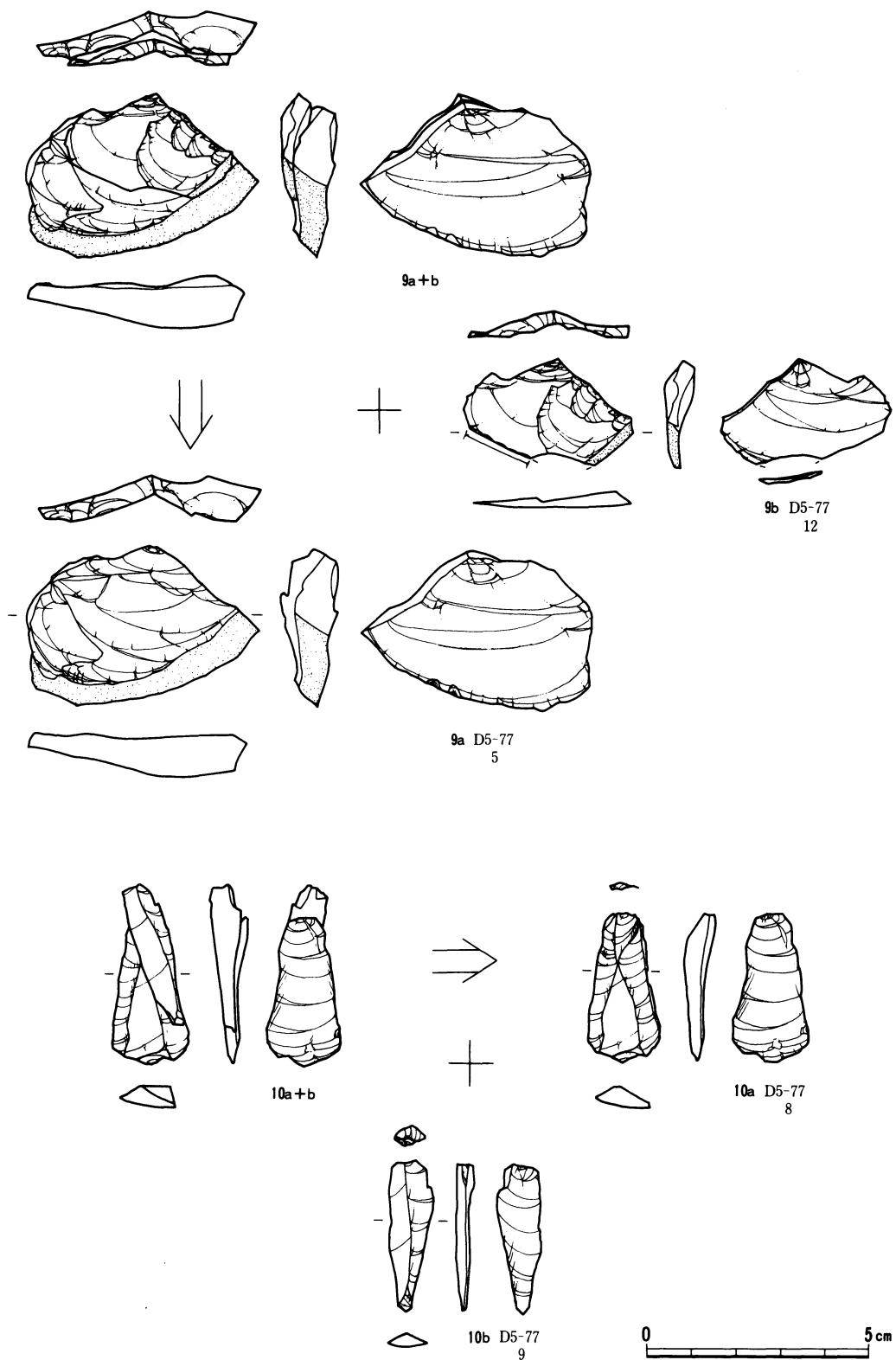
出土総点数は28点で、器種構成は石刃3点、削器3点、搔器1点、楔形石器2点、石核1点、二次加工を有する剝片3点、使用痕を有する剝片2点、剝片11点、碎片2点で構成される。

1・8は削器とした。1は珪質頁岩の大形の縦長剝片を素材として自然面の円く張り出した側縁に連続した調整が施されて、器体末端部は刃こぼれ状の小剝離痕が認められる。8は頭部調整が顕著な横長剝片の円みのある背面右側縁に平坦な細部調整が施され、左側縁にも疎らに微細な調整が認められる。2は楔形石器である。素材の主要剝離方向を観察すると、厚味のある横長剝片を縦位に用いて上下からの両極技法により製作されたもので、その後、縦方向からの加撃により器体を斜めに切り取られるように欠損している。3は搔器である。石刃素材の端部を弧を描くように急斜角な調整加工を行い刃部としている。器体側縁部から基部にかけてもブランディング状の調整加工が認められる。4は大形石刃である。器体下半部を欠損するが、背面右側縁には連続した平坦加工が看取され削器的な機能を有していたと思われる。5は黒曜石石材の石核である。正面に上端方向からの剝片剝離が認められるが、上下端の打点部は顕著な潰れが見られ、おそらく台石を用いた両極剝離が想定される。6・7は二次加工を有する剝片である。6は上端の切断面から背面に微細な調整が見られる。7にも切断面からの調整が認められ、下端部には器体を抉るような調整が認められる。ナイフ形石器の欠損品とも考えられるが、形状が判然としないために二次加工を有する剝片とした。

9a・bは横長剝片どうしの接合資料である。山形に剝離された打面の頂点を打点として直線的に打点が後退して横長剝片を剝片剝離している。剝離された剝片の背面構成から少なくとも4回以上の剝片剝離が想定される。10a・bは小石刃の接合資料である。10aの背面右側の剝離面に10bの小石刃が接合している。剝片剝離の工程順に見ていくと、10a背面中央部と10b背面左側の大きな剝離面の剝片剝離、10bの背面右側の剝離面の剝片剝離、10bを作出する剝片剝離、10a背面左側の剝片剝離が行われる。この一連の剝片剝離は10bに残存する打面と同一打面からの剝片剝離と推定される。その後10a背面の上部の剝片剝離が行われて打面更新され、10a自体の作出という剝片剝離が行われている。背面に残存する剝離痕から、10a作出以前の剝片剝離は何れも小石刃状の小形で細い石刃を作出していたと考えられる。また、10bに残る打点部の潰れや器体下端方向からの剝離痕から、これらの剝片を作出する過程で両極技法が介在している可能性が考えられ、残核は5の石核に類似する楔形石器状の石核が想定される。



第9図 第1ブロック出土石器(1)



第10図 第1ブロック出土石器 (2)

第1表 第1ブロック出土石器計測表

No	遺物番号	器種	最大長×最大幅×最大厚 (mm)	重量 (g)	図版 番号	打面 形状	打面 調整	頭部 調整	背面構成				打角 (°)	調整 部位	母岩		
									C	I	II	III	IV				
1	D5-77-1	石刃	57.7×46.3×14.2	40.10	4	平線	—		1	2				95	R	珪質凝灰岩1	
2	2	剥片	18.2×10.2×3.0	0.30					2								珪質頁岩1
3	3	石核	30.6×31.9×14.9	11.80	5												黒曜石1
4	4	削器	44.4×46.6×9.2	13.90	8	平線	T	○	3	1				120	L T	珪質頁岩2	
5	5	R剥片	38.3×52.2×10.8	17.50	9 a	複複	D	○	3					113	T	珪質頁岩3	
6	6	U剥片	17.9×15.9×3.7	0.80		線	—	T		2	2						珪質頁岩4
7	7	碎片	11.2×8.9×2.5	0.20		線	—	T		2	1	1					珪質頁岩4
8	8	剥片	32.0×16.0×7.2	2.20	10 a	複複	D			4	1			120	RM	黒曜石2	
9	9	剥片	33.1×9.2×4.0	0.90	10 b	複複	D			1	1			109		黒曜石2	
10	10	R剥片	14.9×9.0×3.3	0.50	7	—	—	—		3					R	黒曜石1	
11	11	剥片	35.5×27.8×6.3	6.80		C	T	○						63		珪質頁岩3	
12	12	U剥片	23.1×38.5×6.3	3.40	9 b	多	D	T	○	3				111	T	珪質頁岩3	
13	13	剥片	21.4×13.5×5.1	0.90		—	—	—		3							黒曜石3
14	14	剥片	18.6×14.3×3.6	1.00		線	—	T		4							珪質頁岩1
15	15	楔形石器	17.1×11.4×3.1	0.50		線	—	T		2	4						黒曜石1
16	16	削器	81.2×48.4×13.0	38.70	1 a	—	—	—	○	1							珪質頁岩1
17	17a	剥片	18.6×14.4×3.3	0.90		—	—	—		2	1						珪質頁岩5
18	17b	剥片	21.7×16.3×3.1	0.80		平	—	—	○	3	1			100			珪質頁岩1
19	18	剥片	39.7×32.5×3.1	3.40		—	—	—		1	1	1	1				珪質頁岩6
20	D5-78-1	剥片	21.7×14.0×4.7	1.00		複複	D	—	○	2	1			111			黒曜石2
21	2	搔器	35.5×18.3×2.5	5.00	3	多	D	—	—	3				113			珪質頁岩7
22	3	碎片	8.2×7.9×2.0	0.10		—	—	—		2							黒曜石2
23	4	楔形石器	41.4×14.7×17.8	5.60	2	線	—	T									黒曜石2
24	D5-87-1	剥片	18.3×18.8×3.0	0.80		線	—	T		5	1						黒曜石2
25	2	剥片	21.8×14.3×4.3	1.10		線	—	T		2	2						黒曜石2
26	3	剥片	7.9×23.5×14.0	2.20	1 b	複複	—	T		1	1			127			珪質頁岩1
27	4	R剥片	18.9×33.2×7.1	2.70	6	—	—	—		2	1				R		黒曜石1

3 第II文化層

(1) 第2ブロック

分布状況（第11図、図版4）

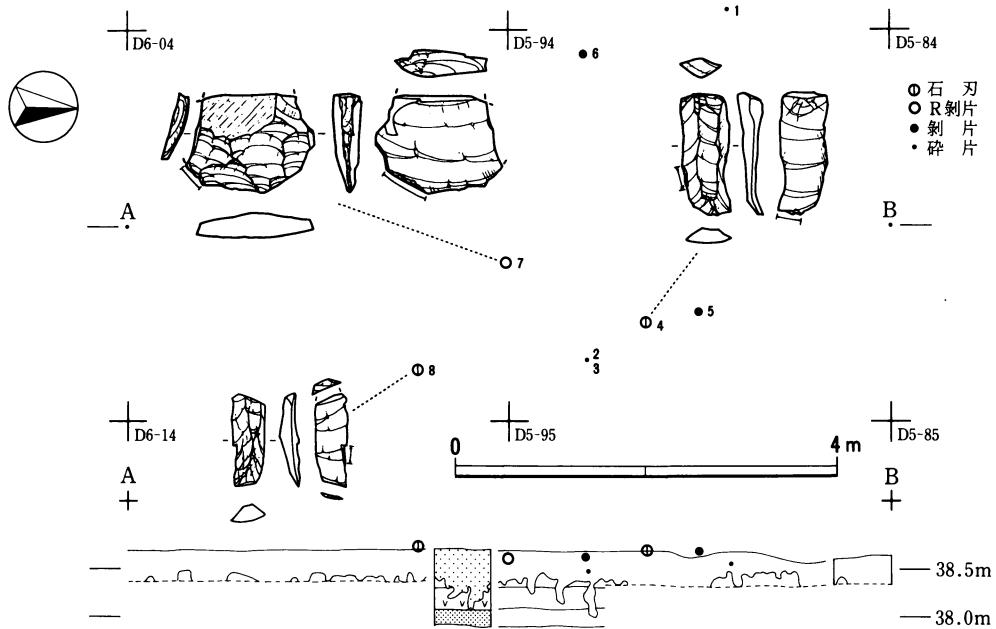
調査区の南側中央部に位置している。地形では南東側に入り込む谷に向かう尾根南端部に位置し、現地形では緩やかに南方向に傾斜している。D5-93・94、D6-04区にまたがって分布しており、分布範囲は南北3.3m、東西3.7mを測る。遺物が少数で構成されるため不整形状を呈し散漫に分布している。垂直分布ではおよそ0.3mの高低差があり、土層断面への投影ではIII層上部から上面に分布し、III層上部に垂直分布の集中が認められる。III層以上の土層断面が残っていないためIII層とII層の境界が不明であるが、遺物の本来の産出層準はほぼIII層上部に帰属されると思われる。

母岩分布（第12図）

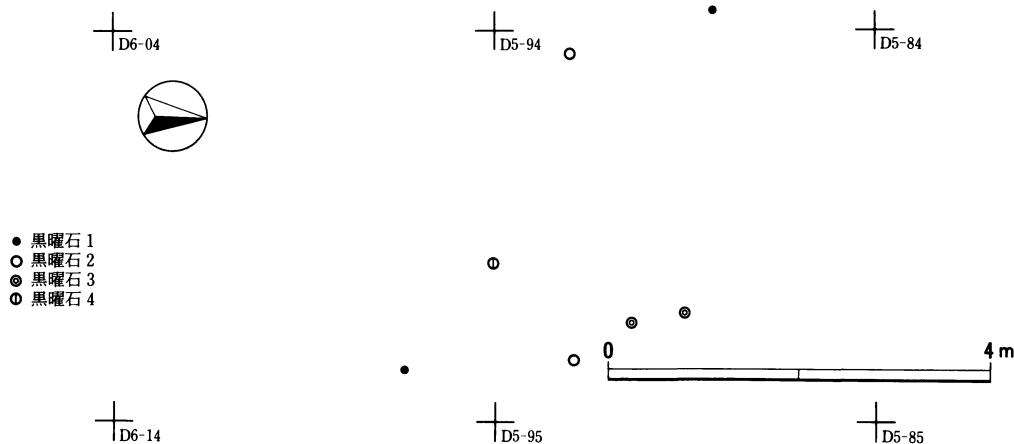
4 母岩が認められる。母岩はすべて黒曜石母岩であり、他の石材は存在していない。2点で構成される母岩が3母岩、単独で構成される母岩が1母岩を数える。いづれもごく少数で構成されるため石器製作の痕跡は希薄で、碎片の存在がその痕跡を留めるにすぎない。母岩と器種の関係をみると、特定の器種と母岩との結びつきは特に看取されない。

出土遺物（第13図、第2表、図版6）

出土総点数は8点で、器種構成は石刃2点、二次加工を有する剝片1点、剝片2点、碎片3点で構成される。1・2は石刃である。1は被熱のためか光沢が鈍い黒曜石3の母岩を素材としている石刃で、器体先端がやや細くなる形状を呈する。打面は平坦打面であり背面左側縁に

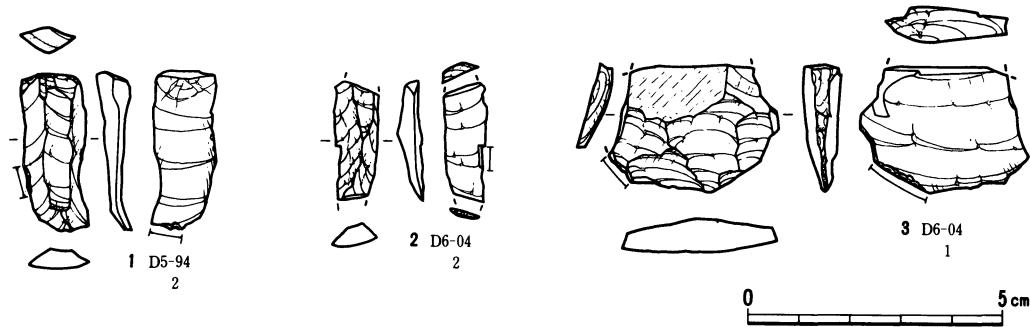


第11図 第2ブロック器種別分布図



第12図 第2ブロック母岩別分布図

微細剝離痕が認められる。2は縞状に不純物が入る粗雑な黒曜石1の母岩を素材としている石刃で、上下を欠損する非常に細身のものであるが、細石刃とするにはやや躊躇されるものである。3は二次加工を有する剝片である。背面左側縁及び裏面下端部にやや急斜角な調整加工が認められる。



第13図 第2ブロック出土石器

第2表 第2ブロック出土石器計測表

No	遺物番号	器種	最大長×最大幅×最大厚 (mm)	重量 (g)	図版 番号	打面 形状	打面 整調	頭部 調整	背面構成				打角 (°)	調整 部位	母岩	
									C	I	II	III	IV			
1	D5-93-1	碎片	8.0×7.6×2.7	0.10											黒曜石1	
2	D5-94-1a	碎片	9.1×12.4×2.7	0.20											黒曜石2	
3	1b	碎片	7.5×10.6×1.9	0.10											黒曜石2	
4	2	石刃	30.5×12.6×6.5	1.80	1	平		T		2	1			112	LM,T	黒曜石3
5	3	剥片	22.2×19.0×5.2	1.50		複		T		3	1			110		黒曜石3
6	4	剥片	22.3×20.7×4.1	1.50		複	D			1	1			108		黒曜石2
7	D6-04-1	R剥片	24.4×33.3×7.2	5.90	3	—	—	—	○	1	4				T	黒曜石4
8	2	石刃	23.0×8.5×4.5	0.70	2	—	—	—		2	1	1			RM	黒曜石1

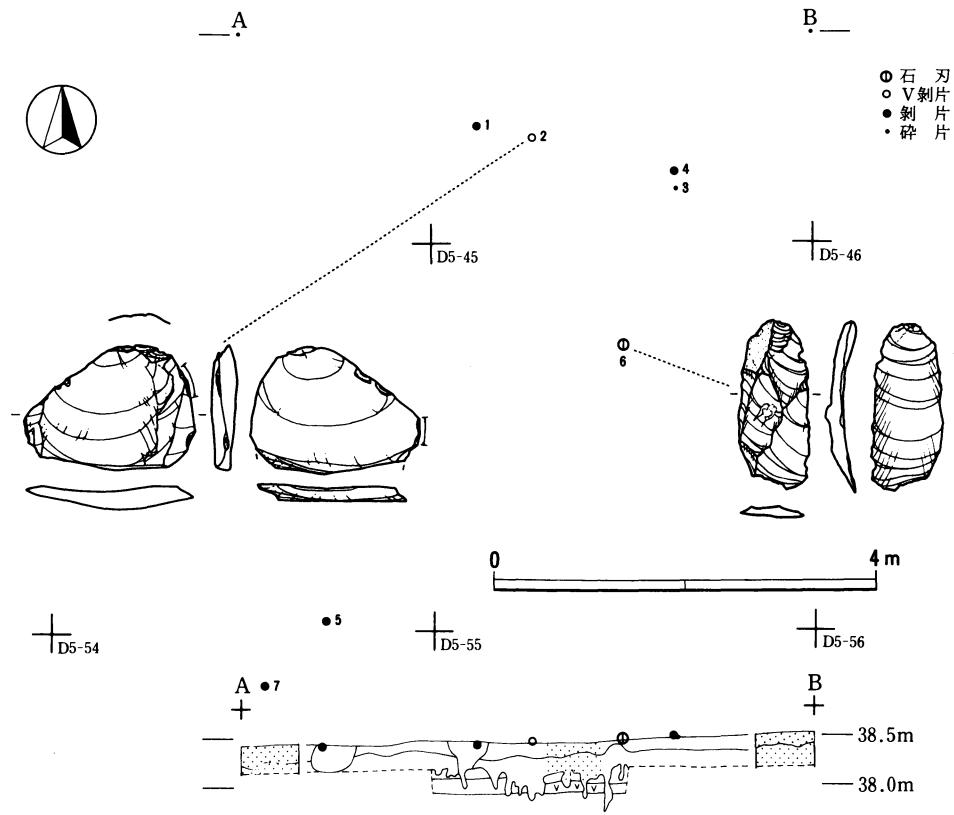
(2) 第3ブロック

分布状況（第14図）

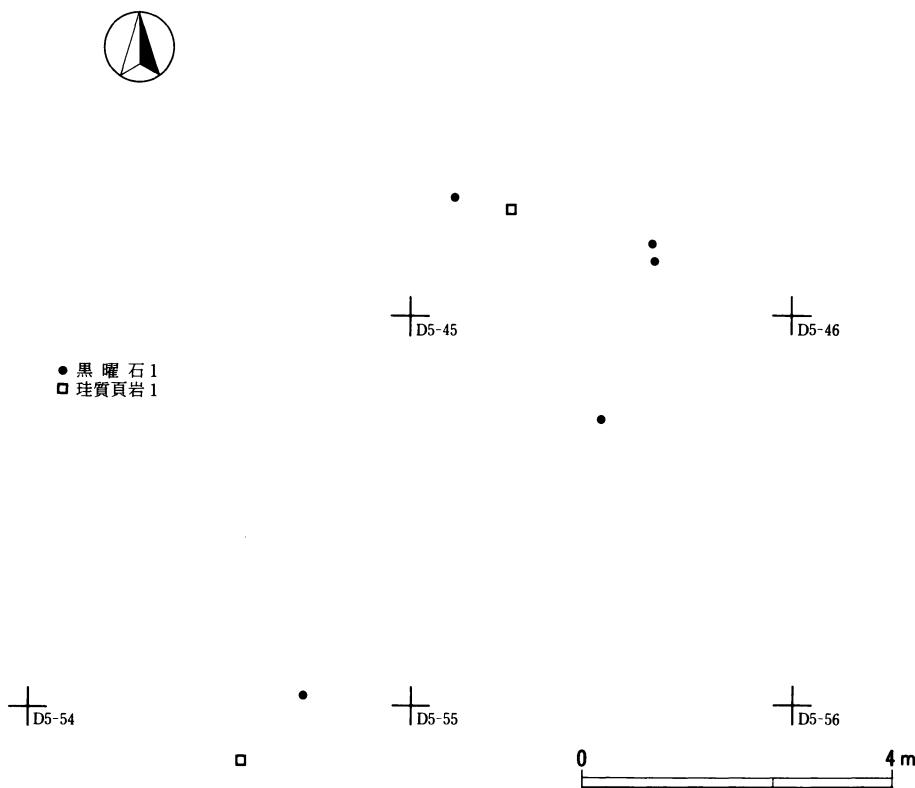
調査区の中央部に位置している。地形では南側に入り込む谷に向かう尾根西側にあたり、現地形では緩やかに北西方向に傾斜している。D 5 - 35・45・44・54区にまたがって分布しており、分布範囲は南北6.0m、東西4.4mを測る。北側に5点がややまとまって分布し南西方向に約4 m離れて2点が分布する。垂直分布ではおよそ0.2mの高低差があり、土層断面への投影ではIII層上部からIII層上面に分布し、III層上面に垂直分布の集中が認められる。III層以上の土層断面が残っていないためIII層とII層の境界が不明であるが、遺物の本来の産出層準はほぼIII層上部に帰属すると考えておく。

母岩分布（第15図）

2母岩が認められる。母岩は黒曜石母岩と珪質頁岩である。黒曜石1の母岩が5点で構成され北側の分布のまとまりを形成している。珪質頁岩1は2点で構成される母岩で約6 m離れて



第14図 第3ブロック器種別分布図

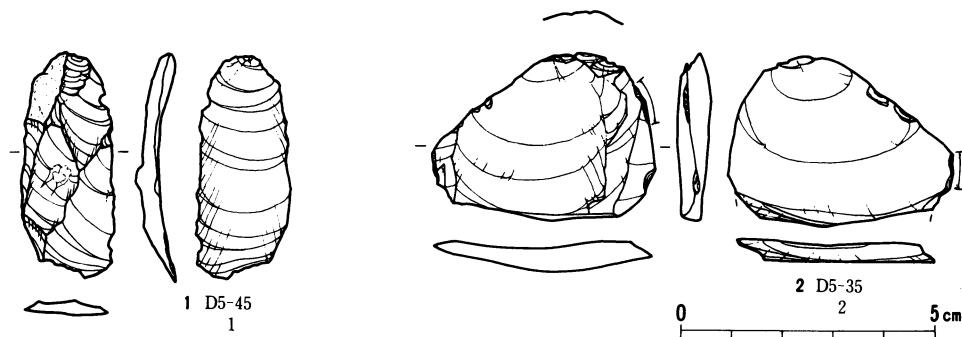


第15図 第3ブロック母岩別分布図

分布していた。黒曜石 1 の母岩は透明度の強い良質の石材で、石刃が含まれている。珪質頁岩 1 の母岩を素材として使用痕を有する剝片が存在する。いずれも少数で構成される母岩であるため石器製作の痕跡は希薄である。

出土遺物（第16図、第3表、図版6）

出土総点数は7点で、器種構成は石刃1点、使用痕を有する剝片1点、剝片4点、碎片1点で構成される。1は石刃である。打面は点状打面で背面には自然面を残置しやや斜めの器体上下方向からの剝離痕が観察される。2は使用痕を有する剝片である。線状打面の幅広な素材で、背面及び主要剝離面にまばらに微細剝離痕が認められる。



第16図 第3ブロック出土石器

第3表 第3ブロック出土石器計測表

No	遺物番号	器種	最大長×最大幅×最大厚 (mm)	重量 (g)	図版 番号	打面 形状	打面 調整	頭部 調整	背面構成				打角 (°)	調整 部位	母岩
									C	I	II	III	IV		
1	D5-35-1	剝片	10.1×16.2×9.0	1.10		複線			2					78	黒曜石 1
2	2	U剝片	31.6×44.4×6.2	8.00	2	—	T		4	1					珪質頁岩 1
3	3	碎片	11.2×3.8×2.4	0.10		—	—	—							黒曜石 1
4	4	剝片	17.5×17.7×4.2	0.90		—	—	—	3	1	1				黒曜石 1
5	D5-44-1	剝片	16.6×9.3×1.4	0.30		点	T		3						黒曜石 1
6	D5-45-1	石刃	42.6×17.7×7.3	2.50	1	点	T	○	3	2					黒曜石 1
7	D5-54-1	剝片	27.0×16.6×5.6	2.30		—	—	—	○	1					珪質頁岩 1

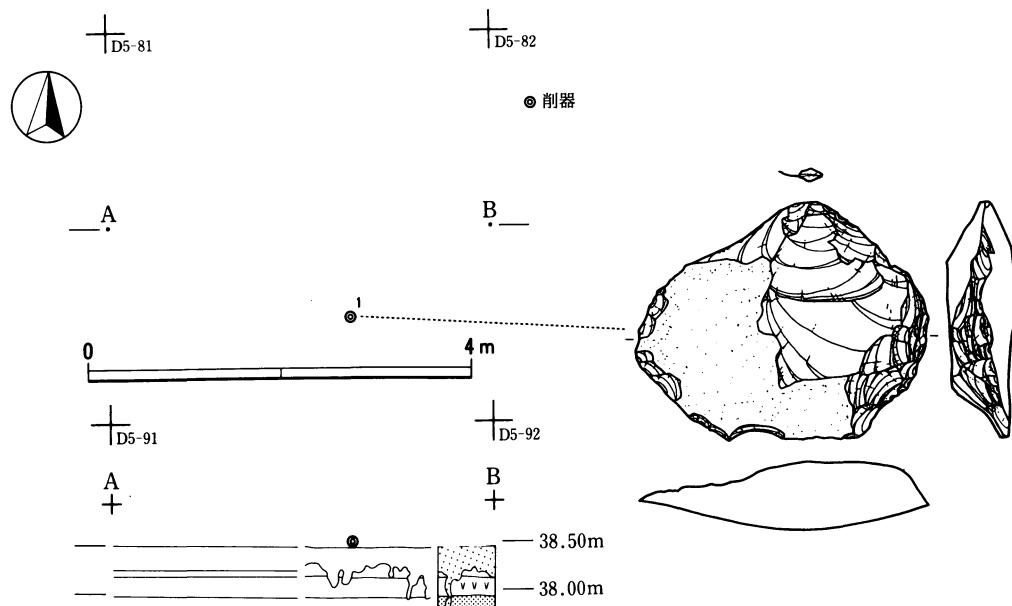
(3) 単独出土

分布状況（第17図）

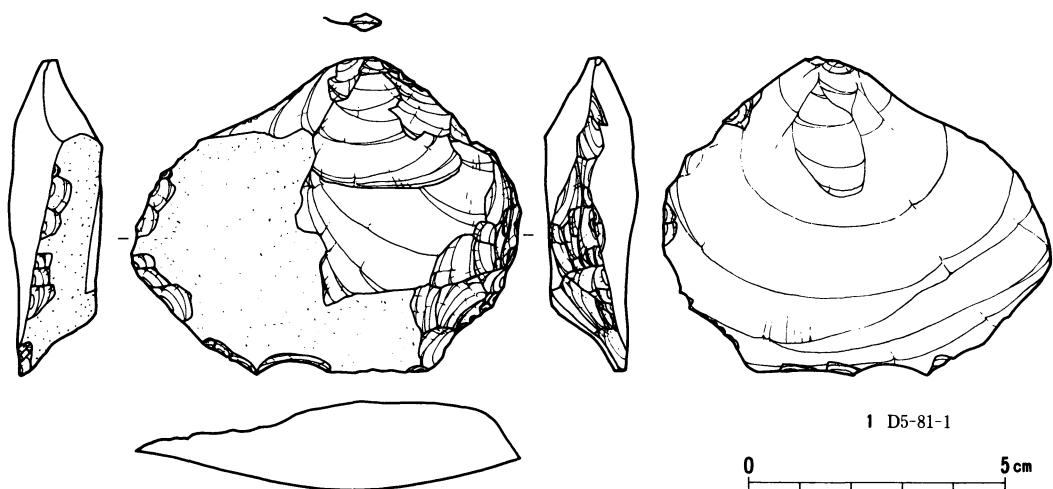
確認調査でD 5-81区から遺物が検出された。周囲を拡張して調査したが、ほかに遺物が検出されず、単独出土のものであった。出土地点は谷に向かう尾根西側に当たり、現地形では緩やかに西方向に傾斜している。土層断面への投影ではIII層上面に分布していた。良質の珪質頁岩の母岩を石材としており器種は削器であった。

出土遺物（第18図、図版6）

1は削器である。打面部を山形に作り出しており、打面は点状打面に近い小さな平坦打面である。厚みがあり、広く自然面を残す横長剝片の右側縁に、平坦調整と急斜角な調整加工が集中的に施されて刃部を形成している。左側縁から末端部にかけても調整加工が認められ、周縁を広く刃部として機能させたものとみられる。



第17図 単独出土器種分布図



第18図 単独出土石器

第4表 単独出土出土石器計測表

No.	遺物番号	器種	最大長×最大幅×最大厚 (mm)	重量 (g)	図版 番号	打面 形状	打面 調整	頭部 調整	背面構成				打角 (°)	調整 部位	母岩	
									C	I	II	III	IV			
1	D5-81-1	削器	59.8×75.6×18.1	74.80	1	平	D	T	1	2	1			130	L	珪質頁岩 1

第3節 繩文時代以降

1 遺構

(1) 特殊遺構

S X-01 (第22図)

南側の斜面には谷地から斜めに台地に上がる舗装された道があり、さらに現用の畠に登る小道が分れている。本遺構はその小道から分かれた登り口部分である。上部は埋没して畠となっていて、斜面を切土して設けられており、最下部には道の硬化面があった。使用された時期は不明であるが、畠に近世後期の常滑焼貯水甕が残されており、少くともその時期には畠に通じる道として使われていたと思われる。

S X-02 (第19図、図版7)

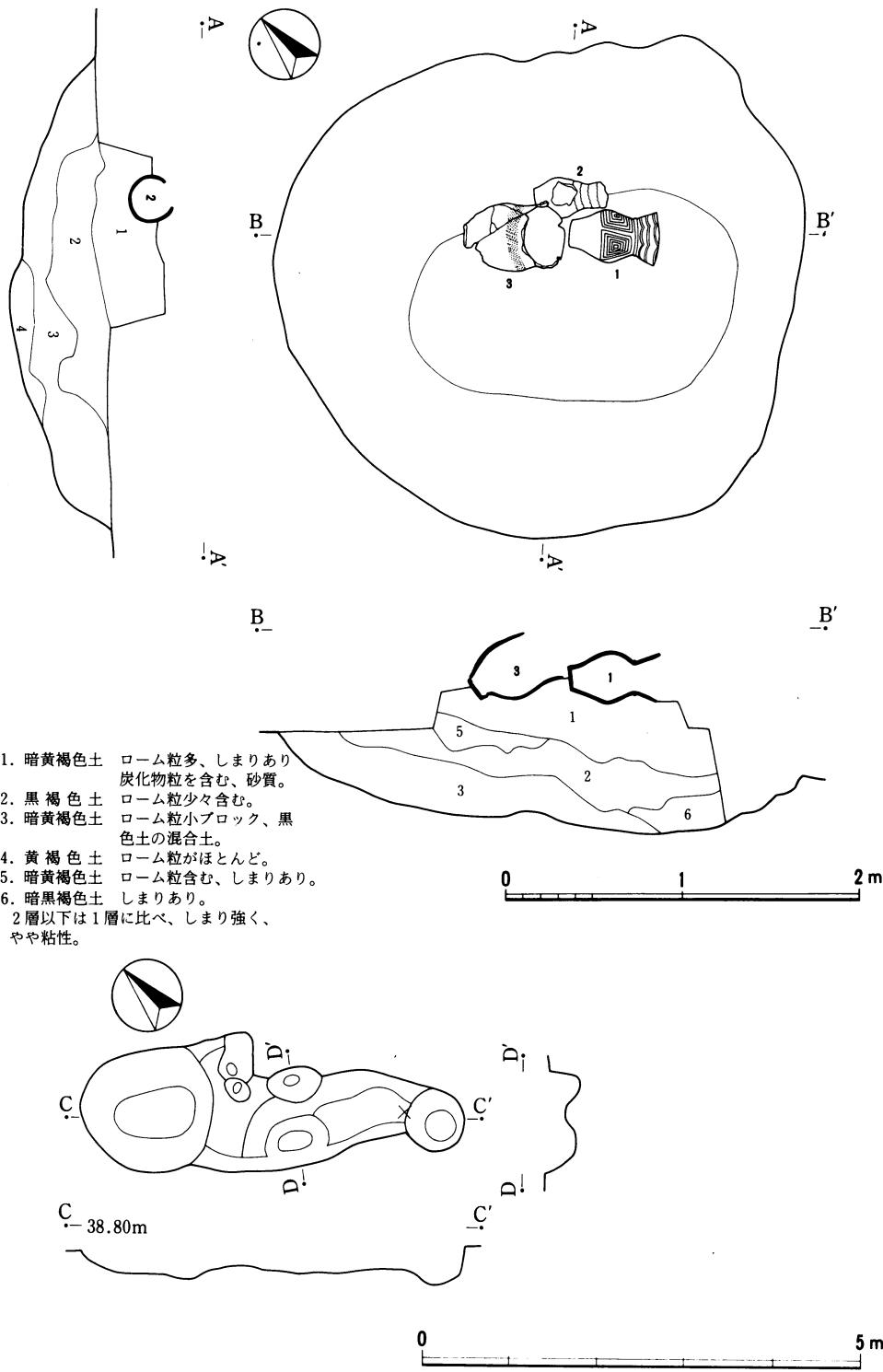
確認調査時にD 5-55区で表土から25cmの深さに土器の一部を検出した。確認グリッドを精査したところ、黒褐色及び暗褐色の落込みを確認し、切合った遺構の存在が予想された。本調査での精査の結果、土器は甕1体と壺2体になった。土器が掘込みのある遺構に伴うものか、更に確認面まで周囲の土を掘下げたところ、土器の下位に黒色の落込みを持つ土坑が検出された。

土坑は、土器直下が長径1.5m、短径1.35mの楕円形を呈する。更に南東に向かい、浅い不整形の溝状遺構が約3m伸びている。直下土坑の深さは土器確認面から55cmを測る。覆土は黒褐色ないし暗褐色のやや粘性のある締まった土である。壁・底がソフト中のため不明瞭である。

弥生土器は口を南東に向けて横たえた状態であった。1の壺の中から複数枚の二枚貝破片が検出された。南東の溝状部からは奈良・平安時代の土器が出土している。

南側の溝状部と楕円形の土坑とは性格が異なる。溝状部は出土遺物からみて時期が下るであろう。また形態が不整形で攪乱の可能性が高い。弥生土器は土坑の上面に横たえられた状態であり、下部の土坑が土器に伴うかは出土状態だけでは即断できない。ただ偶然に直上に土器が配置されることは考えにくいので、伴う土坑である可能性が高い。

なお、出土した貝は保存状態が悪く、種同定は不能だが、海産のものとみられる。



第19図 SX-02

(2) 穫穴住居跡

S I -01 (第20図、図版 8)

調査区南西端、D 6 区で検出した。一部が農道で削られており、北東側のみ約 3 分の 2 しか調査できなかった。平面形は一辺4.1m程度の方形を呈するとみられる。深さは0.3mほどで、覆土は自然堆積である。床はよく踏み固められており、壁の残りも良く垂直な立ち上がりがみられた。壁溝を有し、浅く細いピットがみられる。柱穴にしては浅いが、配置をみると柱穴としてよからう。4 本柱を基本とする構成が考えられる。カマド東わきに径0.3m、深さ10cmほどの皿状の窪みがあり、覆土には焼土が多量にみられた。

カマドは北壁にみられる。遺存状況は悪く、袖は細長く残る程度であった。煙道部の壁への掘込みは少なく、また火床面の掘込みは全くない。袖の内側や火床面はよく焼けしまっている。カマド内には焼土がみられないが、3 個体の土師器甕が出土しており、焼土を搔き出し、土器をカマド内に廃棄したものとみられる。

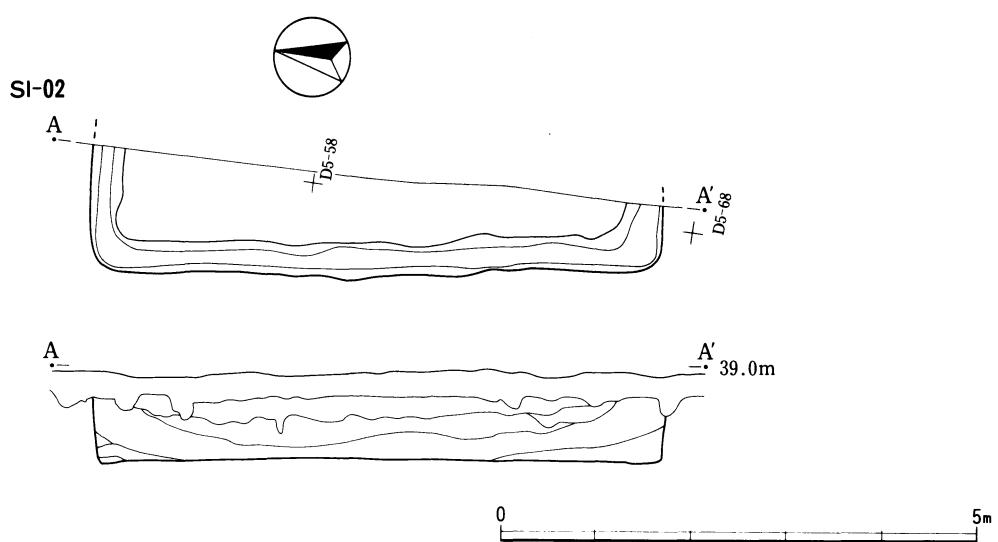
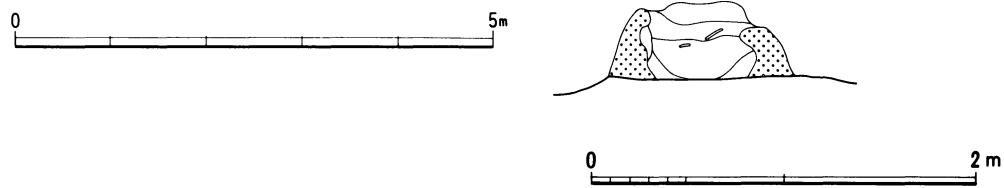
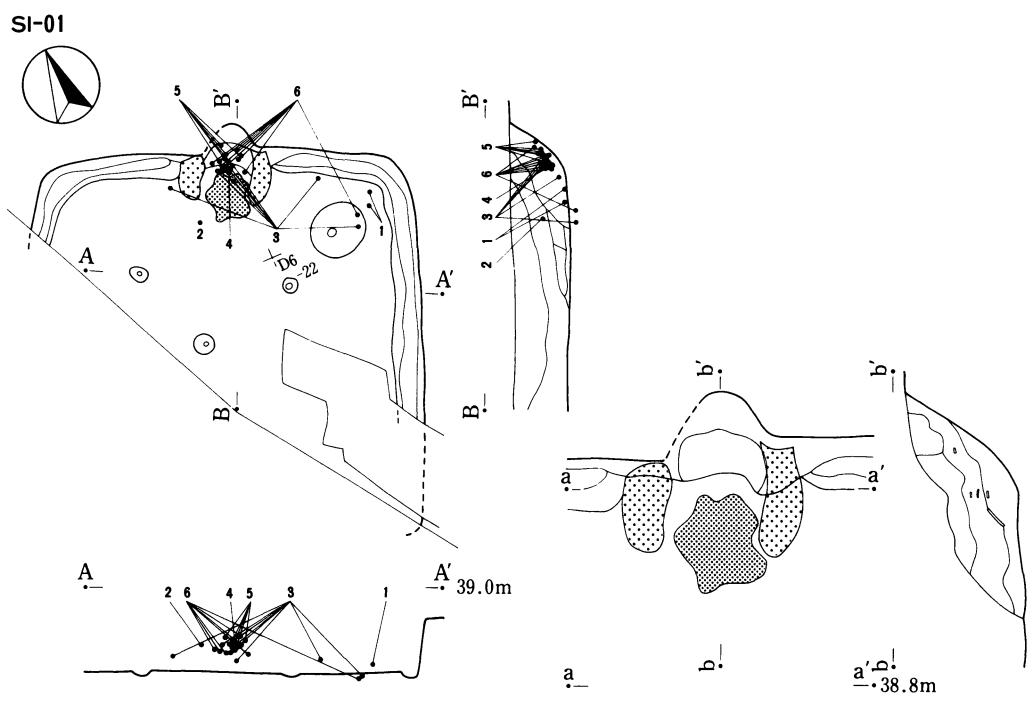
S I -02 (第20図、図版 8)

D 5 区、南調査区の東側境界に位置し、西壁際のみが調査可能であった。覆土は全体的に黒味を帯びており自然堆積である。壁は約 3 m の長さがあり、床面まで表土下約 0.3 m の深さがある。床は硬質で、壁溝がめぐっている。柱穴・カマドは調査範囲からは検出できなかった。

S I -03 (第21図、図版 9)

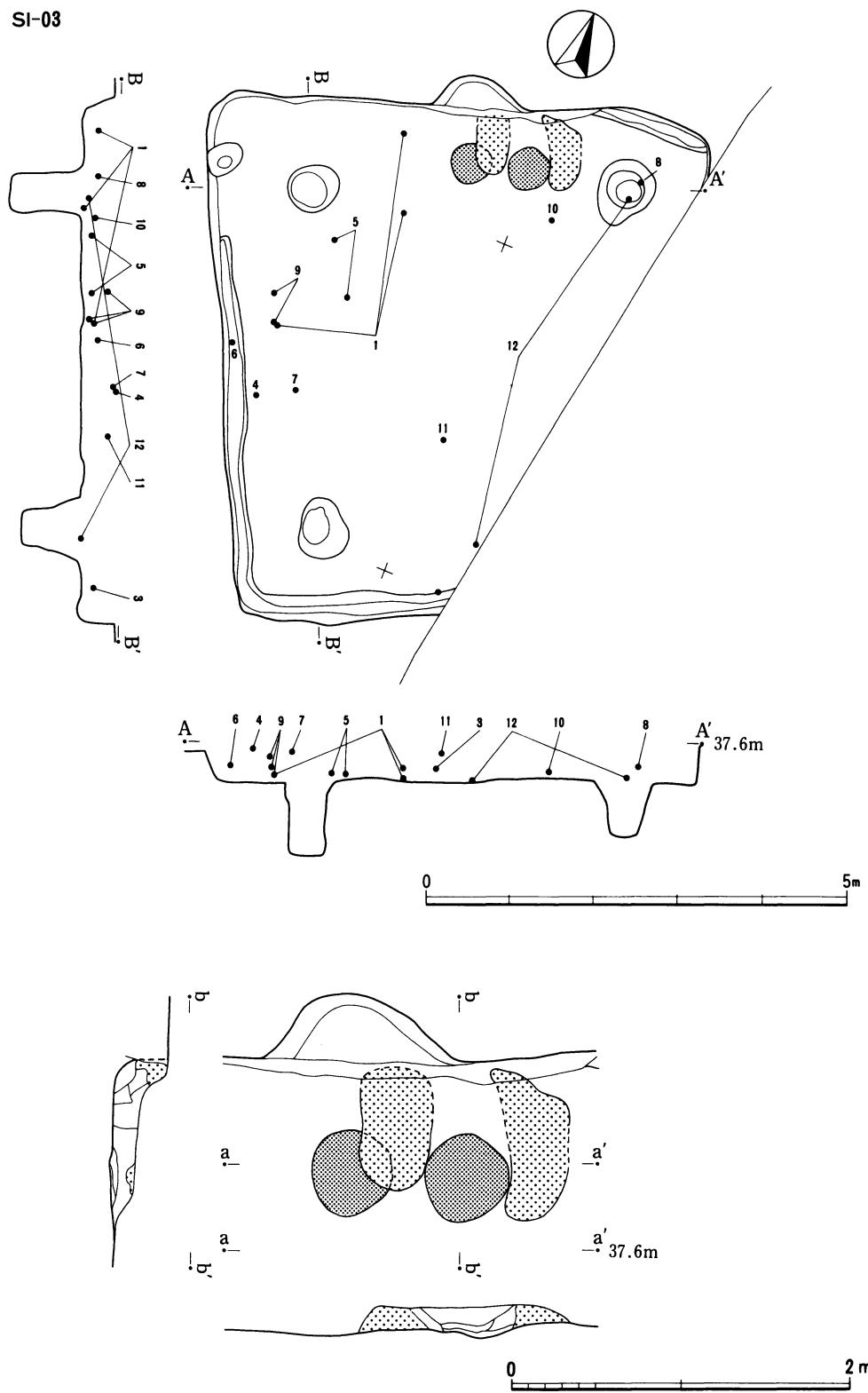
D 2-19・E 2-10を中心北調査区の東境界にかかっており、南東コーナー部は調査区外になり、調査できたのは約 8 割の部分になる。全体にトレッチャの搅乱が激しく、残存度は悪かった。

1 辺 6 m の方形を呈し、確認面からの掘込みは約 0.4 m を測る。遺構内は褐色系の土が自然堆積していた。溝はカマド下と左側を除き巡っている。柱穴は径 40 cm 前後、深さ 65 cm ~ 85 cm のもので、4 本柱のうち 3 本が見付かっている。セクション面からは柱痕状とされるものもあった。北壁中央部にカマドがあったが、東わきに作り直されている。旧カマドは浅いながらも大きめの煙道部の張出しを持つ。旧カマド底面と住居の床面とは 10 cm ほど段差があり、新カマド構築時に床が一段下げられているとみられる。新カマドは搅乱で非常に残りが悪く、袖は基部のみを検出したのみである。火床面は軽く窪んでいる。煙道部の張出し部分は、搅乱が多く不確実だが、ないかあってもごく僅かとみられる。

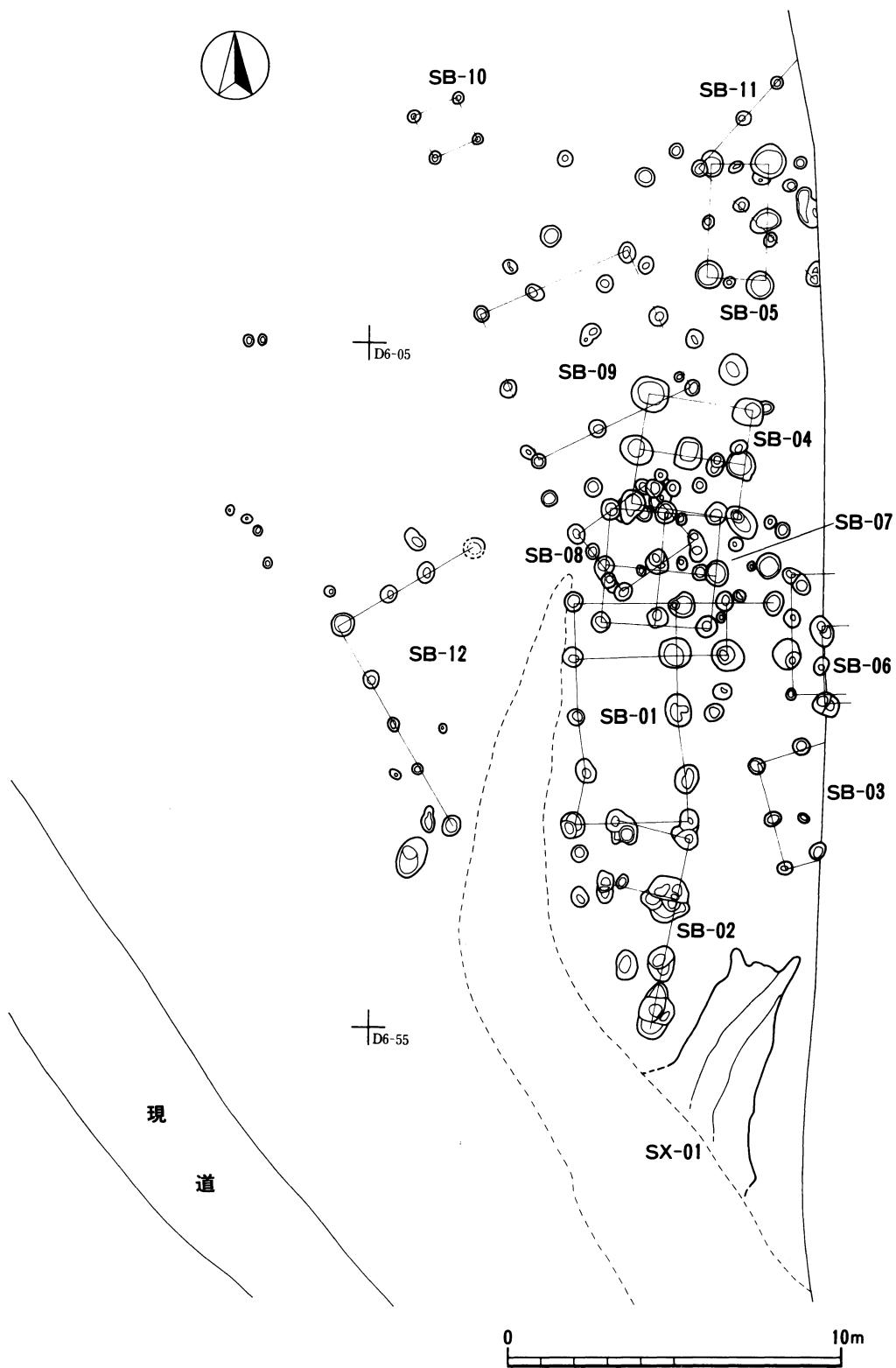


第20図 SI-01・02

SI-03



第21図 SI-03



第22図 掘立柱建物跡配置図 (1/100)

(3) 掘立柱建物跡・柵列（第22図、図版9）

調査区南端部、遺跡全体としては南東部縁辺に当たる箇所に密集して掘立柱跡が検出された。現場で122のピット番号をふったが、重複のあるものを入れれば140近くなる。さらに調査区東側にも広がっている。これらの配列を検討した結果、13組の建物跡・柵列の組合せが認められた。S B-03・06・05・11については調査区外に延びており、配列は流動的である。柱穴の中には、柱痕が認められるものはなかったが、「柱の当たり」のような非常に締まった面を有する例はかなり認められた。

遺物は縄文土器、奈良・平安時代土師器等が覆土から少量出土している。ただしピット群に確実に伴うものはない。縄文土器は単独で出土するものは少なく、土師器類を伴う例が多い。中・近世の遺物は18世紀以降の焼締めの擂鉢片1点のみである。従って、この掘立柱建物跡とピット群は奈良・平安期の所産とみたい。

S B-01（第23図、図版10）

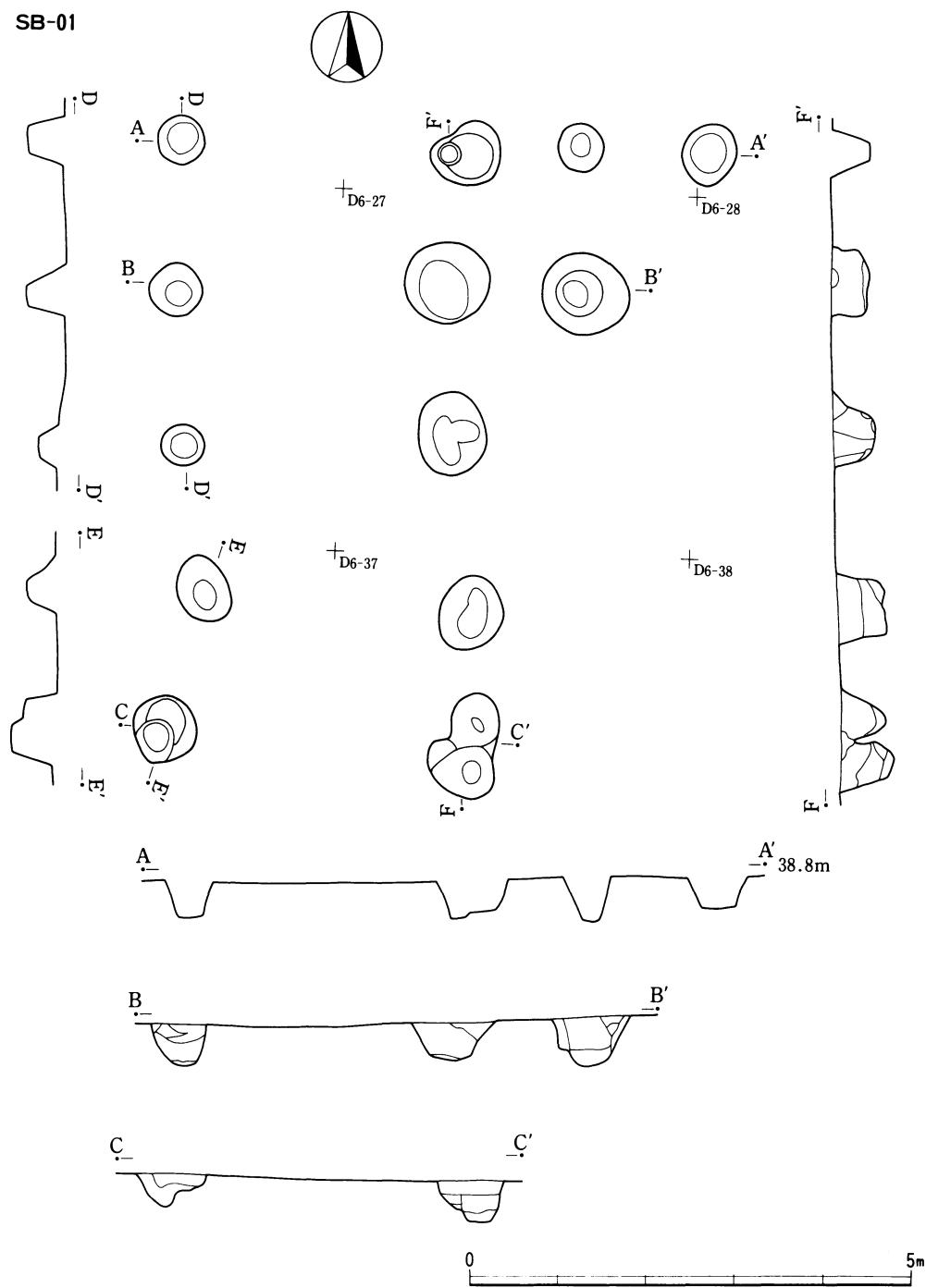
D6-27区を中心に、桁行4間（6.4m）×梁行1間（3.0m）の南北に長い柱配列を持つ建物跡である。長軸はほぼ南北（N-3°-W）に向く。北側に1間幅の張出し部を持つ。南側の2列は軽く「くの字」に曲がり一直線に並ばない。柱間寸法は母屋部の桁行では1.7m（南端は1.4m）、梁間で3.0mである。張出し部は梁間で1.5mである。柱の径は0.5～1.2m、深さは確認面から0.2～0.6mである。柱痕はなかったが、ほとんどものに底部付近によく締まった刻褐色土の層がみられた。また上部の覆土は黒褐色の軟質な混ざった土であり、柱が抜取られた痕跡とみられる。

S B-02（第24図）

調査区の最南端部、D 6-47区周辺、古道の下り口わきの台地へりにある。1間×4間だが、南西部には柱穴が検出されず、柵列の可能性がある。桁行5.4m、梁行2.18mで、桁行間は1.8mwを測る。長軸はほぼ南北方向（N-13°-E）を指す。建替えないし抜取りのためか径が一定ではないが、もともとは0.5～0.6mほどであったろう。深さは0.5～0.75cmで南側の斜面よりの柱穴が深くなっている、高さも低い。

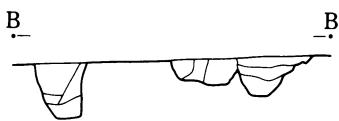
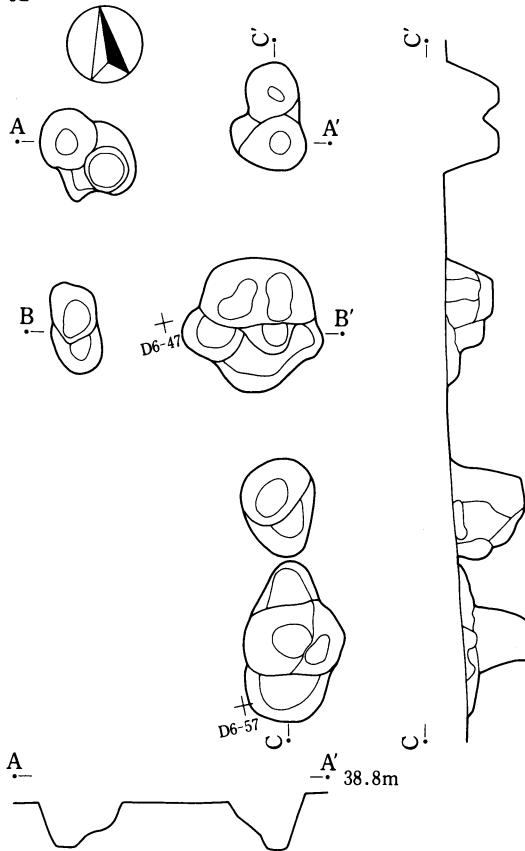
S B-03（第24図、図版10）

ほぼD 6-38区内に位置する。南北柱が2間となっているが、東側が調査区外となっているため、全体は不明である。柱間寸法は1.55mである。40cmから70cmの径で深さ20cmから30cmの小規模なピットで構成されている。覆土は締まった黒褐色土であった。

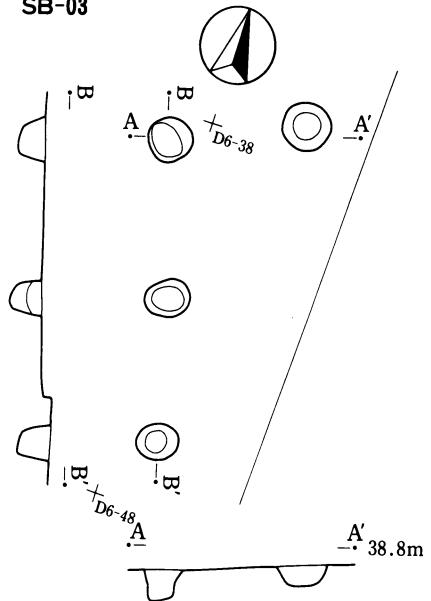


第23図 SB-01

SB-02



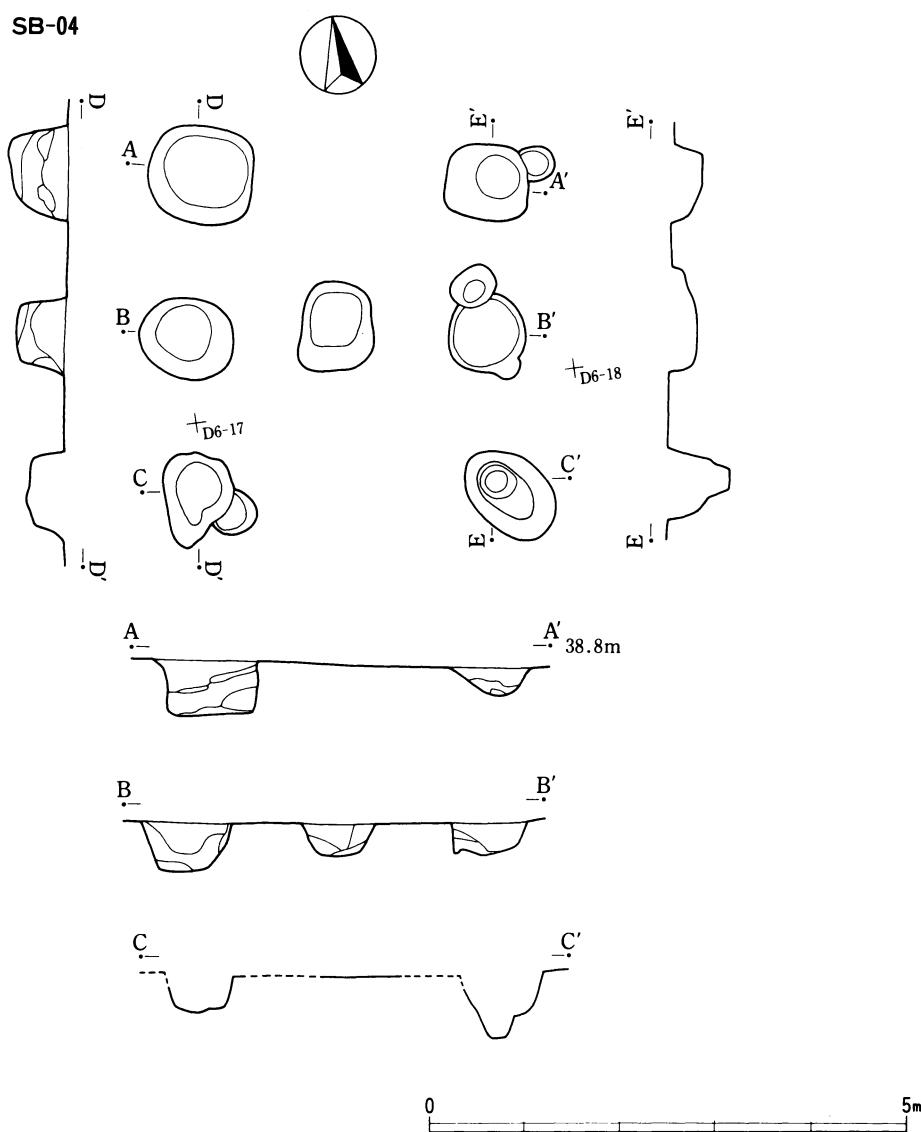
SB-03



第24図 SB-02・03

SB-04 (第25図、図版10)

D 6-07・17区を中心に位置する。桁行2間×梁行1間の配置を基本とし、さらに配列の中央心位置に柱穴を有する。桁行1.6m、梁間3.2m(第2列で1.6m)、長軸方位はN-9°-Eをとる。南側でSB-07、08と重複している。柱穴径は1m前後、底径も大きい。深さは北東隅の1本の二段掘りのものを除けば、おおむね浅めである。柱の当たり様の硬化層が認められたものがあった。



第25図 SB-04

S B-05 (第26図、図版10)

D 5-87・17区を中心に位置する。北側でS B-05と重複している。桁行2間×梁行1間、南北に長い長方形に配列される。西側桁中央の1本は径0.4m前後と小さいが、ほかは径が大きい。深さは0.5m以内で浅めである。半数が下部に硬化層を持つ。

S B-06 (第26図、図版10)

D 6-17・28区にあり、ほぼ東西の向きに、3間と2間の柱列が0.9mの間隔を空けて並ぶもので、2棟の重複であり、東側の調査区外に残りの柱穴が存在するとみられる。径は0.3mから長軸1mになるものまであるが、深さは0.5～0.7mでほぼ一定している。底面の中心が偏っているものがあるが、抜き取り痕でもあろうか。

S B-07 (第27図、図版10)

D 6-17区を中心に位置する。掘立柱建物群中央部、最も柱穴の密集している地点にあり、S B-08・01・04と重複している。軸をほぼ南北に合わせ、2間×2間の総柱の配列を持つ。桁行3.3cm、梁行は3.2mで、ほぼ正方形をなし、柱間寸法は桁行1.5m～1.7m、梁間1.6m～1.7mを測る。柱穴は径0.5～0.7m、深さ0.5m～0.6mでほぼ一定している。

S B-08 (第27図、図版10)

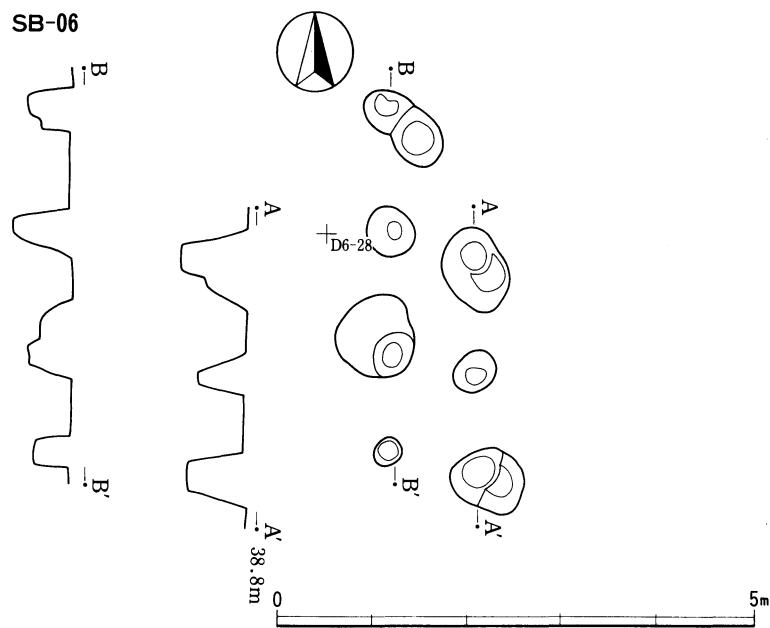
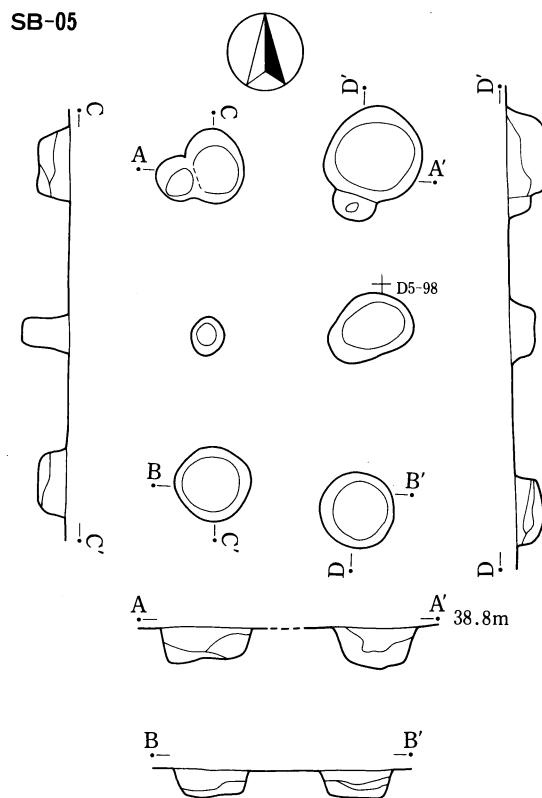
D 6-16・17区、柱穴密集域にあり、S B-04・S B-07と重複している。桁行2.5mないし2.7m、梁行2.1mないし2.2mの2間×2間又は2間×3間の構成をなすもので、柱穴の重複が多く、配列を確定しづらい。長軸方位はN-54°-Eである。柱間寸法は桁行1.25ないし1.35m、梁間は2×2間ならば1.0m～1.2m、2間×3間ならば0.5～1.0mになる。

S B-09 (第28図、図版10)

掘立柱建物群中央部北側、D 5-96・D 6-06区に位置する。桁行の中間柱が西に寄る2間×2間の柱配置を持つ。若干桁行き方向に長い方形をなす。桁行き4.8m、梁行き5.1mで、中間寸法は桁行き1.7mないし2.0m、梁間2.2mないし2.3mである。長軸方位はN-66°-Eで、北側に位置するS B-10とほぼ同じである。柱穴の大きさは径0.4m～0.6とそろっているが、谷寄りのものが深く、中間の梁の柱穴は浅い。

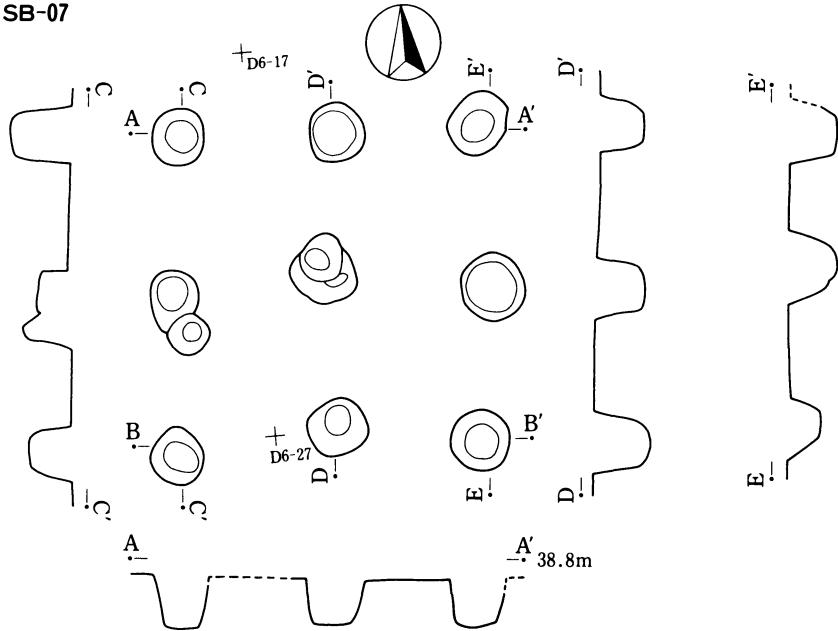
S B-10 (第28図、図版9)

掘立柱建物群の北端、D 5-85区に1軒だけ隔離されたように離れて位置する。四本柱がやや平行四辺形気味の方形に配され、柱間は約1.4mと小形である。柱穴は0.3～0.4mの径で、深さ

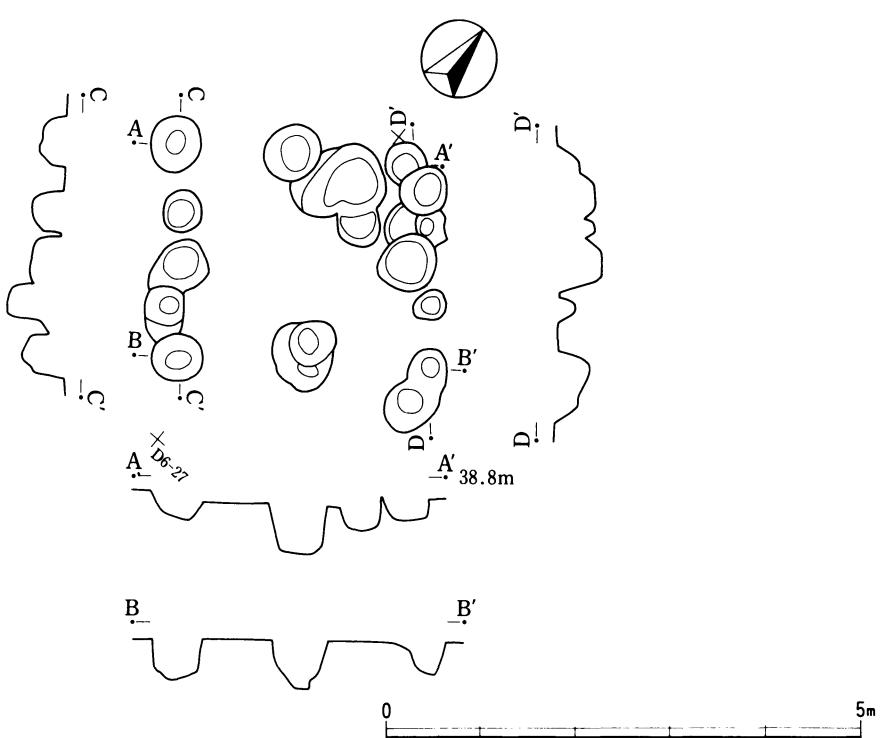


第26図 SB-05・06

SB-07

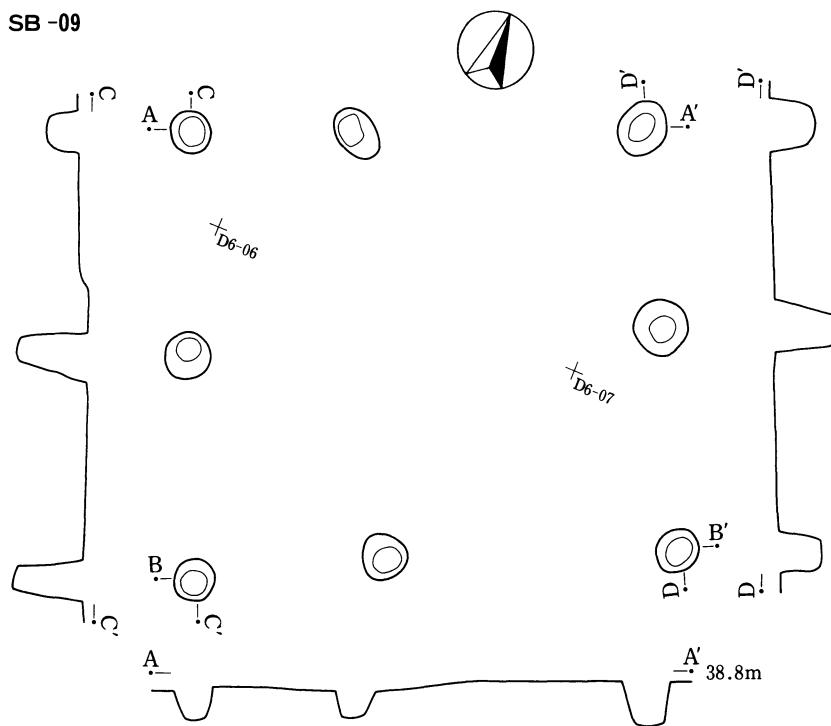


SB-08

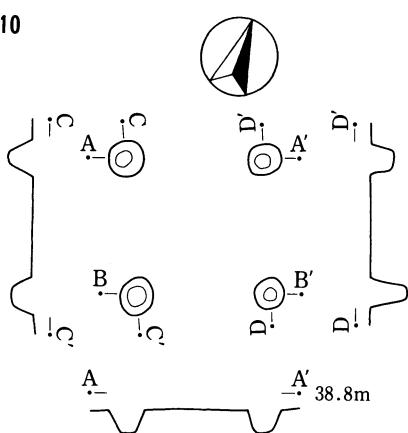


第27図 SB-07・08

SB-09



SB-10



第28図 SB-09・10

0.25～0.4mと小規模なものである。

S B-11 (第29図、図版10)

掘立柱建物群の最北部、D 5-98杭を中心に位置する。南西部でS B-05と重複関係にある。東側が調査区外で規模は不明だが、検出されている部分だけから推定すると3間×2間で桁行4.7m、梁行3.5m、中間寸法桁行1.3～1.75m梁間1.5ないし2.0mである。長軸はN-40°-Wである。柱穴は径が0.4～0.5mのもの（張出し部を除く）が主で、深さが0.4mほどのものが多く、揃っている。

S B-12 (第29図)

台地へりに、D 6-25区を中心に位置する。4間×4間でL字形に配され、東側は柱列が検出されなかった。桁行（長辺）7.3m、梁行（短辺）6.7m、柱間寸法桁行1.3～2.7m、梁間1.45mないし1.9mを測る。柱穴の径は小さいもので0.3m、大きなものは0.7mであり、平均的には径0.5m前後の大ささになる。深さは0.1m～0.2mと非常に浅く、ほかの建物跡の柱穴と比しても異例であり、上屋建物を構成する掘立柱跡とは言えず、柵列にした方がよからう。谷から農道が登りきった箇所にある。このような登り道が当時にもあったとすると、道に關係した遺構であった可能性もある。

(4) 土坑ほか

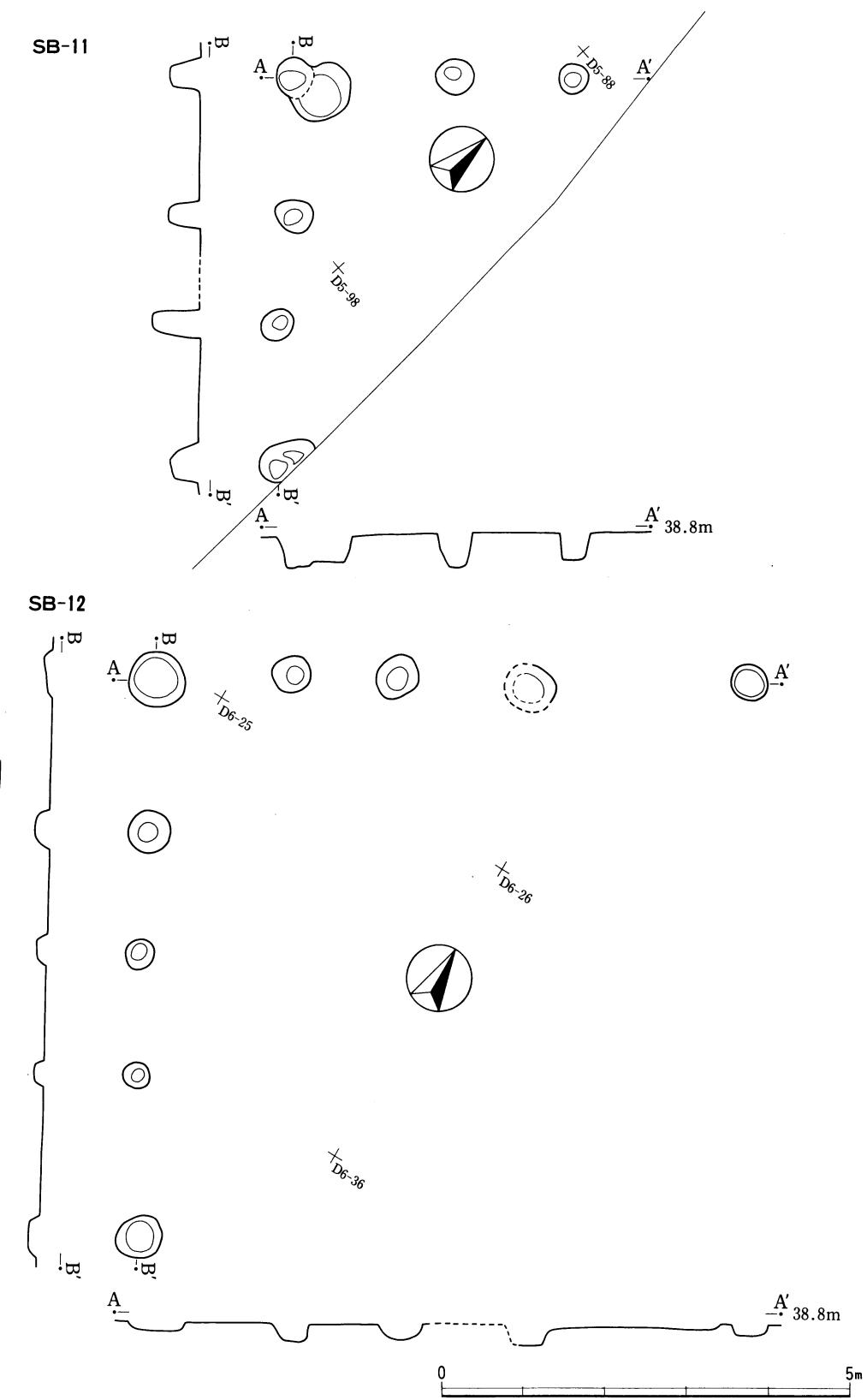
S K-01 (第30図、図版11)

D 5区で南側調査区の東境界に半分がかかっている個所にある溝状の陥穴である。ほぼ長軸は南北を向く。底面の幅は0.2m、深さは耕作土下から1.5m、上部の短軸方向は漏斗状に開口する。長さは不明だが、3m程度になろう。坑内堆積は陥穴特有の底面に黒色土がたまり、中位に壁の崩れの黄褐色土、上部に腐食質土と重なるものである。出土遺物はなかったが、形態からみて縄文時代のものであろう。

S K-02 (第30図、図版11)

D 4区にあり、南側調査区西境界に半分かかっている。開口部径2mほどの不整円形で、底面に行くほど径が小さくなる。断面漏斗形を呈し、確認面から2.2mと深い。下半部は黄褐色土が充填され、埋められていた。上半部は締まった土で、最上部が小砂利を多量に含む黒色土となり、土師器の杯が出土している。出土遺物はその杯を含め土師器が6点、縄文中期土器片1点である。

時期的には奈良・平安時代以降のもので、形態からみて井戸状遺構とみられる。廃絶時に下



第29図 SB-11・12

半部が埋められたが、その後自然堆積途中まで埋まり、さらに浅い窪みの状態の時に先の黒色土が堆積したとみられる。黒色土中の砂利は土師器が廃棄される際に流入したもので、井戸上面の保護のために敷かれていた可能性がある。

この遺構の設置目的については、部分的調査で台地全体の遺構の配置が判明しないため即断できない。

SK-03（第30図、図版11）

北側調査区のE1区で検出された土坑である。径1.8m×0.6mの楕円形。底面は小さく、南側壁はなだらか上がり、他壁は垂直に近く立ち上がる。覆土は自然堆積で、遺物の出土はない。時期・性格不明である。

SK-04（第30図、図版11）

北側調査区、E1区で斜面の肩の部分に検出された炉穴である。径0.4m～0.6mの炉床面が三つあり、1.9m×1.5mのT字形に配置されている。掘込みは20cm弱と浅い。焼け方は少ない。土師器片が1点出土しているが混入とみられる。

SK-05（第30図、図版11）

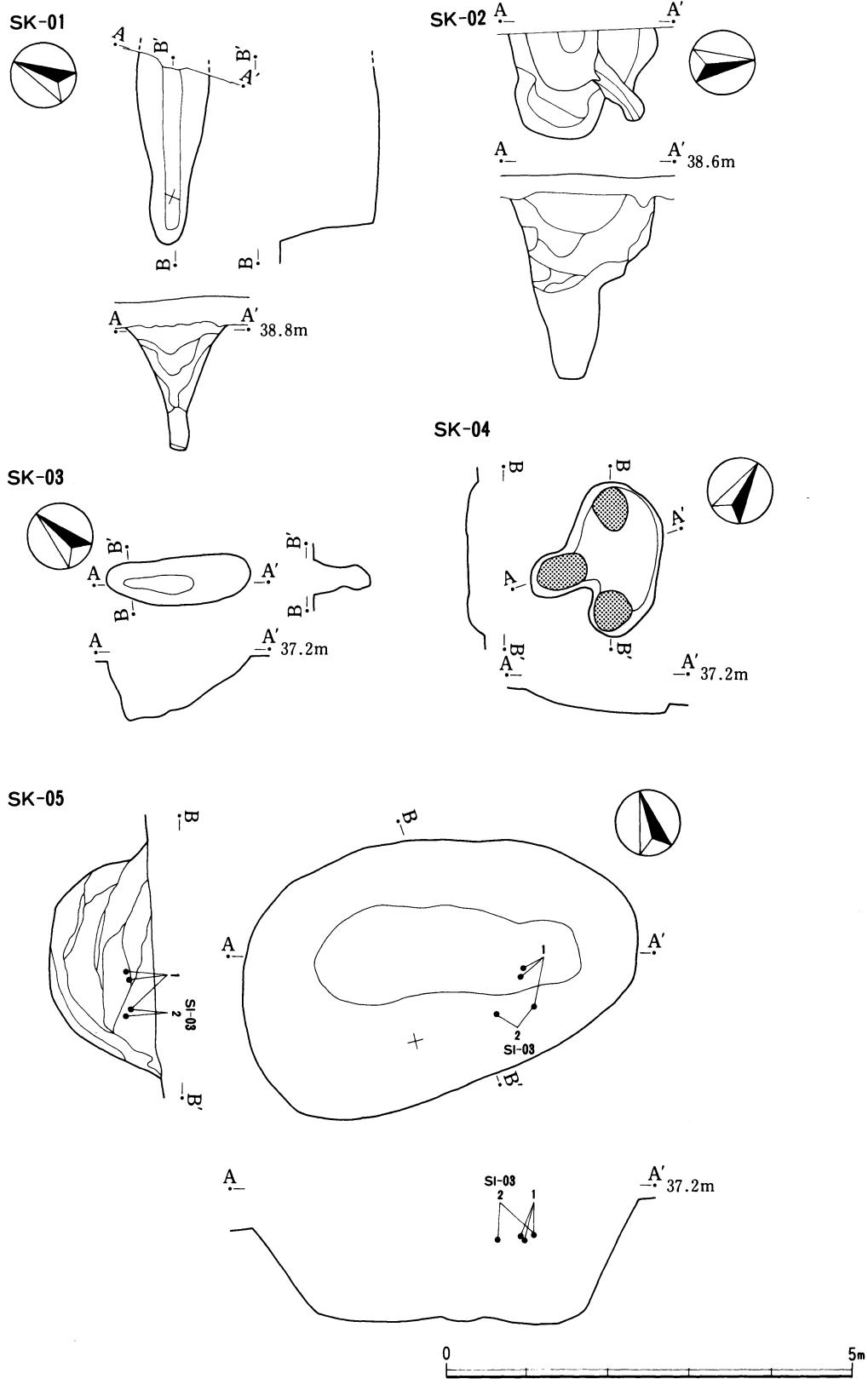
SK-04の西側、D1区に検出した土坑である。5.0m×3.1mの略楕円形を呈する。深さは南側で1.5m、覆土は自然堆積とみられる。遺物は覆土上部で、回転ヘラ痕を残す半完形の須恵器杯身、鬼高窓の土師器杯身片、奈良・平安時代の常総型甕破片等が出土した。須恵器杯身はSI-03のものと接合した。

SK-06（第31図、図版11）

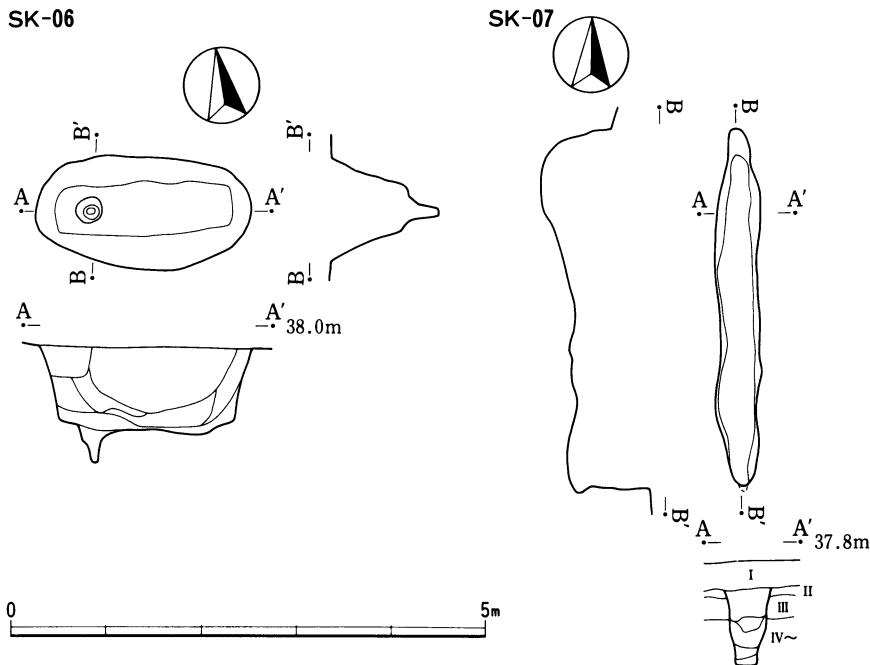
北側調査区の谷に突出する台地先端部、D3区に検出された土坑。確認面（ローム面）では2.2m×1.2mの楕円形、坑底面で1.8m×0.5mの長方形を呈する。深さは確認面から0.8mであり、西壁際に0.35mの深さを持つ小ピットを有する。底部は緩い摺鉢状、壁は75度の角度で直線的に立ち上がっている。堆積は黒色土を主体にしており、自然堆積とみられる。やや浅いが、底面にピットを持つ陥穴としてよからう。遺物の出土はない。

SK-07（第31図、図版11）

北側調査区の中央、D2区で東側境界部に検出された溝状の陥穴である。検出面で長軸3.7m×幅0.4m、坑底面で3.5m×0.3mほどで、端部に向かい細くなっている。深さは両端部で0.8m、中央部で0.6mと浅い。壁は垂直に近い立上がりをみせている。ソフトロームとロームブロック



第30図 SK-01~05



第31図 SK-06・07

の混ざった土が覆土となっていた。出土遺物はない。

2 遺 物

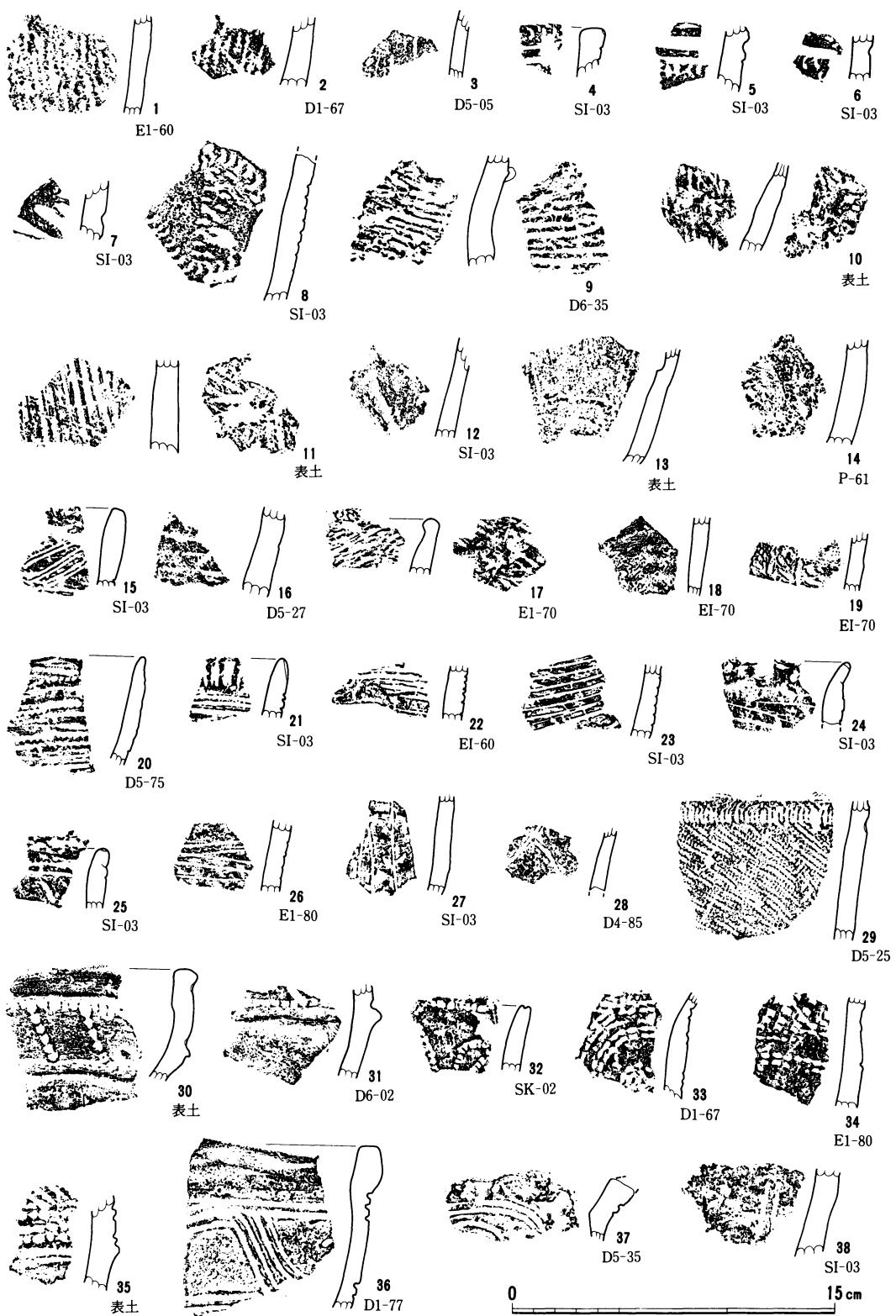
(1) 繩文土器 (第32・33図、図版12・13)

1～3は撚糸文系土器である。1・2は縄文施文で、原体は単節の縄文とみられるが不明瞭である。胎土に細砂を含み、特に1には石英・長石細礫が目だつ。井草・夏島式であろう。3はRの撚糸文が条間広く施文されており、稻荷台式とされよう。

4～8は沈線文系土器で、太い沈線に半截竹管の刺突文を加えた文様を持ち、赤褐色を呈する。S I -03から出土しており同一個体と思われる。8は菱形の沈線区画内に半截竹管の文様が施されている。これらは田戸下層式土器である。

9～14は条痕文系土器である。9～11は表裏に条痕文が施文された土器で、11には貼付文様の隆起部がみられる。10は底部付近で条痕が不明瞭である。12は内面に擦痕状のヘラ痕がみられる。子母口式である。13は無文の底部近の破片である。尖底になり、使用時の横位の擦痕がみられる。纖維の含有は少ない。14は文様は内面に刷毛目痕がみられる。

15～19は前期纖維土器である。15は半截竹管による斜位沈線を持つ口縁部である。16は半截



第32図 繩文土器 (1)

竹管の沈線文を有し、内面が磨かれており、前期黒浜式とみられる。17～19は同一個体と思われるもので、黒色を呈し薄手である。18は表裏条痕文になり、口唇部に縄文が施文されている。21・22は撚りのゆるい撚糸文が施文されている。花積下層式ころのものであろう。

20～28は浮島・興津式である。20は連続の変形爪形文が施文されている。内面は横ミガキが入る。21～23は条線文施文になる。21の口縁上端には半截竹管の刻線列がみられる。24～28は沈線文を持つ。25は横位の沈線文を持ち、口唇には刻みが入れられている。26は横位の二本組沈線を有する。浮島II式であろう。27は縦、28は粗い斜格子の沈線が施文されるものである。

29はRLの縄文を地文に、角押し文が横位にめぐる。上部は欠損するが弧状の角押し文が入った痕跡がある。胎土に大きな雲母・石英粒はみられない。勝坂式であろう。

30～49は阿玉台式である。

30～32は一本の細い角押し沈線文の文様のみられるものである。30・31は同一個体で、口縁文様帯を隆帯とともに区切り、斜行文を構成する。胎土には雲母粒を含まない。32は口縁部破片で、曲線文がみられる。角押し沈線は口唇部にも施文されている。上端部にV字状の切込みを伴う隆起文を有する。

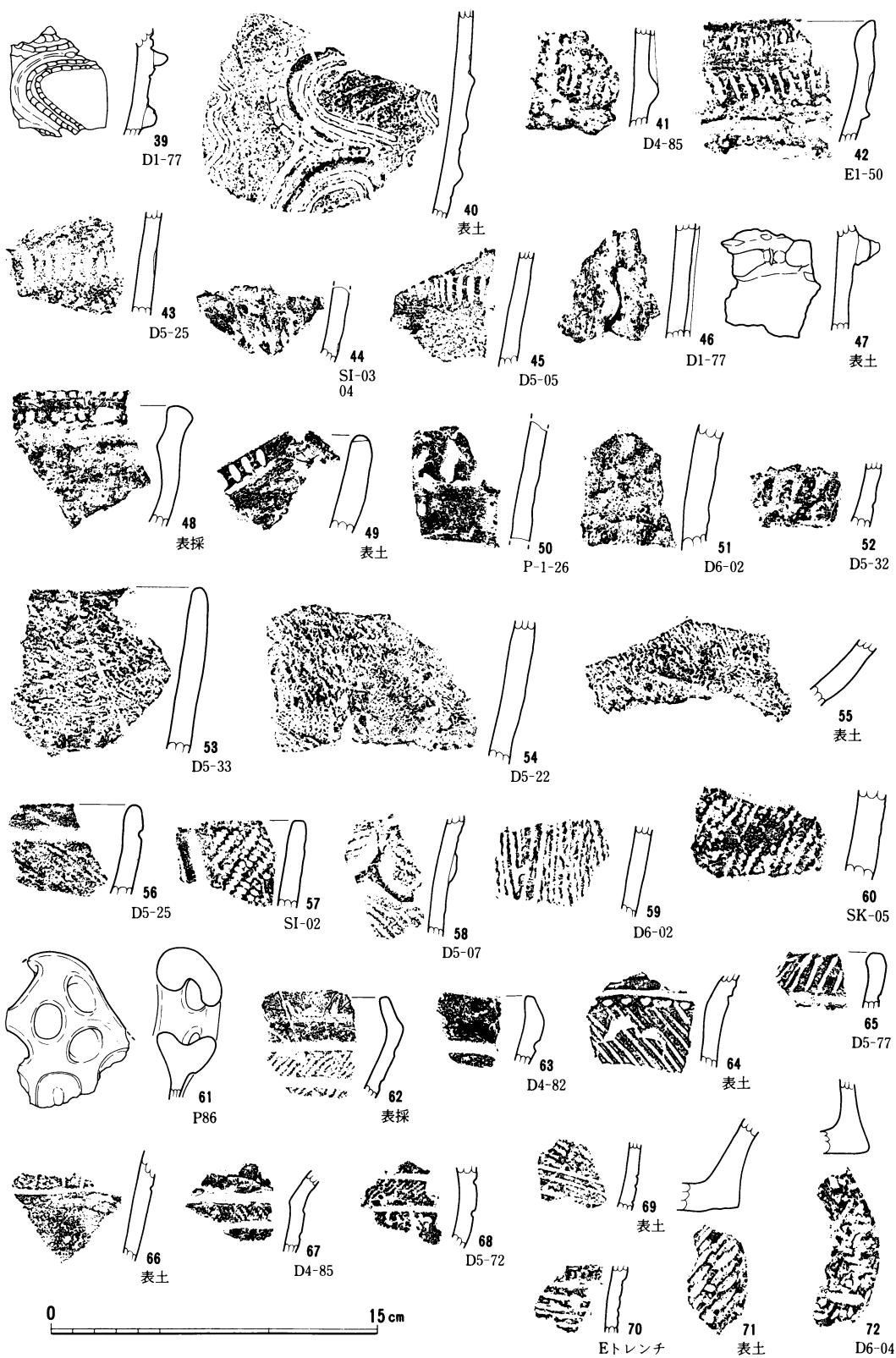
33～40は2本組の沈線文を有するもの。33は31同様の文様をペン先形の角押し沈線文で構成する。33・34は2本組の細い角押し文による文様で、33は同心円文様の破片であろう。34では斜位の角押し文がみられる。36・37は口縁に2本組の沈線文による波状文を有する例である。36は波状口縁をなし、口唇は肥厚し内面に稜をなす。38は縦位の2本組角押し沈線文を有する。39・40は隆起線に2本組の細角押し文を添えて曲線文を構成するものである。

41～45は横位の幅広い角押し文を有するものである。41は隆起線に角押し文を伴う口縁部である。42は角押し文が二列になる口縁部で、頸部に隆起線が巡らされている。43～45は胴部の破片である。

46は縦位の波状隆起線を有する。47は張り付けによる紐状突起を有する。48はやや内湾する無文の口縁で、口縁上端でくの字に屈曲し、内面に稜ができている。口唇には両縁に刻みを有する。49は波状の突起部で、口唇部に太い刻み目を有している。

50～52は器面に粘土帯接合部の押圧痕を残す。胎土に雲母等は含まれない。53～55は撚り戻しの不明瞭な縄文を有するもので、胎土に雲母等は含まれない。これらは前期末から中期初めにかけての所産であろう。

56～61は加曾利E式である。56は口縁下に横位の沈線を巡らし、以下に縦位LRの縄文がみられる。57は縦の無文帯が沈線で形成されるもので、RL斜縄文が間に施文されている。58は隆起線による曲線文を有し、LR斜縄文を区画内に施文する。59は沈線による縦無文帯間にRの撚糸文を施す。60はLRの縄文を有する胴部片である。67は円形の孔を有する把手部で、口縁下位に沈線文が垂下するとみられる。細別では56・57・59は加曾利E III式、58・61は加曾利E IV式で



第33図 繩文土器 (2)

あろう。

62～72は後期土器である。62・63は口縁上端でくの字に内傾する深鉢形土器で横位の縄文帯を有する。64・65横位沈線で区画される斜沈線の文様帯が主体となるもので、64は頸部片で刺突文を伴う。66～68は縄文を沈線区画内に充填した文様のみられるものである。69は縄文を地紋に沈線文が入る。70は紐線文に斜沈線が組み合わされている。いずれも加曾利b式に含まれるものだろう。

71・72は平底の底部で編代の敷物圧痕を持つ。

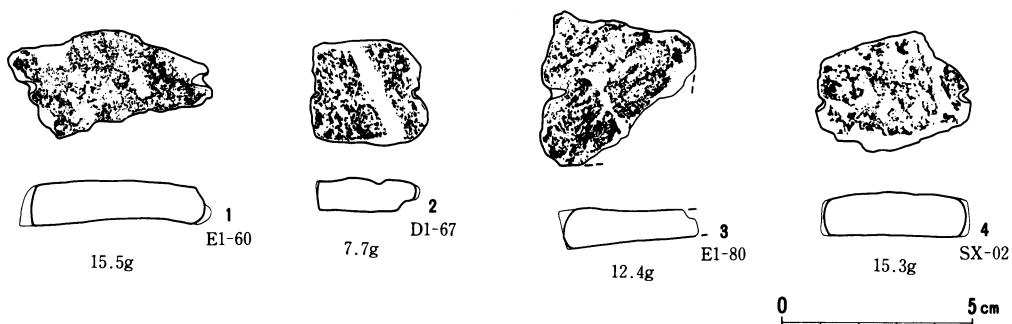
(2) 土製品 (第34図、図版14)

縄文時代の土器片錐である。いずれも長軸端に切れ目を入れたもの。1は無文で内外面が磨かれている。2は太い沈線を持ち、胎土に雲母等の細礫を多く含む。3は無文であり、細礫を多く含む。4は角押文がみられ、胎土に雲母粒が目立つ。使用された土器片は、1は不明だが、ほかは阿玉台式としてよかろう。

(3) 縄文時代石器 (第35・36図、第5表、図版14)

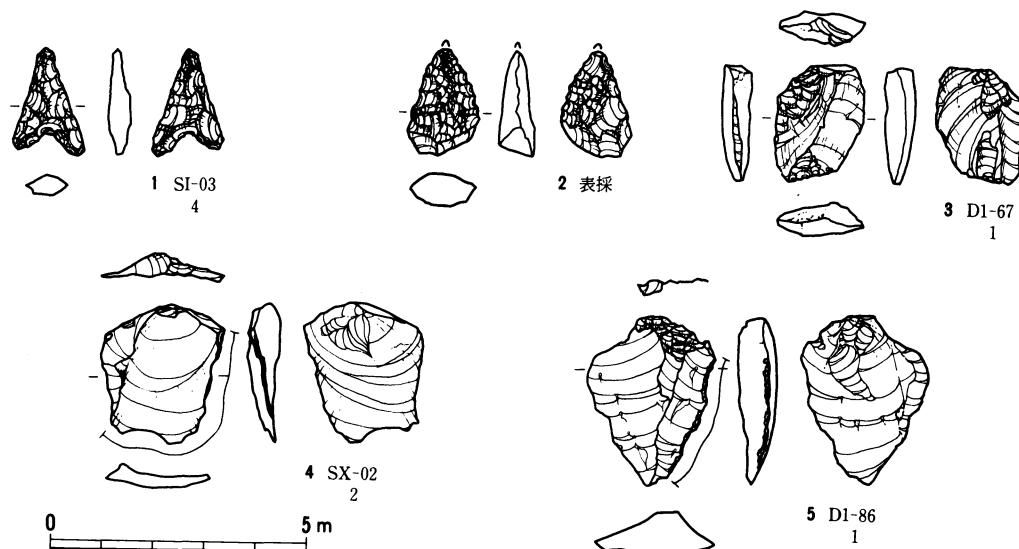
本遺跡で検出した石器は総点数79点である。遺構出土の石器でも確実に遺構に共伴すると考えられる石器はなく、すべて包含層出土の石器と考えられる。器種構成は石鎌2点、楔形石器1点、打製石斧1点、磨石3点、使用痕を有する剝片(U剝片)2点、剝片5点、礫65点である。主要な利器が少なく各器種がごく少数ずつ出土している状況であるため、器種構成面や分布面からの特徴的な傾向は看取されなかった。これらの石器は、本遺跡の出土土器の主体となる縄文時代中期前半(阿玉台式)の時期の所産である可能性が高いが資料数が少ないとから断定はできない。

1・2は石鎌である。1は基部の抉りの深いものでやや片脚部が長い。2は厚味のあるもので下半部を欠損するため形態は判然としないが、欠損後の再加工痕が認められる。3は楔形石



第34図 土製品

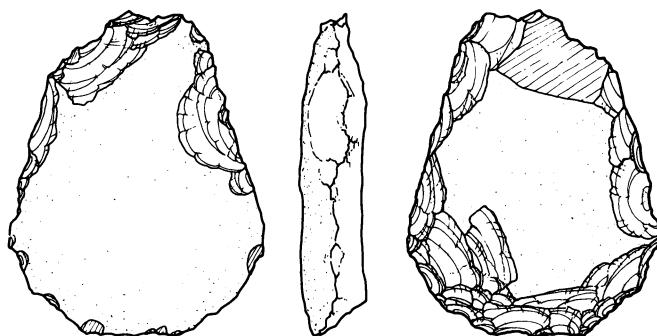
器である。比較的薄い縦長剝片を素材として上下端からの細長い剝離痕と端部に潰れが観察される。4・5は使用痕のある剝片である。4は山形打面の縦長剝片を素材として、背面右側縁から末端部に切断状の微細剝離痕が認められる。5は器体末端部が細くなる形状の縦長剝片を素材として、右側縁に連続した微細剝離痕が顕著である。6は打製石斧である。板状の偏平礫を素材にして、基部側が最大幅をもつように仕上げられ撥型に類した形状を呈している。表面からの加工が顕著で、刃部は緩やかに弧を描き円みをもつ。7・8は磨石である。7は下端部の擦り痕が顕著で、形状が変わるほど磨滅している。表面中央及び側縁には敲打痕がみられる。8は表裏面に光沢を帯びるような擦り面が認められる。9は細長い偏平礫で、表裏面及び側縁の擦り痕が顕著であるが、末端部が加撃され敲打痕と剝離痕が観察され、敲石の機能も合わせ持つものであろう。



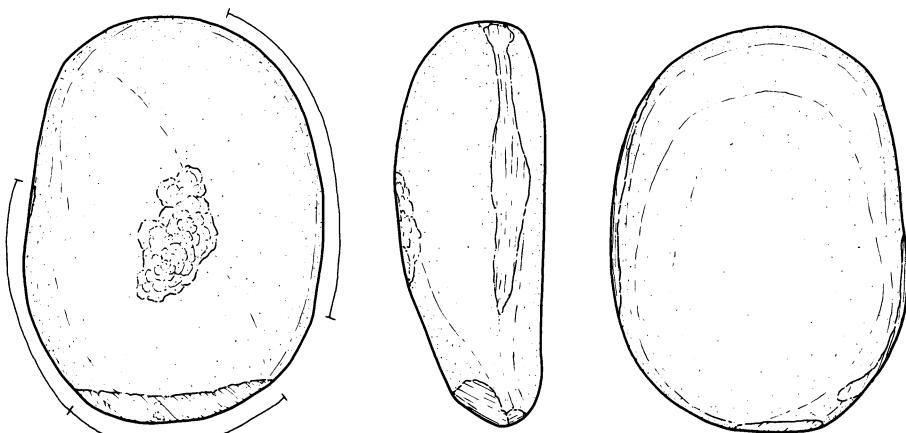
第35図 縄文時代石器 (1)

第5表 縄文時代以降出土石器計測表

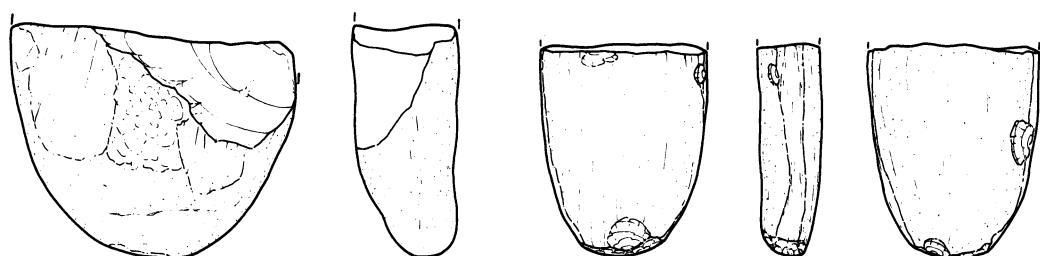
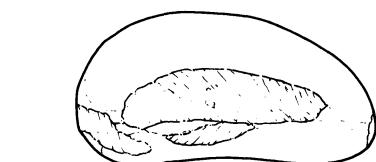
挿図番号	遺物番号	器種	石材	最大長×最大幅×最大厚 (mm)	重量 (g)	打角 (°)	調整角 (°)	調整痕部位	使用痕部位	折れ面部位
1	表採	石鏟	黒曜石	20.6×13.3×4.0	1.6					T
2	SI-03-4	石鏟	黒曜石	19.9×13.3×6.5	0.7					
3	D1-67-1	楔形石器	黒曜石	21.8×16.9×5.2	2.0					
4	SX-02-2	U剝片	チャート	26.0×23.5×3.9	2.2				R	
5	D1-86-1	U剝片	黒曜石	32.1×24.7×6.9	4.6	98	81		R	
6	表採	打製石斧	安山岩	84.2×65.9×17.5	128.3					
7	表採	磨石	石英ハニ岩	102.8×77.4×38.9	460.7					
8	P28-1	磨石	流紋岩	59.6×73.5×27.8	183.9					
9	表採	敲石	砂岩	54.0×43.2×16.1	64.7					



6 表採



7 表採



9 表採



8 P-28
1



0

10 cm

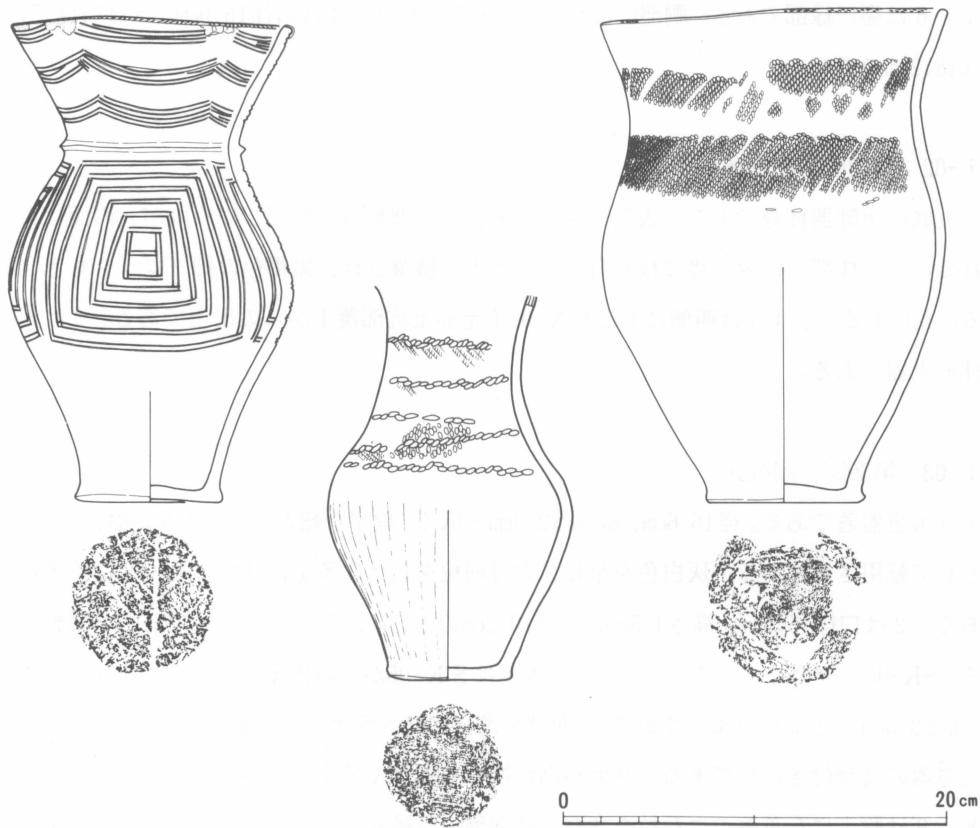
第36図 繩文時代石器 (2)

(4) 弥生土器 (第37図、図版5)

SX-02から出土したものである。

1は頸部に隆起線を有する壺形土器である。口径14.7cm、高さ24.8cmで、最大径を高さの2分の1の箇所に持つ。暗褐色で、焼きはやや不良である。胎土に細砂が目立つ。頸部径は9cmほどで、あまりくびれない。口縁に6単位の弧状文、胴部に4単位の6重同心方形文様が、半截竹管の二本組沈線で描出されている。口唇は縄文施文されている。方形文の中心の文様は曰が3か所、匚が1か所の2種類ある。口縁の最上段弧状沈線交差部には貼付文が施文されている。また底裏に木葉痕が残されている。

2は壺形土器で、1より頸部のすぼみが強い。高さは現状で20.5cm、口縁は出土した際には既に欠けており、欠損のまま置かれていた。地文にR無節縄文、LR単節縄文をごく部分的に持ち、主文様は無節の縄の結節部分を回転させた綾繰り文である。胴部下位はヘラナデ痕が顕著である。底裏には布目痕がついている。特筆すべきは、確実な粋痕が2か所認められたことである。また、ほかに2か所ほど何らかの粒の痕がある。胎土は砂粒を多量に含み、暗褐色から黒褐色を呈する。焼きは普通である。



第37図 SX-02出土土器

3は3点のうちでは最大のもので甕形土器である。口径16.7cm、高さ25.2cmを測り、最大径は17.8cmで高さの2分の1のところにある。口縁から頸部にかけて、縄端部を含め回転施文させたLR斜縄文を有している。口唇部にも縄文施紋されている。暗褐色を呈しほかの2点同様細砂の目立つ胎土を持っている。外面は部分的に、内面には下部に炭化物の付着が顕著にみられる。底裏には布目压痕とともに糲痕が10か所ほど認められる。

(5) 奈良・平安時代土器

S I -01 (第38図、図版16)

1は須恵器杯身である。径14.5cm、高さ4.8cm、底部は径10.3cmである。底面はヘラ切りの上、痕跡をナデで消してある。灰色を呈し、胎土に長石粒を含み、緻密で焼きが良い。東海系のものであろうか。

2は赤彩塗彩された土師器丸底杯である。径は14.0cm、高さ3.6cmと低い。外面は全面ヘラケズリされている。

3は下総型甕である。胎土には石英・長石粒を多量に含んでおり、焼きが良い。3bは受け口状の口縁部で口径は26.2cmになる。3bは底部で縦ミガキ痕が顕著である。

4～6は甕口縁部である。胴部にはヘラケズリ痕を残す。4は口径16.0cm、5は口径15.0cm、6は18.2cmである。

S I -02 (第38図、図版16)

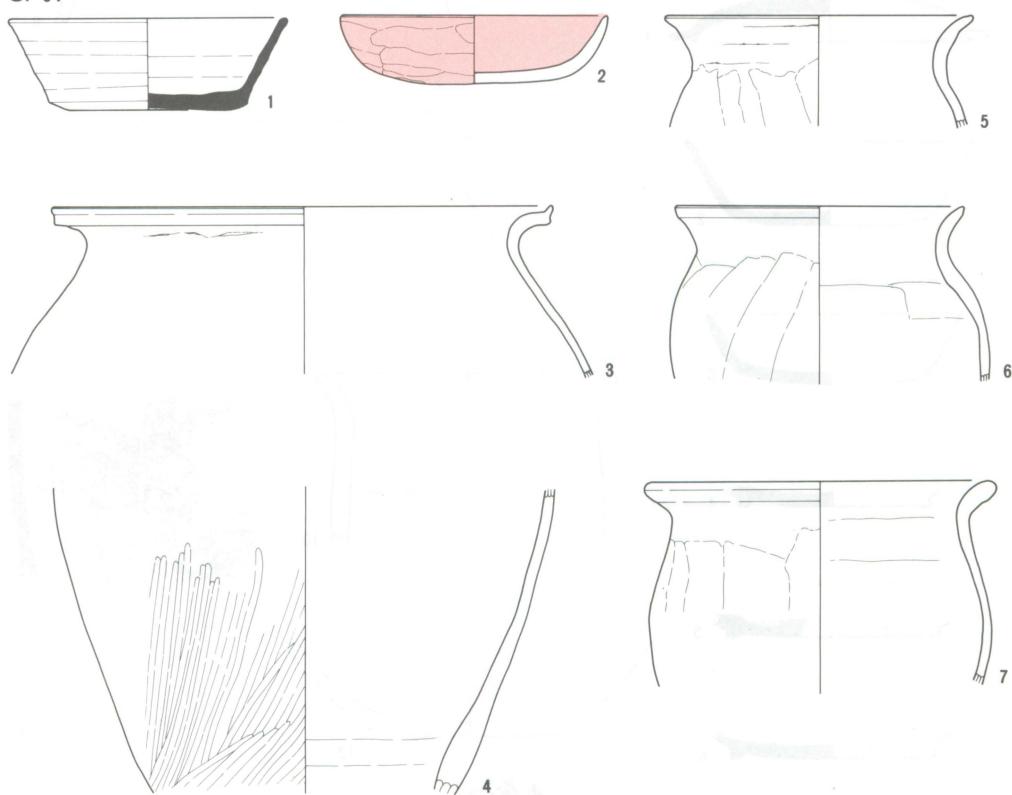
1丸底の土師器杯身である。表面の風化が激しく、調整痕が判別しにくいか、内面はよく磨かれている。体部と口縁の境に稜を有する。胎土は精選され、黒褐色の細ブロックを包含している。5片あるが、4片は西側にあるS X-02不定形土坑部覆土からの出土である。2は土師器の鉢形土器である。

S I -03 (第39図、図版16)

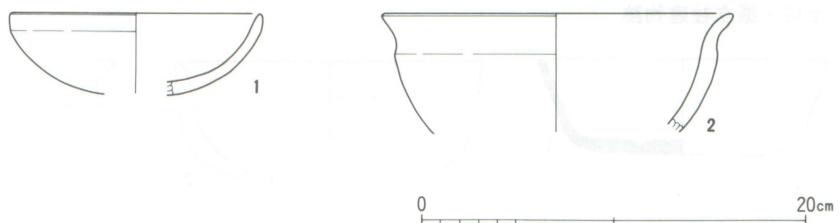
1は須恵器蓋である。径16.6cm、器高は2.9cmと低く、扁平な紐がつく。内面が磨滅しており、硯として転用されている。灰白色を呈し、雲母細粒を胎土に多量に含む。2・3は須恵器杯身である。2は口径15.0cm、高さ4.5cm、底径10.2cmのもの。回転ヘラケズリで底面が調整されている。SK-05と接合している。というより大半はSK-05からの出土といえる。3は推定径13.8cm、高さ3.5cmで2より小ぶりである。底面は平滑に回転ヘラケズリ調整がなされている。4～7は須恵器の高台付きの杯である。底面が高台端まで膨らんで達している。

8・9は胎土に石英等の岩石粒を含む下総型甕の口縁部である。受け口状を呈し、頸部は短く屈曲が強い。10は小型の甕ないし甌の上半部である。胴部は垂直に立っている。11は細かい

SI-01

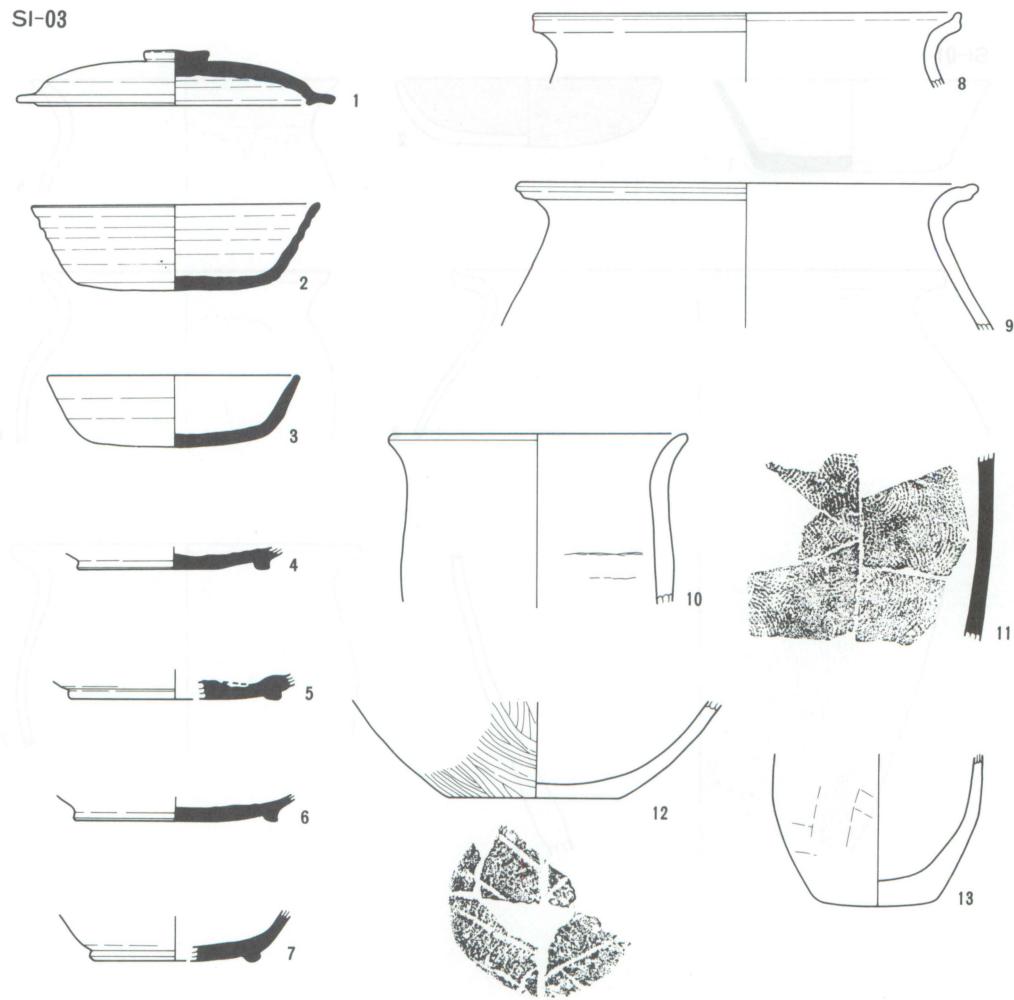


SI-02

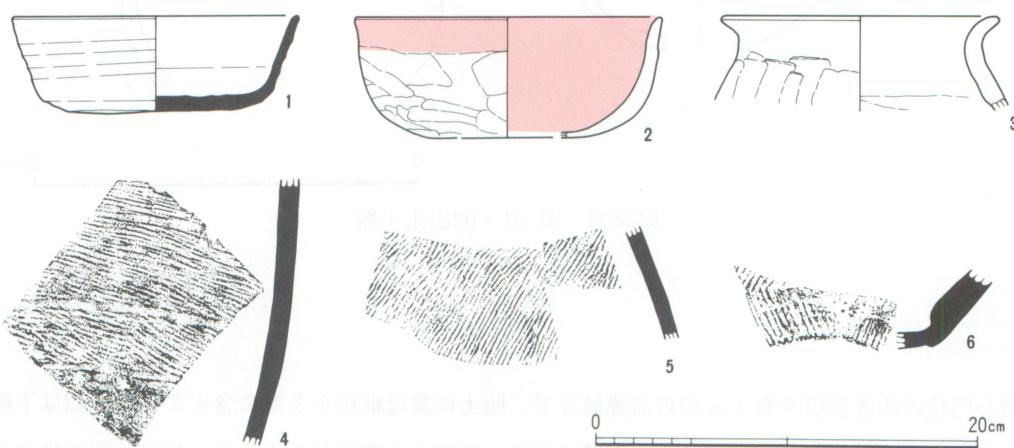


第38図 SI-01・02出土土器

同心円状の叩き目痕を有する須恵器甕破片で、胎土に雲母細粒を多量に含んでいる。12は下総型甕の底部で、外面のヘラ調整痕が顕著である。底裏は木葉痕がみられる。13は小型の甕の下半部である。



土坑・掘立柱建物跡



第39図 SI-03、土坑、掘立柱建物跡出土土器

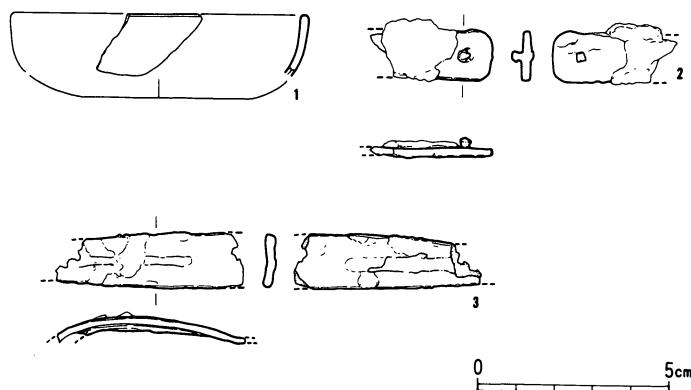
土坑等出土（第39図、図版16）

1はSK-05(土坑)出土の須恵器杯である。底面手持ちヘラケズリで箱形を呈する。口径15.0cm、高さ4.9cm、稜のところで底径は11.9cmを測る。2はSK-02(井戸状遺構)で出土した赤彩された鉢である。口径は16cm前後で、外面はケズリ後研磨されており、赤彩が口縁にとどまっている。3はSB-08とSB-04の柱穴から出土した破片が接合した甕形土器である。4はSB-05柱穴出土で、平行叩き目を有する須恵器甕破片である。胎土に雲母細粒を多量に含んでいる。5は平行叩き目を施された甕胴部片で、緻密で焼きは良い。内面は二次的に研磨されている。SB-07・08の柱穴から出土したものである。6はSB-02柱穴出土で、平行叩き目の施された甕底部片である。外面には自然釉がかかっている。

(6) 金属製品（第40図、図版17）

3点あり、すべてSI-03出土である。1は銅皿の破片である。径7.8cm厚さ0.2cmほどの小形のもので、仏具の六器に類するものとみられる。2は幅1.3cm、厚さ0.2cmの鉄小板で、一端を欠く。端部は「U」字形に整形され、鋤が打たれている。鋤は頭部分が残っており、軸は2mm角である。この鋤は把手をつけるためと思われる。鋤がつく点など、形状的には手鎌に類似しているが、本例には鋭い刃が付いておらず手鎌である可能性は薄い。同じように把手が付くものとしては、カラムシから纖維をとる道具である苧引き金がある。これには鋭利な刃は付いていないので、本例と最も近いのではないか。3は幅1.1cm～1.4cm、厚さ2mmの軽く湾曲した板で、長軸方向に溝が入っている。用途不明である。

このほか、図示できなかったがSB-07覆土、D5区表土でスラグ、フィゴ片、炉壁片の出土があった。従って調査区外に小鍛冶跡が存在する可能性が高い。



第40図 金属製品

(7) 近世遺物（第41図、図版17）

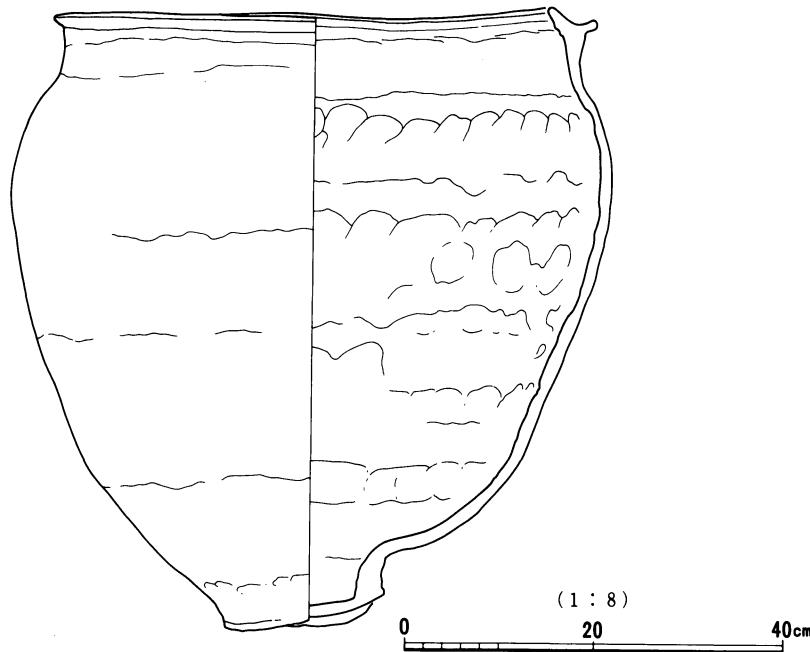
18世紀代の製作と考えられる、良く焼け締まった硬質の常滑焼の甕である。口縁内面に内端と呼ばれる張出しが付けられ、外面への突出とともにY字形の断面をなしている。肩部には焼成前に付いた縦方向の擦痕が一か所見られる。肩部の張りはほとんどなく、口縁から肩にかけて胡麻ふり状の茶褐色の釉が付着し、それ以外には黒褐色の極薄い釉が付着している。内外面とも粘土紐輪積み痕が明瞭に残っている。底部近くが折れて歪んでおり、その近くには釉着痕が残っている。器高63.2cm、口径56.5cm、底径16.9cm、胴部最大径63.0cmを測る。

本遺跡南地区のほぼ中央に、地中に底から3分の2程度埋められ、その中には水が八分目ほど溜めてあった。畑作業用の水甕として発掘調査直前まで使用されていた。

参考文献

中野晴久 1986 「近世常滑焼における甕の編年研究ノート」『常滑市民俗資料館研究紀要II』 常滑市教育委員会

鳴田浩司 1990 「飯野陣屋跡出土遺物の新知見（1）」『研究連絡誌』第30号 千葉県文化財センター



第41図 近世遺物

第4節 小 結

今回の調査は、遺跡とされる台地平坦部約26,000m²の約2割、5,500m²のみの調査であった。検出された遺構は、旧石器時代ブロック、縄文時代炉穴等、弥生時代は土器棺を伴う土坑、奈良・平安時代は住居跡等である。

旧石器時代

本遺跡では南側の調査区で3か所のブロック、1か所の単独出土の石器が検出された。検出されたブロックは1時期に形成されたものではなく、VII b層からIII層上面までに二つの文化層があり、2時期にわたり形成されたものととらえられる。遺物量は44点と少なく、遺跡の部分的な調査であり、全容が把握された訳ではないが、下総町初の旧石器時代遺跡報告例として意義があろう。

縄文時代

周辺地域では成井原山向遺跡で縄文草創期の土器が出土しているが、当遺跡での出土はなかった。出土したのは早期土器からである。早期では撚糸文系土器、沈線文系土器、条痕文系土器が少量得られ、前期土器は浮島・興津式土器が中心にみられた。最も出土量が多いのは中期の土器で、中でも阿玉台式土器が7割強を占める。細分型式では阿玉台2式が主体でほかは若干量である。最も新しい時期のものは後期加曽利B式土器で、若干量の出土であった。

分布状況は撚糸文・沈線文系土器が北端部にみられるのに対し、条痕文系土器は北端と南端部ともに出土している。一方前期浮島・興津式土器は北側S I -03覆土に集中していた。阿玉台式は全域で出土したが、やはり北側に密度が濃い。加曽利E式以降の土器は南側のみにみられた。

遺構は炉穴1基、陥穴3基、そのほかの土坑1基のみであり、住居跡は存在しなかった。炉穴は早期の土器が出土した区域にあり、形態的にみて条痕文期のものであろう。限られた範囲の調査ながら、阿玉台式土器は出土量も多く、今回住居跡は検出されなかつたが、周辺にこの時期の集落域があることは想像に難くない。

弥生時代

中期後半北関東系土器3個体を上部に配した円形土坑が1基単独で検出された。壺型土器の一つには貝が土器内に納められていた。土器棺墓（再葬墓）の可能性が高いが、土坑との関係が問題である。同種の土器は、至近では成田市関戸遺跡で住居跡中から出土している。また小見川町阿玉台北遺跡では土坑内から出土し、再葬墓とされている。阿玉台北遺跡での土坑の規

模は土器がすっぽり入る程度のものであった。新シ山・柳和田台遺跡例も同様の遺構ともみられるが、土坑は大形で土器は上部に配置されるものであった。つまり土坑が半ば埋まった段階で土器を横たえて配置していることになり、単純な土器棺墓とはいえないであろう。

近隣の集落遺跡は同じ台地上の北隣に、成井鶴ヶ峰遺跡で宮ノ台式期のものが所在する。あしかし時期は下がるので直接の関係はない。近辺では該時期の遺跡は知られておらず、従って当遺跡が集落とは隔絶した地域にあることになり、この地域を墓域とする条件には合致している。

奈良・平安時代

住居跡3軒と掘立柱建物跡12棟、土坑1基、井戸状遺構1基を検出した。遺構は主に北端と南端の台地へりに分かれて分布し、井戸状遺構だけが中央部にある。遺構の分布が疎であるが、中央部分の調査であり、遺跡全体を調査したとしても検出数は少ないのである。注目すべきはほぼ同時期とみられる掘立柱建物跡の存在である。規模も小さく、あまりしっかりとした掘り方、柱痕を持つものではなく、中世の館跡に伴う柱穴に類似するという印象が濃い。

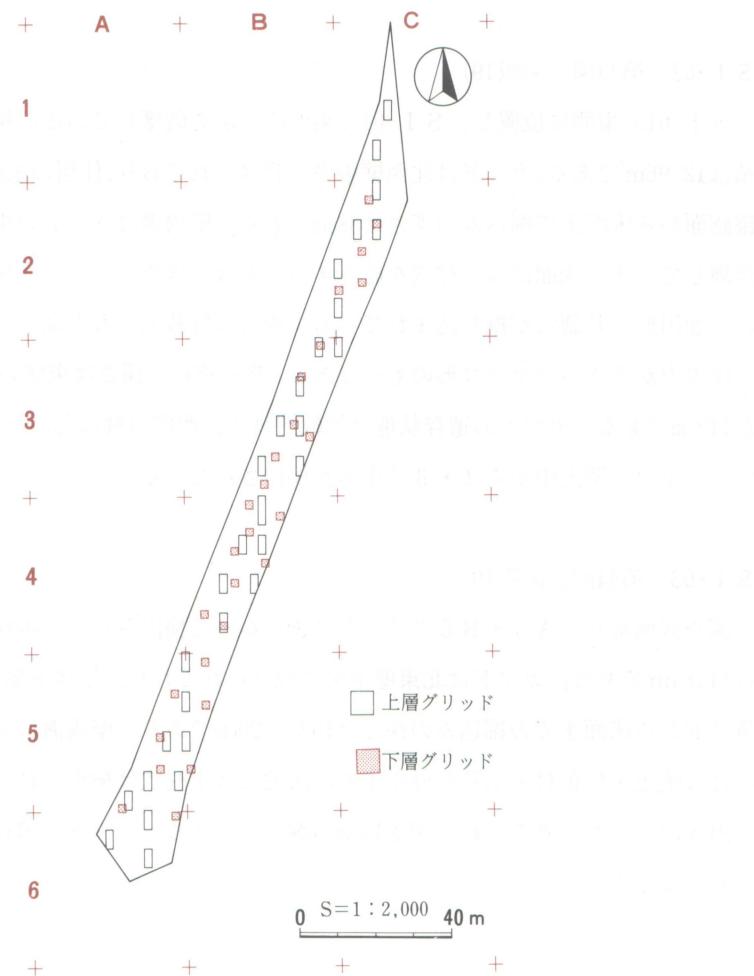


第42図 青山中峰遺跡遺構配置図

第II章 青山中峰遺跡の調査

第1節 調査の経過

調査は平成2年度に実施した。まず上層について確認調査を行い、台地平坦部から平安時代住居跡、土壙、柱列を多数検出した。その結果を受け、平坦部全面を本調査の対象範囲とし、調査を実施した。下層については上層調査進行時から、隨時着手可能な箇所の確認調査を実施して行ったが、遺構・遺物とも検出されなかったため、本調査を実施せず確認調査のみで、上層の本調査とほぼ同時に終了した。



第43図 調査区

第2節 遺構

1 竪穴住居跡

S I -01 (第44図、図版19)

調査区の南端に近いA 5 グリッドに位置する。S I -02によって東壁の一部が破壊されている。規模は $3.65 \times 3.40\text{m}$ で、面積は 12.14m^2 である。カマドは北西壁のやや東寄りの所に設けられており、住居の主軸方位はN-25°-Wである。住居の確認面からの掘込みの深さは28cmである。壁周溝は全く検出されなかった。柱穴は3本検出されたが、第1主柱穴がカマドの正面に設けられており、主柱として機能できたのかどうかは疑問が残る。それぞれの柱穴の深さは、第1主柱穴から時計廻りに22cm、13cm、10cmである。住居南西隅に平面円形の貯蔵穴が掘り込まれており、深さは20cmである。住居覆土下層には一部焼土と炭化材が分布する。カマドの遺存状態は非常に悪かった。

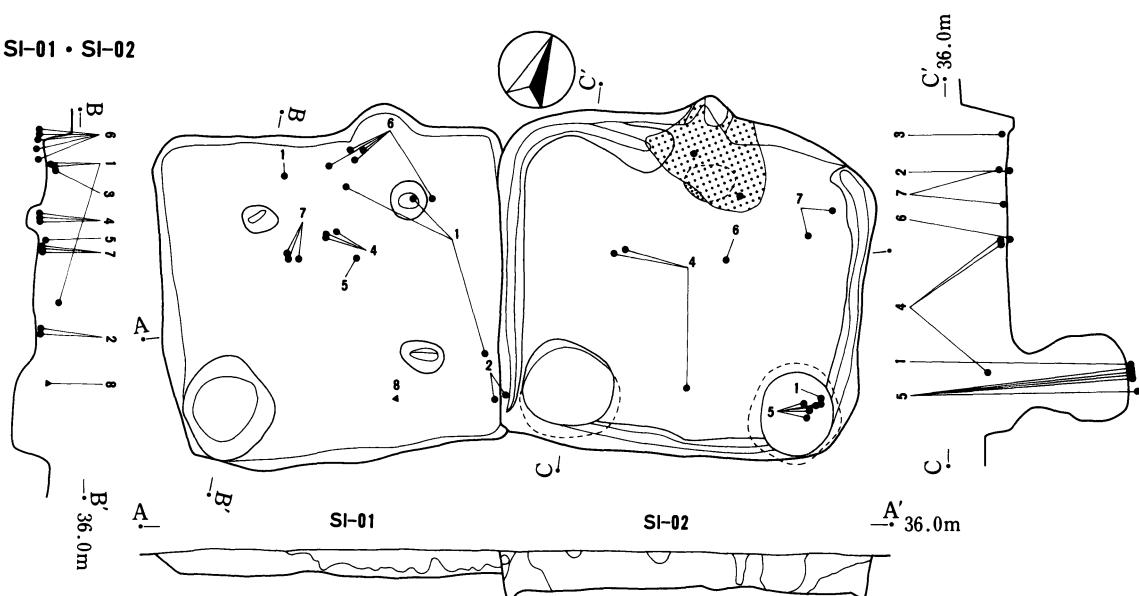
S I -02 (第44図、図版19)

S I -01の東側に位置し、S I -01の東壁の一部を破壊している。規模は $4.00 \times 3.50\text{m}$ で、面積は 12.96m^2 である。カマドは北西壁中央に設けられており、住居の主軸方位はN-16°-Wである。確認面から床面まで掘込みの深さは38cmである。壁周溝はカマドの東側の一部分を除いてほぼ全周している。床面には主柱穴を確認することはできなかった。住居南西隅と南東隅の2か所に平面円形の貯蔵穴が掘り込まれている。両方の貯蔵穴とも上端の径よりも下方もしくは下端の径の方が大きいフラスコ形のものである。それぞれの深さは東側のものが132cm、西側のものが112cmである。カマドの遺存状態は比較的良好く、西側の袖は芯にハード・ロームを掘り残している。カマド覆土中から2・3の土器が検出されている。

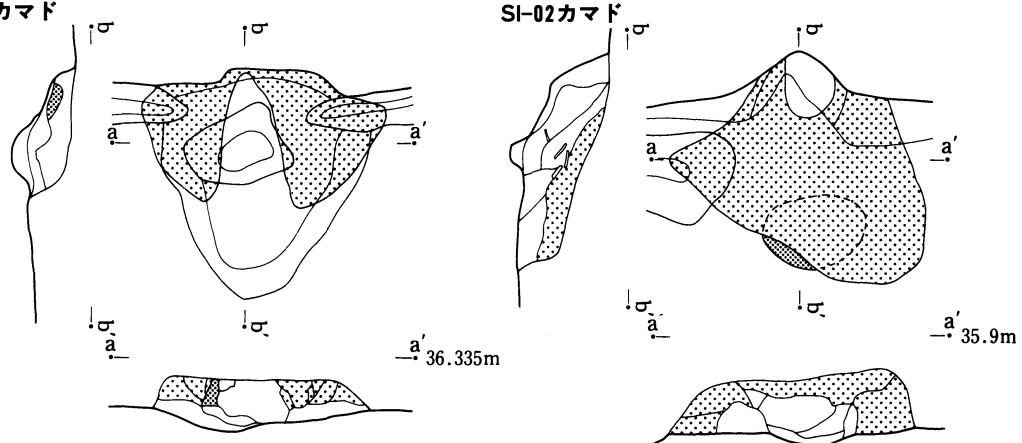
S I -03 (第44図、図版19)

調査区南寄りのA 5・B 5 グリッドにまたがって検出された。規模は $3.52 \times 3.43\text{m}$ で、面積は 11.84m^2 である。カマドは北東壁中央に設けられており、住居主軸方位はN-24°-Eである。確認面から床面までの掘込みの深さは15から20cmである。壁周溝は全周している。住居覆土下層には焼土・炭化材・山砂が分布する。床面には主柱穴は検出されず、カマド対面の南西壁側に出入口ピットと考えられる深さ15cmの堀込みがある。カマドの遺存状態は当遺跡では標準的なものである。

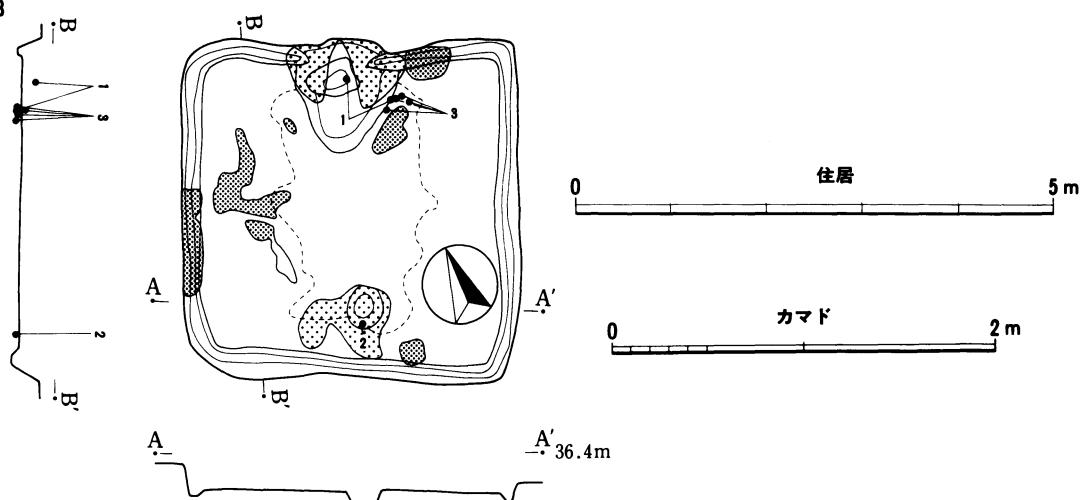
SI-01・SI-02



SI-03カマド



SI-03



第44図 SI-01~03

S I -04 (第45図、図版19)

調査区北端C 2 グリッドに所在する。規模は $3.52 \times 3.48\text{m}$ で、面積は 11.77m^2 である。カマドは北壁中央に設けられており、住居住主軸方位はN-2°-Eである。確認面から床面までの掘り込みの深さは31cmである。壁周溝は西側にのみ確認された。住居の南壁には張り出し部分があり、ここに出入口ピットかと考えられる掘込みが2基、さらに通常であれば第3主柱穴と考えられる位置に1本の掘込みが確認された。それぞれの掘込みの深さは西から順に9cm、11cm、12cmである。カマドは両袖の山砂が確認できただけである。

S I -05 (第45図、図版20)

調査区北端のB 2・C 2 グリッドにまたがって検出された。住居の北西側1/3は調査区域外にかかっていたために、調査できなかった。調査部分にカマドの痕跡が見当たらなかつたことから考えて、北西壁にカマドが設けられていた可能性が高いと考えられる。図上で復原すると、長辺が2.78m以上、短辺が2.62m、住居住主軸方位がN-37°-Wの平面や長方形の住居となる。確認面から床面までの掘込みの深さは13cmである。調査部分では壁周溝は全周しており、南東壁際の床面には出入口ピットと考えられる深さ22cmの掘込みが確認された。さらに床面にはもう一つ性格不明の掘込みがあり、この深さは19cmである。

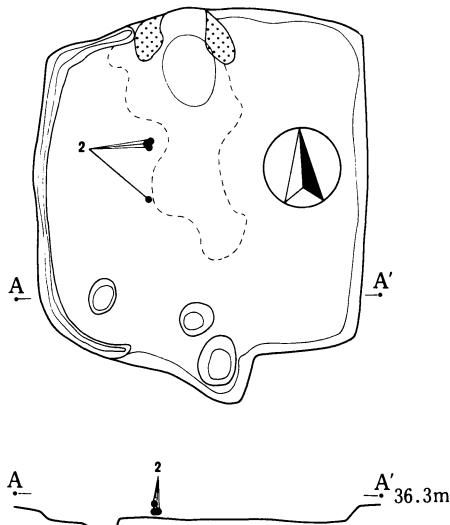
S I -06 (第45図、図版20)

調査区北端に近いC 2 グリッドに所在する。規模は $3.06 \times 3.06\text{m}$ で、面積は 8.90m^2 である。カマドの痕跡が北西壁中央にあり、住居住主軸方位はN-46°-Wである。確認面から床面までの掘込みの深さは15から20cmである。壁周溝は全く検出されなかった。床面には3か所に主柱穴かと考えられる柱穴が確認されたが、第3主柱穴に当たる位置には柱穴は検出されなかった。それぞれの深さは北側のものから時計廻りに21cm、14cm、20cmである。覆土中層に1枚、さらに掘り方底面に1枚、合計2枚の硬化面が検出されている。中層のものは山砂混じりで著しく硬化している。底面のものはごく通常のものである。カマドはほぼ完ぺきに破壊されており、構築材の山砂はいっさい検出されなかった。住居の壁のカマド尻の掘込みと火床が、カマドの痕跡として確認できたのみである。

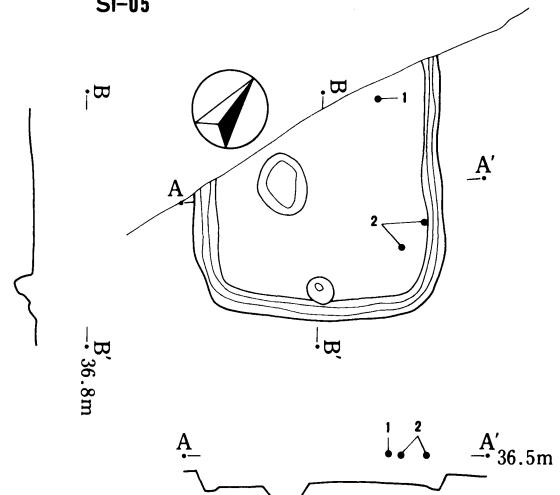
S I -07 (第45図、図版21)

調査区北方のB 2 グリッドに所在する。遺存状況は極めて悪く、東側の壁の一部と床硬化面の一部、及び柱穴かと考えられる掘込みの検出によって、住居であることが確認できた遺構である。規模は東西が 3.52m 、南北が 3.48m 、面積は 11.5m^2 と復原できる。確認面から床面までの掘込みの深さは非常に浅く、最も深い部分でも9cm程度、最も浅いところでは2cm程度であ

SI-04

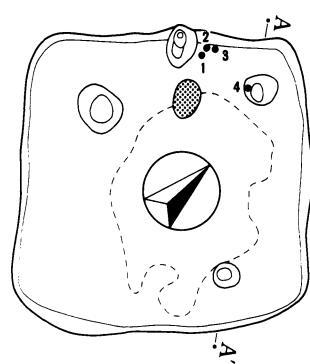
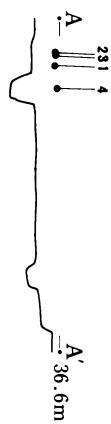


SI-05

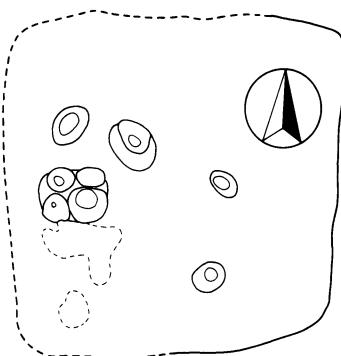


0 5m

SI-06



SI-07



第45図 SI-04~07

る。カマドが確認されていないために主軸方位とは呼べないが、東西壁の走行方位はN-2°-Wである。床面には8本の柱穴様の掘込みが確認されているが、性格は不明である。これらの深さは西壁際の4本かたまっているものが、北東から時計廻りに14cm、26cm、48cm、28cmで、その他のものは北西のものから時計廻りに20cm、25cm、13cm、13cmである。

S I -08 (第46図、図版21)

調査区南端のA 5 グリッドで検出された。規模は $3.42 \times 2.99\text{m}$ 、面積は 9.60m^2 である。南向きの斜面にあるために、確認面から床面までの深さは部分によって異なり、深い所で30cm、浅い所で30cmである。カマドは北西壁の中央よりやや東に寄った部分に設けられている。住居主軸方位はN-36°-Eである。主柱穴は検出されず、床面には南隅に性格不明で深さ23cmの掘込みと、西隅壁際に平面円形で深さ81cmの貯蔵穴とが検出されている。カマドの前面にはカマド構築材の一部と考えられる山砂が流出していた。カマドはその大部分が壁外に構築されており、遺存状況は当遺跡の中では比較的良いものであった。カマド覆土内からは1の土器が検出されている。

S I -09 (第46図、図版22)

調査区南寄りのB 5 グリッドに所在する。遺構の大部分は調査区域外にかかっており、検出されたのはわずかな部分のみである。これだけの部分からの復原であるからあまり意味はないが、南西壁の走行方位はN-25°-Wである。確認面から床面までの掘込みの深さは42cmである。確認部分では周溝は全周していた。

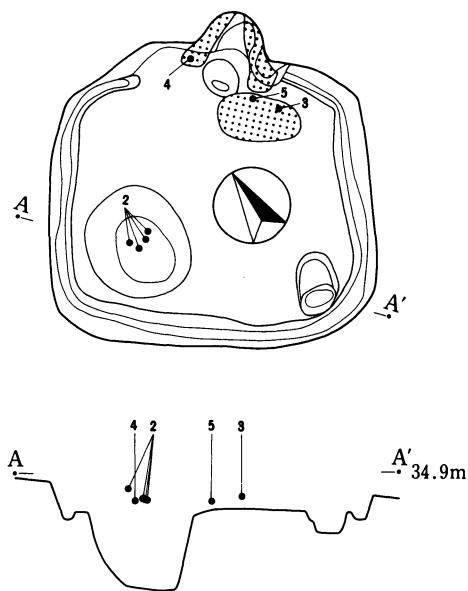
S I -10 (第46図、図版22)

調査区南寄りのB 5 グリッドで確認された。遺存状態は非常に悪く、カマドの両袖がかろうじて確認できたことで、住居跡であると認識できた遺構である。覆土と考えられた土の広がりから住居の規模を復原すると $4.0 \times 3.4\text{m}$ になる。従って面積は 13m^2 前後、主軸方位はN-14°-Wということになろうか。床面の硬化範囲も特に確認できなかった。カマドも両袖の山砂が痕跡程度に検出できたのみである。カマド東袖の東側には遺物が集中していた。

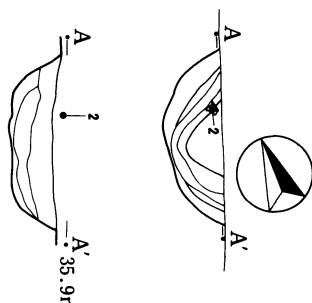
S I -11 (第46図、図版22)

調査区中央のB 4 グリッドに所在する。規模は $3.86 \times 3.70\text{m}$ で、住居面積は 12.90m^2 である。カマドは北壁中央に設けられており、住居主軸方位はN-2°-Wである。確認面から床面までの掘込みの深さは48cmである。壁周溝は全周している。床面には出入口ピットと考えられる掘込みが2基、それに性格不明の柱穴状掘込みが2基ある。南壁際中央に二つ並んでいる柱穴状の

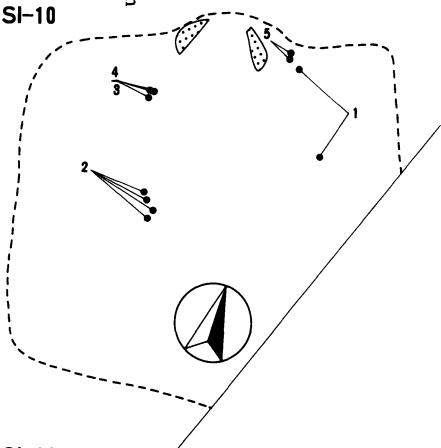
SI-08



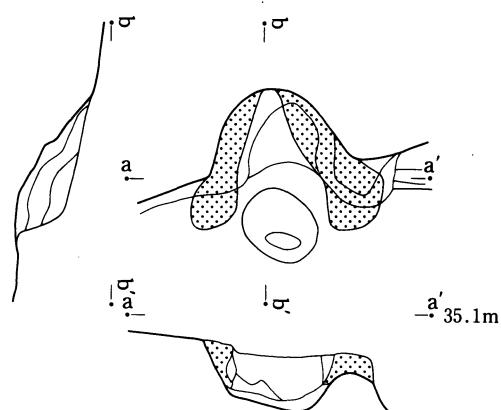
SI-09



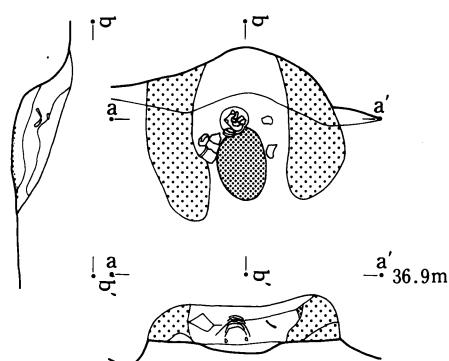
SI-10



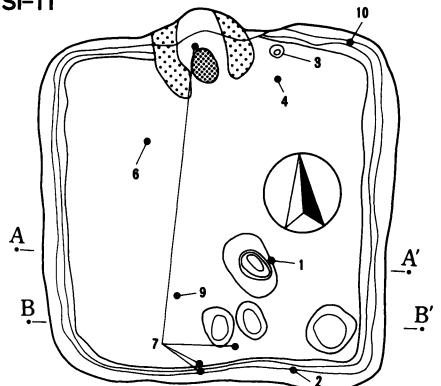
SI-08 カマド



SI-11 カマド



SI-11



0 カマド 2 m

0 住居 5 m

第46図 SI-08~11

掘込みが出入口ピットと考えられる。深さは東側のものが12cm、西側のものが14cmである。その他の二つの掘込みは、住居中央に近いものが深さ49cm、南東隅壁際のものが深さ11cmである。カマドは両袖と火床部分とが明瞭に残っていたほかに、カマド中央からは1・3・6・7等の多くの土器が逆さに重ねられた状況で検出された。

S I -12 (第47図、図版23)

調査区の中央よりやや北寄りのB 3 グリッドに所在する。規模は 4.19×4.13 mで、住居面積は 16.87m^2 である。カマドは北壁中央に設けられており、住居主軸方位はN-0°である。壁周溝は全周している。床面には南壁際中央の所に深さ11cmの出入口ピットと考えられる掘込みが確認されたのみで、主柱穴は全く確認できなかった。確認面から床面までの掘込みの深さは33から49cmである。カマドは当遺跡のものとしては比較的良好な遺存を見せており、両袖の山砂がしっかり残っていた。

S I -13 (第47図、図版23)

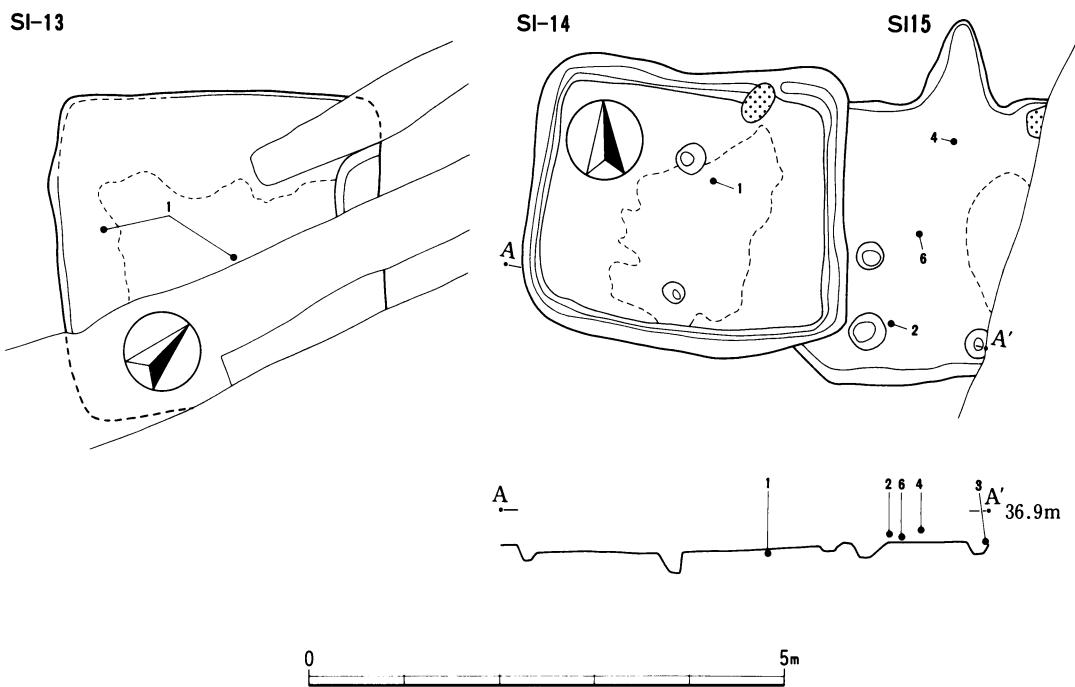
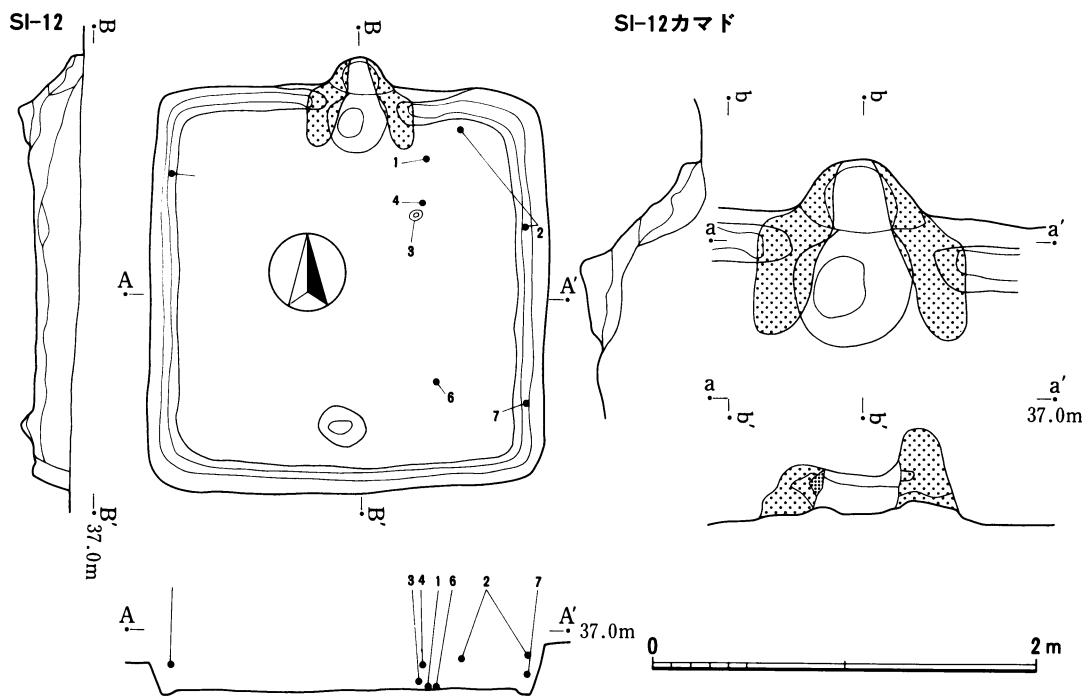
調査区の中央よりやや北寄りのB 3 グリッドに所在する。住居の東側はわずかに調査区域外にかかっており、また南北に走る2本の芋穴の攪乱によって、住居はかなりの割合で破壊されている。規模及び面積は 3.42×3.3 m、 10.55m^2 という数字が復原できる。確認面から床面までの深さは9から18cmである。カマドは北西壁中央に設けられていたようであるが、確認できたのは構築材の山砂の散乱のみである。住居主軸方位はN-42°-Eである。床面には壁周溝、貯蔵穴、主柱穴など一切検出されず、床の硬化面が確認できたのみである。

S I -14 (第47図、図版23)

調査区やや北寄りのB 3 グリッドで検出された。S I -15の西壁の一部を破壊している。規模は 3.22×2.89 m、面積は 9.30m^2 である。カマドは北壁のやや東寄りの所に設けられており、住居主軸方位はN-6°-Eである。確認面から床面までの掘込みの深さは18cmで、壁周溝は全周している。南壁際中央には深さ21cmの出入口ピットと考えられる掘込みが検出されている。さらにもう1本、北壁に近い方に深さ11cmの柱穴様の掘込みがあるが、これは性格不明である。カマドは周溝を区切るように残っている山砂が、わずかな痕跡のようである。

S I -15 (第48図、図版24)

調査区やや北寄りのB 3・C 3 グリッドにまたがって検出された。東側1/3は調査区外のため調査できず、また西壁部分はS I -14によって破壊されている。掘込み規模は東西が不明、南北が2.90mである。面積は求められない。カマドは北壁中央に設けられており、住居主軸方位



第47図 SI-12～15

はN-2°-Eである。確認面から床面までの掘込みの深さは16cmである。壁周溝は確認できなかつた。床面には南壁際中央に出入口ピットと考えられる深さ13cmの掘込みが確認されたほかに、2本の性格不明の柱穴様の掘込みが検出されている。それぞれの深さは北側のものが13cm、南側のものが15cmである。カマドはカマド尻を深く壁外に突き出す形態のものであるが、遺存状態は悪く、構築材の山砂は住居北東隅の流出材以外ほとんど検出されなかつた。

S I -16 (第48図、図版24)

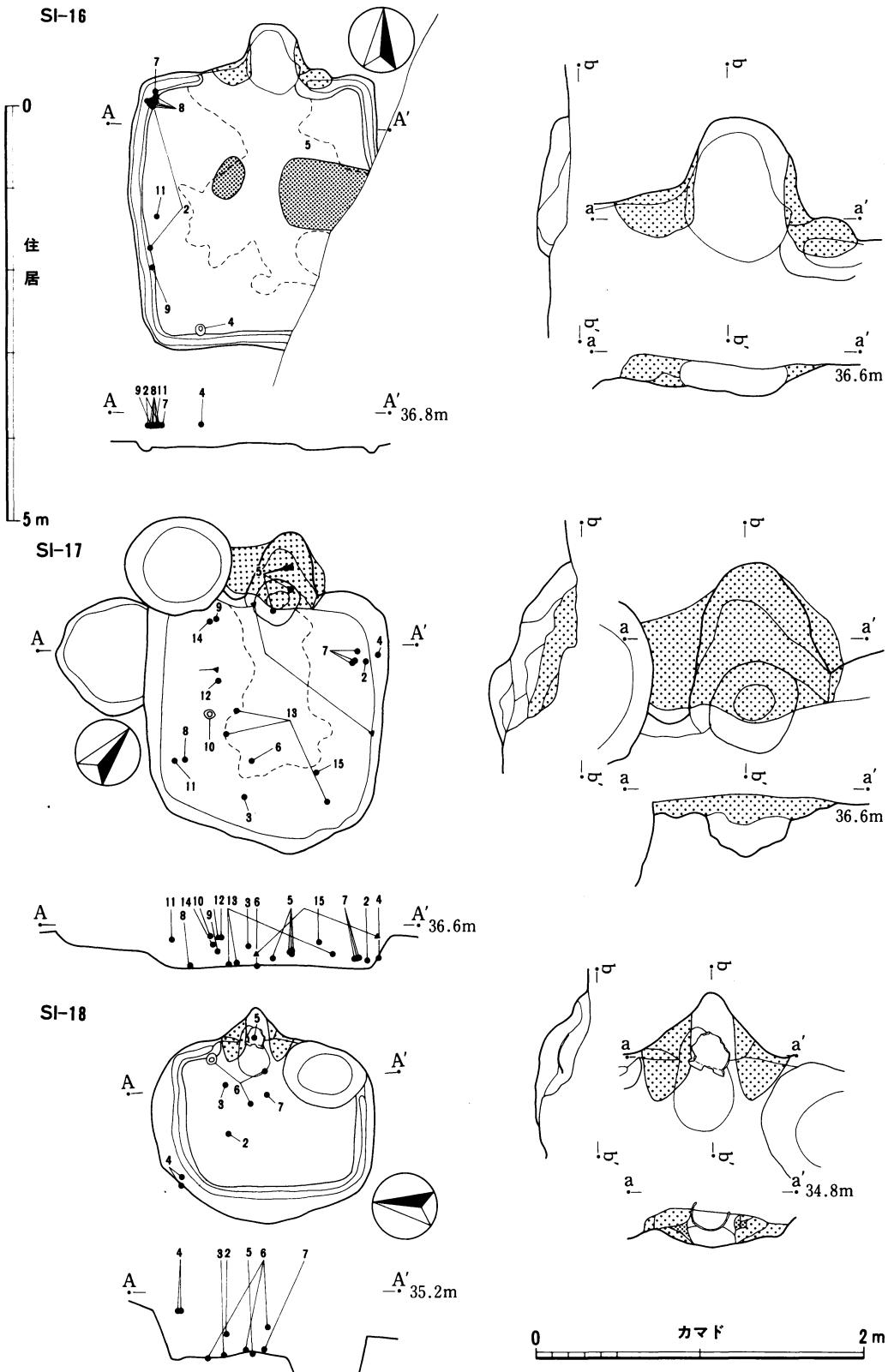
調査区北寄りのC 3 グリッドに所在する。住居の南東側1/5は調査区域外にかかっている。規模は 3.32×3.0 m、面積は復原で $10.06m^2$ と求められる。カマドは北壁中央に設けられており、住居住主軸方位はN-4°-Wである。確認面から床面までの掘込みの深さは浅い部分では3cm、深い部分で10cm程度である。壁周溝は全周しており、柱穴は全く確認できなかつた。カマド構築材であった山砂は、住居掘込みの内外にかかわらずカマド周辺に広く分布していた。また、床面中央から東にかけての広い範囲には焼土が分布していた。カマドは両袖の山砂が確認できた程度で、遺存状態は良くなかった。

S I -17 (第48図、図版25)

調査区北端に近いC 2 グリッドに所在する北西壁付近をSK27・28の2基の土坑によって破壊壊されている。規模は 3.12×2.80 m、面積は $8.47m^2$ である。確認面から床面までの深さは30から40cmである。カマドは北東壁中央に設けられており、住居住主軸方位はN-37°-Wである。壁周溝は巡っておらず、主柱穴等の掘込みは一切検出されなかつた。カマドは遺存状態不良で、構築材の山砂は住居掘込みの外側に広く散布している。

S I -18 (第48図、図版25・26)

調査区南端近くのA 6 グリッドに所在する。平面形はやや丸みの強い長方形で、上端部分で計測すると、規模は 2.72×2.22 m、面積は $5.10m^2$ である。カマドは東壁中央に設けられており、住居住主軸方位はN-96°-Eである。確認面から床面までの掘込みの深さは17cmから60cmで、地形の傾斜のために部位によってかなり異なる。住居南東隅には平面橢円形の貯蔵穴が掘り込まれている。床面からの深さは42cmである。カマドは両袖の構築材である山砂が明瞭に検出されたほかに、覆土中央からは5の甕が縦に半截されたような状態で検出された。



第48図 SI-16~18

第6表 住居構造一覧

No	平面形	規模(長×短)m	面積(m ²)	カマド	主軸方位	主柱穴	他の柱穴	貯蔵穴	周溝	時期	その他の特記事項
1	方形	3.65×3.40	(12.14)	北西壁東寄	N-25° -W	(3)	——	1	なし		SI-02が一部破壊している
2	方形	4.00×3.50	12.96	北西壁中央	N-16° -W	なし	——	2	(全周)		SI-02の一部を破壊している
3	方形	3.52×3.43	11.84	北東壁中央	N-24° -E	なし	出入口P1	なし	全周		焼土・炭化材・山砂分布
4	方形	3.53×3.48	11.77	北壁中央	N-2° -E	(1)	出入口P2	なし	西壁のみ		南壁中央に張り出し部分あり
5	方形	(2.78)×2.62	——	(北西壁か)	N-37° -W	なし	出入口P1、性格不明P1		(全周)		西側1/3は調査区域外
6	方形	3.06×3.06	8.90	北西壁中央	N-46° -W	(3)	なし	なし	なし		床硬化面2枚確認
7	(方形)	(3.52)×3.48	11.50	——	(N-2° -W)	?	性格不明P8	なし	なし		遺存状態不良
8	方形	3.42×2.99	9.60	北東壁中央	N-36° -E	なし	性格不明P1	1	全周		
9	(方形)	——	——	——	(N-25° -W)	—	——		(全周)		遺構大半は区域外
10	方形	(4.00×3.40)	——	北西壁中央	(N-14° -W)	—	——				遺存状態不良
11	方形	3.86×3.70	12.90	北壁中央	N-2° -W		出入口P2、性格不明P2		全周		カマド内で遺物多量検出
12	方形	4.19×4.13	16.87	北西壁中央	N-0°	なし	出入口P1	なし	全周		
13	方形	3.42×(3.30)	10.55	北東壁中央	N-42° -E	—	——				遺存状態不良
14	方形	3.32×2.89	9.30	北壁東寄	N-6° -E	なし	出入口P1、性格不明P1	なし	全周		SI-15の一部を破壊している
15	方形	——×2.90	——	北壁中央	N-2° -E	なし	出入口P1、性格不明P2		なし		SI-14に一部破壊されている
16	方形	3.32×3.00	(10.06)	北壁中央	N-4° -W	(なし)	(なし)	(なし)	(全周)		東側1/5は調査区域外
17	方形	3.12×2.80	8.47	北西壁中央	N-37° -W	なし	なし	なし	なし		SK-27・28が一部破壊している
18	方形	2.72×2.22	5.10	東壁中央	N-96° -E	なし	なし	1	全周		

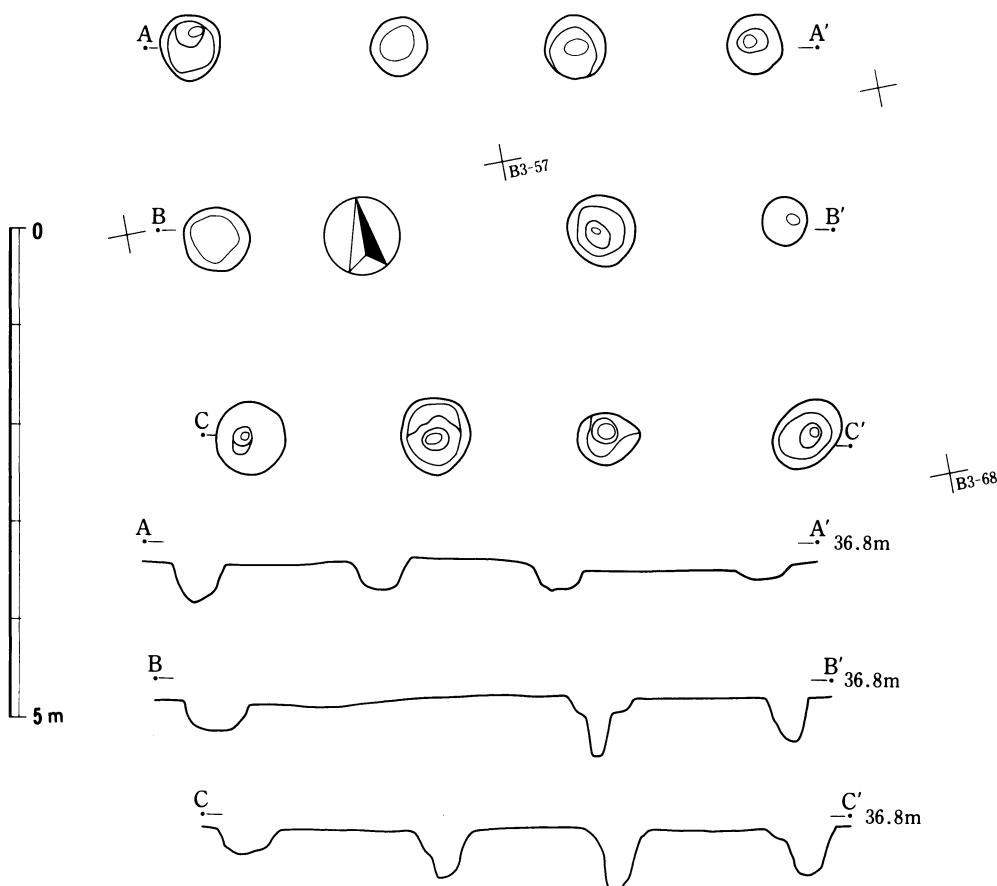
※()は確定できないものについて付してある

2 掘立柱建物跡

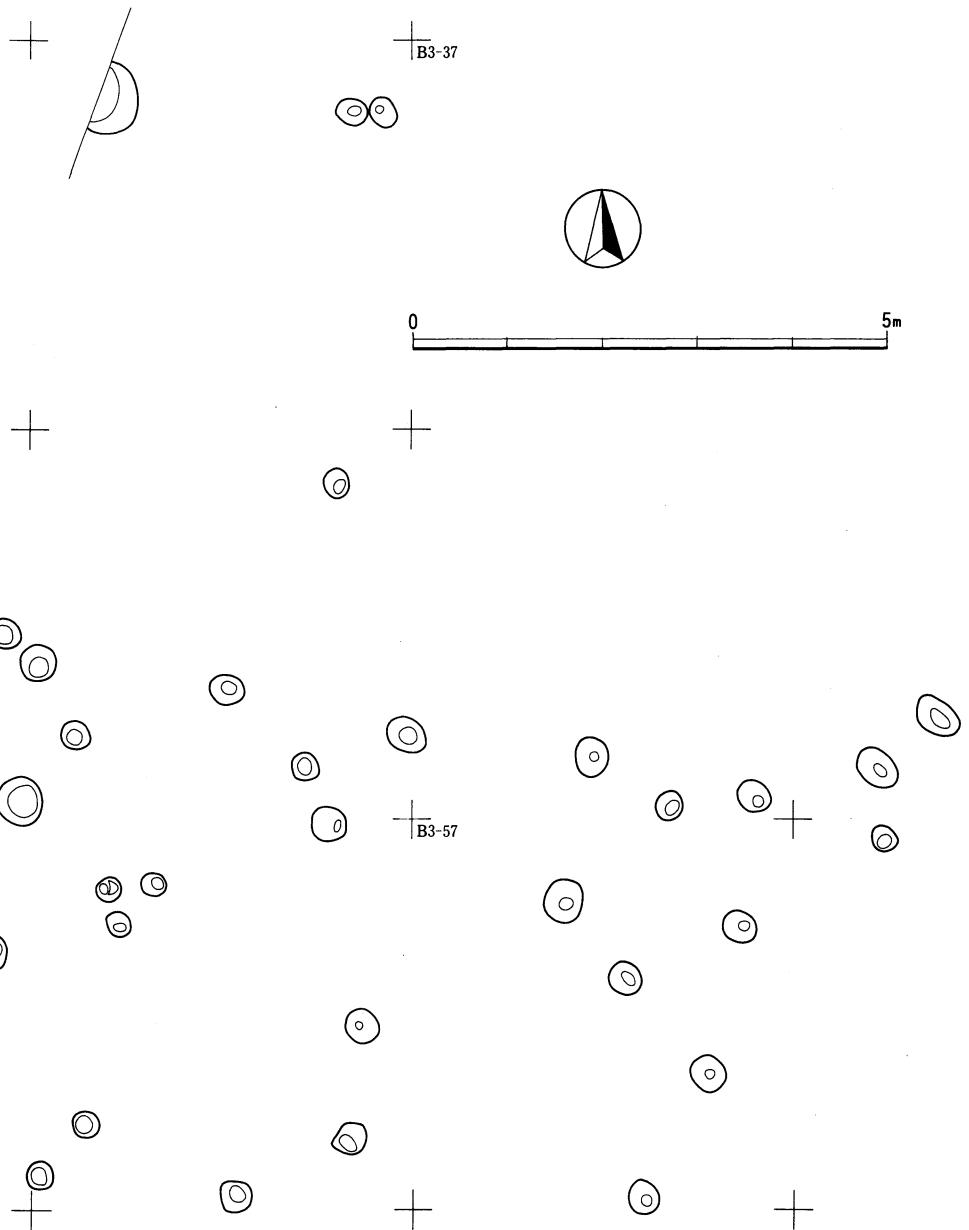
確実に掘立柱建物であるといえる遺構としては、SB-01が検出されているのみである。このほかに、SB-02・SB-03・SB-04群とした並びを確認できない柱穴様の掘込み群が3群見つかっているが、性格は不明である。住居遺構の柱穴のみが残存している可能性もあるし、掘立柱建物であることを、調査者が確認できなかっただけである可能性もある。ここではSB-02・SB-03・SB-04群については図を提示するのみにとどめ、SB-01についてのみ説明する。

SB-01 (第49図、図版26)

調査区中央よりやや北寄りのB3グリッドに所在する。身舎が 2×2 間、その東側に庇と考えられる部分が1間分張り出している。建物の主軸方位はN-80°-Wである。規模は、身舎東西列北側が4.0m、南側が3.8m、南北列西側が4.15m、東側が4.0m、庇部分は南北列が4.0m、東西列北側が1.55m、南側が1.20mである。土層断面図を見る限りでは、柱痕は確認されなかった。

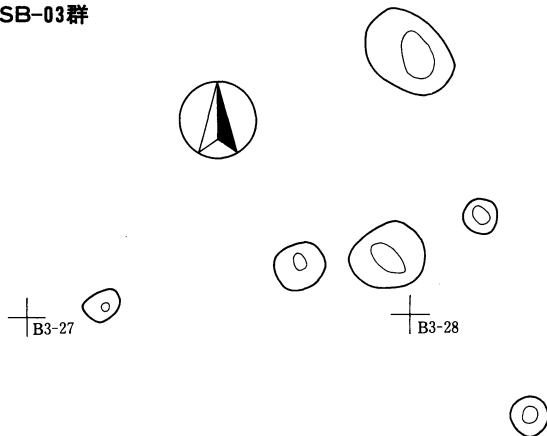


第49図 SB-01

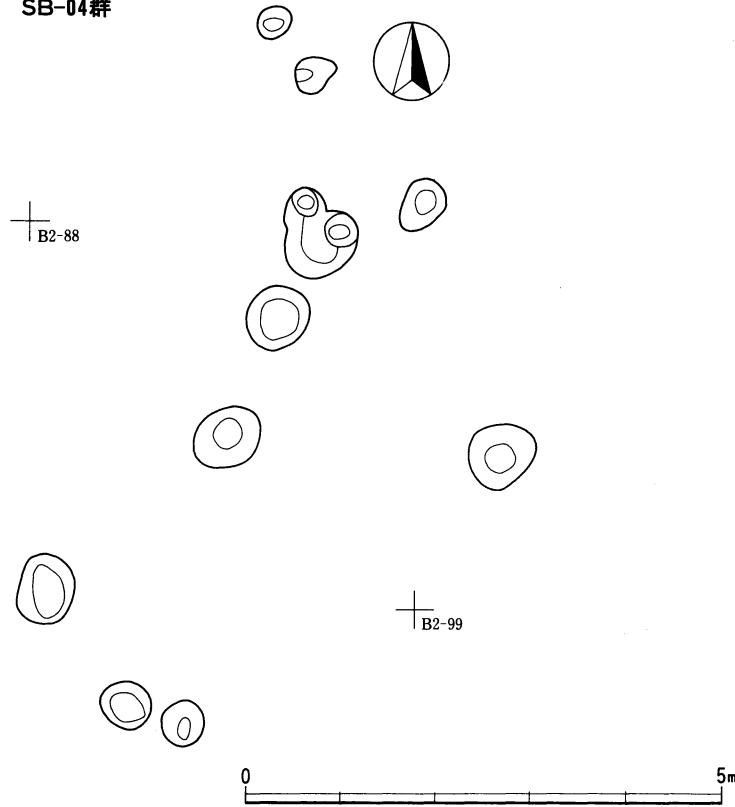


第50図 SB-02

SB-03群



SB-04群



第51図 SB-03・04

3 陷穴

S K -01 (第52図、図版27)

調査区ほぼ中央のB 4 グリッドに所在する。長楕円形の平面形態を示し、確認面での規模は長軸2.22m×短軸1.02mである。底部は細く狭まり、完全に掘り上げることができなかつた。ボーリング・ステッキで確認した確認面から底面までの深さは1.9m程度であった。遺構内堆積土は最上層が混和物のない黒色土、次がローム粒を少量含む黒褐色土、その下はローム粒・塊を含む暗褐色土である。

S K -02 (第52図、図版27)

調査区中央よりやや北寄りのB 3 グリッドに所在する。西端はわずかに調査区外にかかっており調査できなかつた。S K -01同様平面形態は長楕円形であったと考えられる。短軸は0.94mで、長軸は確認できた部分で2.6mである。確認面から底面までの深さは1.38mである。遺構内堆積土は上から順に黒褐色土、暗褐色土、ローム塊主体の暗褐色土、ローム塊を多く含む褐色土である。

S K -03 (第52図、図版27)

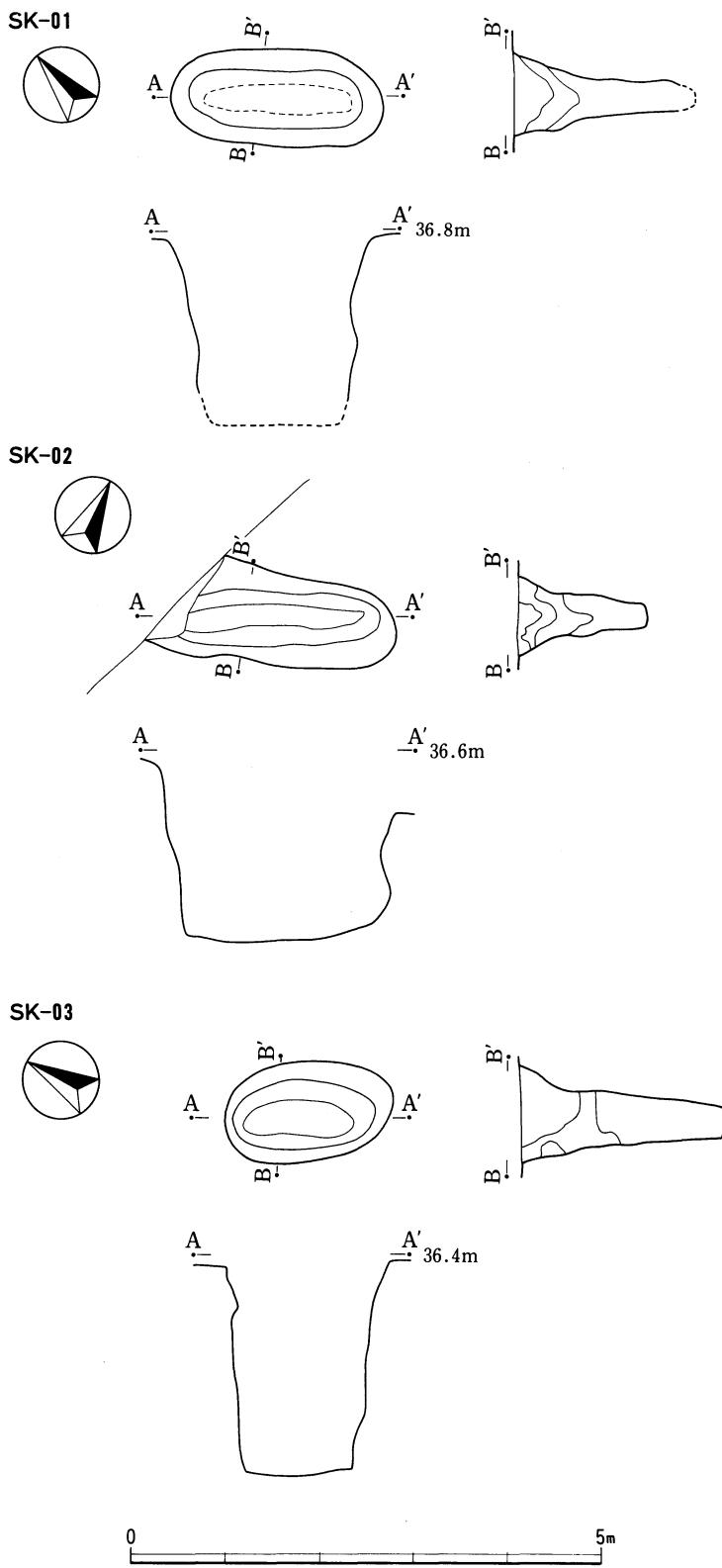
調査区北端のC 2 グリッドに所在する。平面形態はS K -01・02に比べて丸みの強い楕円形である。確認面での規模は長軸1.8m×短軸1.0m、確認面から底面までの掘込みの深さは2.2mである。遺構内堆積土は上から順に混和物の無い黒色土、ローム粒を少し含む黒褐色土、ローム塊を多めに含む褐色土である。

4 その他の土坑

S K -06・07・08 (第53図、図版27)

調査区中央やや北寄りのB 2 ・B 3 グリッドにまたがつて、3基かたまつて検出された。S K -07はS K -06・08の双方によって一部を破壊されているが、S K -06とS K -08の前後関係は明確にできなかつた。S K -06・07の平面形態は長方形でS K -08は円形である。それぞれの遺構の計測値はS K -06が長軸2.2m×短軸1.05m×深さ0.17m、S K -07が長軸(2.6m)×短軸(1.65m)×深さ0.2m、S K -08が長径0.85×短径0.7m×深さ0.15mである。遺構内堆積土は3遺構ともに近似しており火山灰状の塊を全体に含み、さらに焼土をやや多く含んでいる。S K -06とS K -08はさらに柱穴様の小さな掘込みが絡んでおり、S K -7の北端には別の掘込みが重複しているようである。

次に示すS K -13・14・15・30の4基の土坑は、狭い範囲に集中し、形態などの諸様相も非常に酷似した資料であるので、まとめて説明する。



第52図 SK-01~03

S K -13 (第53図、図版27)

調査区北端のC 2 グリッドに所在する。平面形はややゆがんだ円形で、底面は平らである。土層断面図中のスクリーン・トーンで示した部分は多量の焼土粒と少量の炭化物粒とを含む層である。さらに多量の土器片も覆土上半に混入していたために、遺構検出段階においては土師器焼成遺構かと考えられた。が、精査が進むにつれて須恵器片が出てきて、その上土坑の底面・壁面が被熱していなかったことから、灰塵を処理した穴であろうという結論に達した。掘込み規模は長径1.35m×短径1.17m×深さ0.3mである。

S K -14 (第53図、図版27)

S K -13の北側に隣接して掘り込まれている土坑である。形態、堆積土の状況、遺物の出土状況のすべてにおいてS K -13と酷似している。ただし、焼土の混入量はS K -13に比べるとかなり少ない。掘込み規模は長径1.5m×短径1.2m×深さ0.5mである。S K -13と同様に底面や壁面が被熱しておらず、性格も同様であると考えて良いであろう。

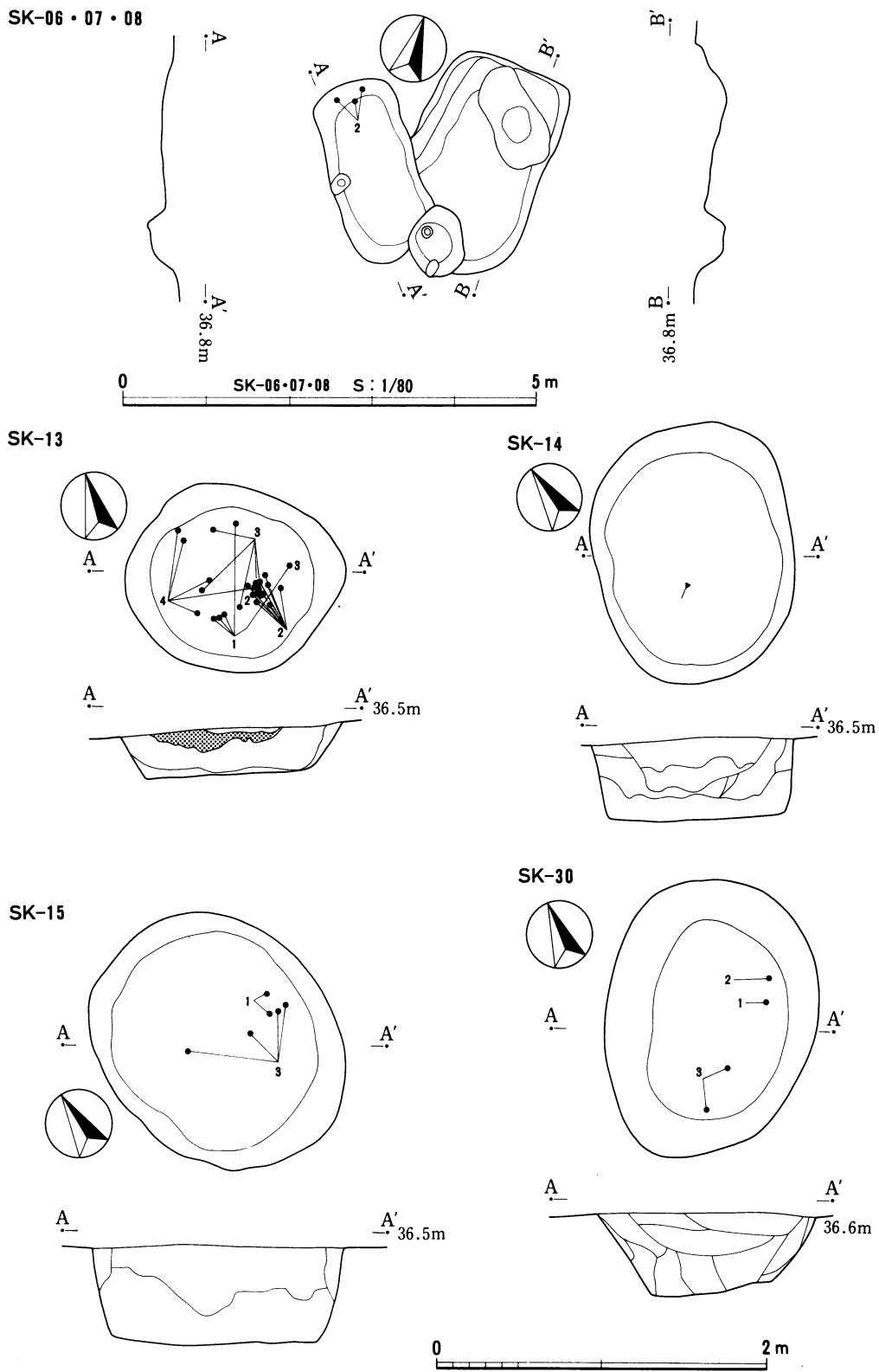
S K -15 (第53図、図版28)

S K -13の南に4mほど離れたところで検出された。形態、堆積土の状況、遺物の出土状況などすべてS K -13・14に似ている。しかし、焼土粒の混入量はS K -14同様あまり多くない。掘込み規模は長径1.6m×短径1.35m×深さ0.6mである。遺構の性格はやはりS K -13・14と同様であろうと考えられる。

S K -30 (第53図、図版28)

S K -13・15の東に2mほど離れたところから検出された。平面形はやや楕円形で、壁の立ち上がり角度もやや緩やかではあるが、全体的な特徴はやはりS K -13・14・15と同様である。堆積土中の焼土粒の混入量はあまり多くない。掘込み規模は長径1.7m×短径1.25m×深さ0.5mである。底面、壁面に被熱は見られず、遺構の性格はS K -13・14・15と同様であろうと考えられる。

このように、形態を初め種々の面において良く似ているS K -13・14・15・30の4基の土坑は、非常に狭い範囲に集中しており、さらには出土遺物から比定される時期もほぼ同一時期であろうと考えられる。狭い路線内の調査であるので、同様の遺構が周辺に広がるものかどうかは想定の域を出ないが、この状況から考えて基数はもっと多かった可能性が高いであろう。



第53図 SK-06~08、SK-13~15、SK-30

S K-09 (第54図)

B 3 グリッドに所在する。平面形円形で径1.5m、深さ0.25mである。

S K-10 (第54図)

B 3 グリッドに所在する。2基の円形の掘込みが重複している。西側のものが径1.1m、深さ0.22m、東側のものが径1.1m、深さ0.32mである。

S K-11 (第54図)

B 3 グリッドに所在する。上端は隅丸方形に近い形状で、中段は円形である。掘込み規模は径1.5m、深さは中段までが0.25m、最下部までが0.4mである。

S K-12 (第54図)

B 3 グリッドに所在する。不整形の土坑で、掘込み規模は長径1.15m、短径0.9m、深さ0.25mである。土器片が若干まとまって検出されたが、実測可能な個体はなかった。

S K-16 (第54図)

B 3 グリッドに所在する。2基並んでいるものを一括して処理した。北側のものは不整形で長径0.65m×短径0.5m、深さ0.15m、南側のものは長径0.3m×短径0.25m、深さ0.25mである。北側の掘込みからは高台付杯が出土している。

S K-17 (第54図、図版28)

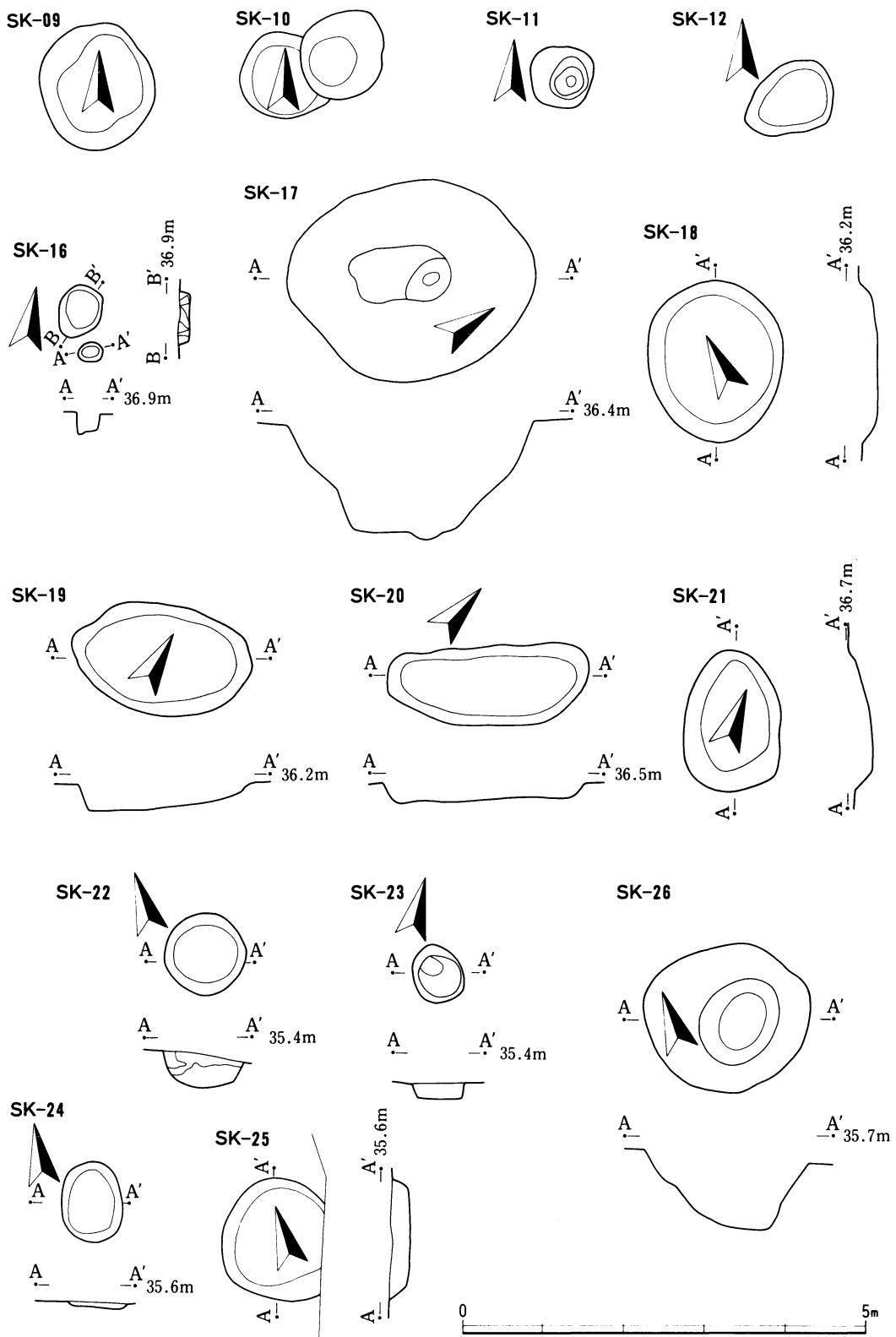
B 4 グリッドに所在する。擂鉢状の形態を示す土坑で、上端は3.1m×2.4m、下端は1.2m×0.65mで、掘込みの深さは1.45mである。人為的に埋戻しが行われている。

S K-18 (第54図、図版28)

B 5 グリッドに所在する。S K-19の東側に隣接している。長径1.95m×短径1.65m、深さ0.2mである。

S K-19 (第54図、図版28)

B 4 グリッドに所在する。S K-18の西側に隣接している。平面形は橢円形で、長径2.2m×短径1.35m、深さ0.3mである。



第54図 SK-09~12、SK-16~26

S K -20 (第54図、図版28)

B 4 グリッドに所在する。S K -17の北側に隣接している。細長く浅い掘込みである。規模は長軸2.5m × 短軸1.0m × 深さ0.2mである。

S K -21 (第54図、図版28)

B 4 グリッドに所在する。平面形は橢円形で、長径1.7m × 短径1.2m × 深さ0.25mである。

S K -22 (第54図)

A 5 グリッドに所在する。S K -23の西側に隣接している。平面形は円形で、径1.0m、深さは0.45mである。

S K -23 (第54図)

A 5 グリッドに所在する。S K -22の東側に隣接している。平面形は円形で、径0.7m、深さは0.2mである。

S K -24 (第54図、図版28)

B 5 グリッドに所在する。S K -25の南西側に隣接している。平面形は橢円形で、長径1.0m × 短径0.7m × 深さ0.7cmである。

S K -25 (第54図、図版28)

B 4 グリッドに所在する。S K -24の北東側に隣接している。東側のわずかな部分が調査区域外にかかっている。平面形は円形で、径1.5m、深さ0.25mである。

S K -26 (第54図、図版28)

B 5 グリッドに所在する。S I -10の調査終了後にその下層で検出した。平面形は橢円形で、擂鉢形の掘込みである。掘込み規模は上端2.1m × 1.8m、下端0.7m × 0.5m、深さ0.9mである。

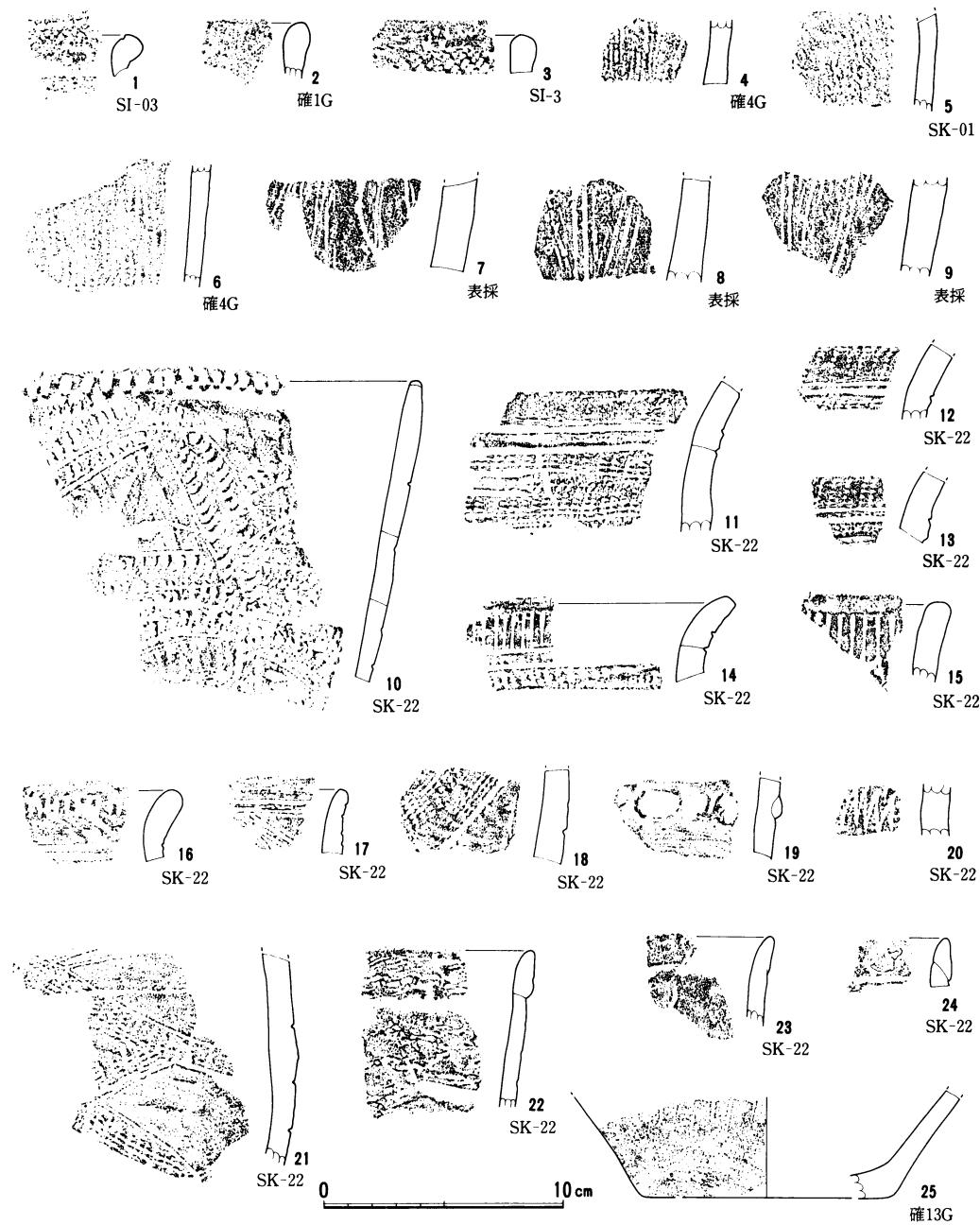
第3節 出土遺物

1 繩文時代遺物 (第55図、図版29)

(1) 繩文土器

本遺跡からは早期初頭と前期後葉の土器が主に出土している。

1～6は撚糸文土器で、1は肥厚する口縁の頂部にL Rの横位方向回転、口内にRの側面圧



第55図 繩文土器

痕が加えられる。井草II式であろう。2は口縁部がわずかに肥厚し、撚糸文Rが施される。3はL Rの縦位方向回転施文で、口唇・口内がよく磨かれている。いずれも夏島式であろう。4・5は撚糸R、6はRLがそれぞれ密に施される。7～9は同一個体で、3条を単位とする浅い縦位の沈線が施される。暗橙褐色を呈し、胎土には白色粒子を多量に含む。三戸式に位置づけられよう。

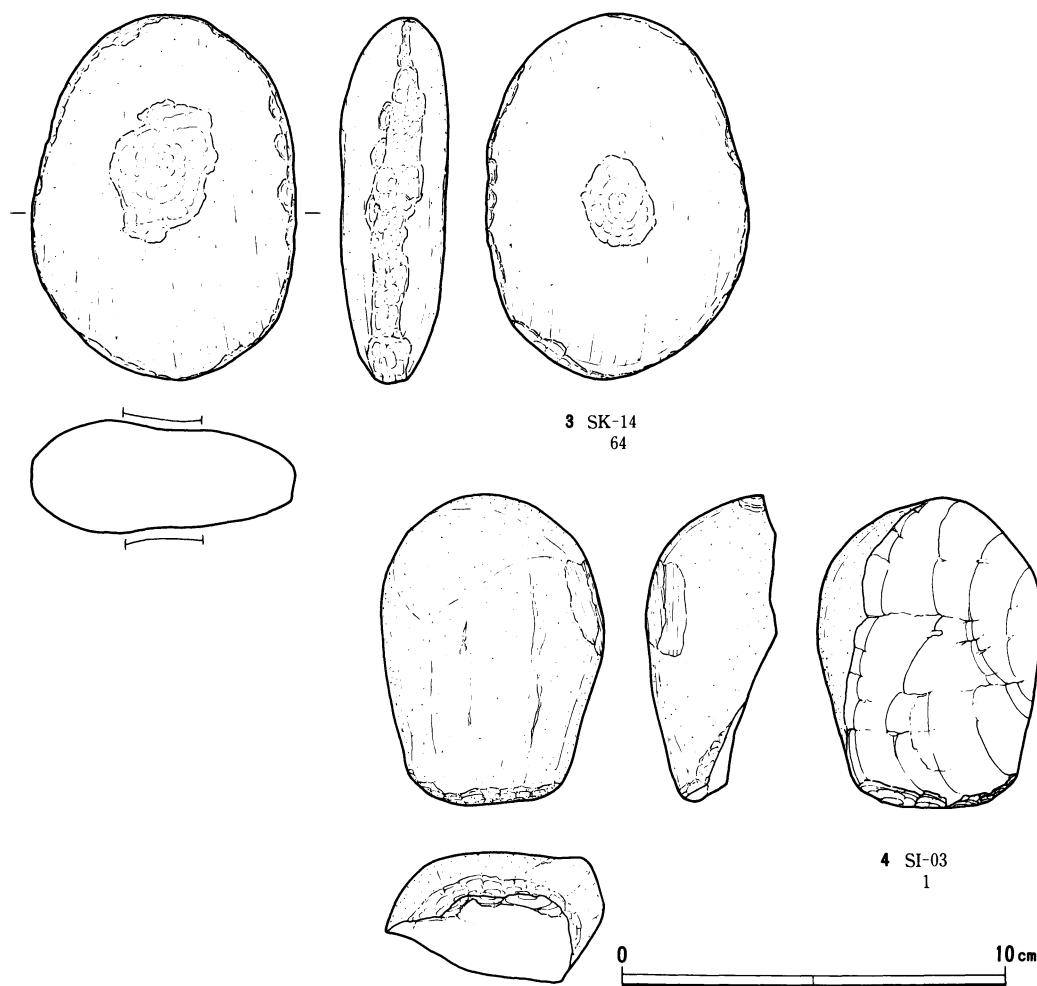
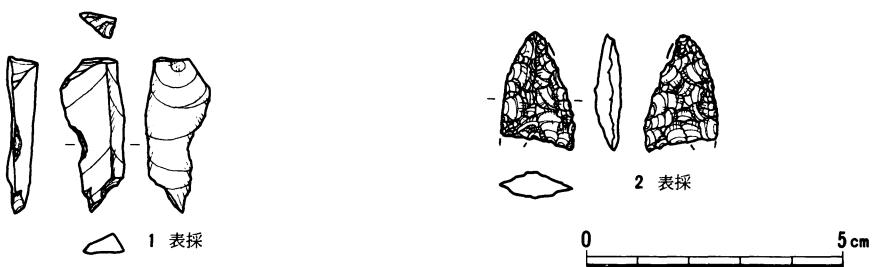
10～26は前期後～末葉に属する。10は外反気味にストレートに立ち上がる器形で、口唇に刻みを有する。稚拙な幾何学区画内にアナダラ属貝殻による粗雑な側面圧痕が加えられ、部分的に区画外にも認められる。興津I式であろう。10～16・18・21は磨消貝殻文を有し、胴に張りのある器形を呈する興津II式である。整備された条線帯を巡らし(14～16)、幾何学文様が施される(18・21)。17は半截竹管による平行線文が施され、内外面ともよく磨かれている。19は刺突文、20には波状貝殻文が施される。22～24は複合口縁の深鉢で、22は横位、23には縦位の結節文が施される。前期末葉の所産であろう。

(2) 石器 (第56図1～4、第7表、図版29)

本遺跡で出土した石器は総点数5点である。そのうちの1点は旧石器時代の所産と考えられる石器であるが、原位置を失って出土しているためここで合わせて報告する。器種構成は二次加工を有する剝片1点、石鏃1点、磨石1点、敲石1点、礫1点である。資料数が極めて少ないので器種構成面や分布面からの特徴的な傾向は把握されない。これらの石器は1の石器を除いて、本遺跡の出土土器の主体となる縄文時代早・前期の所産である可能性が高いが、資料数が少ないとから断定はできない。1は二次加工を有する剝片である。先端部から樋状剝離と器体を斜めに切断するような調整加工が認められる。2は石鏃である。両側縁が円く膨らみ、片脚部を欠損するが基部は浅く弧を描いて抉れるものと推定される。3は磨石である。表裏面全面に著しい擦り痕と、表裏面につづつ窪みが認められる。器体の側面は全周にわたって敲打痕が巡っている。4は敲石である。裏面が剝がされた後に比較的鋭利な下端部を敲打しており、先端部の潰れが顕著である。

第7表 縄文時代以降出土石器計測表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	最大長×最大幅×最大厚 (mm)	重量 (g)	打角 (°)	調整角 (°)	調整部位	使用痕部位	折れ面部位
1	表採	R剝片	珪質頁岩	29.3×11.3×5.0	1.4	90		LM,T		
2	表採	石鏃	黒曜石	22.2×13.7×4.9	1.1					
3	SK14-64	磨石	砂岩	92.3×67.8×28.4	252.4					
4	SI03-1	敲石	砂岩	78.7×57.7×34.1	182.7					



第56図 繩文時代石器実測図

2 奈良・平安時代遺物

(1) 竪穴住居出土の土器

S I -01 (第57図、図版30)

1は須恵器杯である。器表面は内外ともに黒褐色、器肉は橙褐色のいわゆるクスベ焼成の須恵器である。酸化鉄粒、石英微粒を普通量含み、焼成は良い。底部外面は手持ちヘラケズリ調整が施されている。

2・3はロクロ使用の土師器杯である。2は器表外面に女・丸と墨書されている。器表内面が黒色でそれ以外の部分は橙褐色である。石英粒等を普通量含み、焼成は良い。底部外面は中心部に回転糸切り痕、その周辺は手持ちヘラケズリを施している。3は内面全体と外面図示した部分が黒色でそれ以外の部分は乳橙色から橙褐色である。外面底部中央には回転糸切り痕がある。

4は土師器甕である。器表外面は黒褐色で煤も部分的に付着しており、それ以外の部分は乳黄色である。酸化鉄粒、石英粒等をやや多めに含み焼成は良い。

5から7は須恵器甕である。5は橙褐色で、石英粒、酸化鉄粒等を普通量含み、焼成は良い。内面には弱く当具痕が残り、外面のタタキは口縁部にまで及んでいる。6は外面器表が黒褐色から褐色、内面が乳黄色、器肉が赤橙色で、長石粒などを少し含み、焼成は普通である。底部外面は無調整であり、内面は全体に磨耗がひどく調整は不明である。7は器表内面が乳褐色で、それ以外の部分は乳橙色である。鉄粒、石英粒などをやや多めに含み、焼成は良い。底部外面は無調整である。

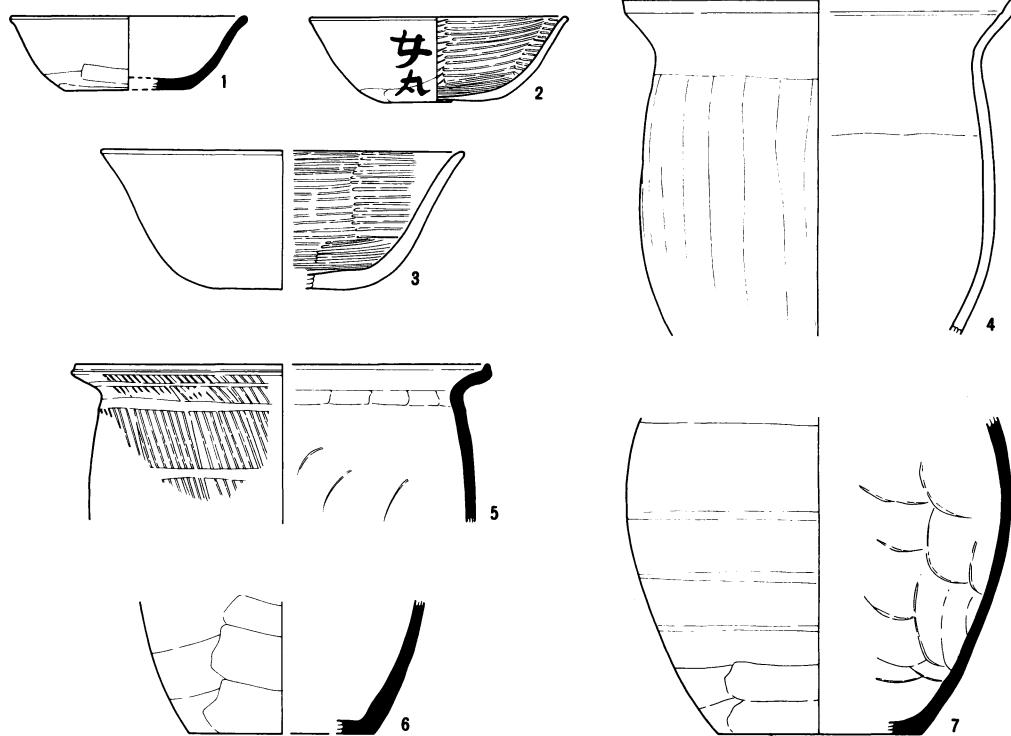
S I -02 (第57図、図版30)

1から4はロクロ使用の土師器杯である。ただし、全体の様相から見て、1・2は須恵器である可能性も残る。基本的に回転糸切り技法で、1が底部のみであるのを除いて、その他は口縁部下端から底部外面にかけて手持ちヘラケズリ調整である。1は器表面が暗褐色で器肉は橙褐色である。酸化鉄粒、石英粒等を含み、焼成は良い。2は器表外面が灰褐色、内面が黒褐色、器肉が橙色である。胎土、焼成は1と同様である。3は乳橙色で、酸化鉄粒、石英粒をやや多めに含み、焼成は普通である。4は乳橙色で酸化鉄粒、石英粒のほかに火山灰と考えられるダマ状のものを多めに含む。焼成は普通である。

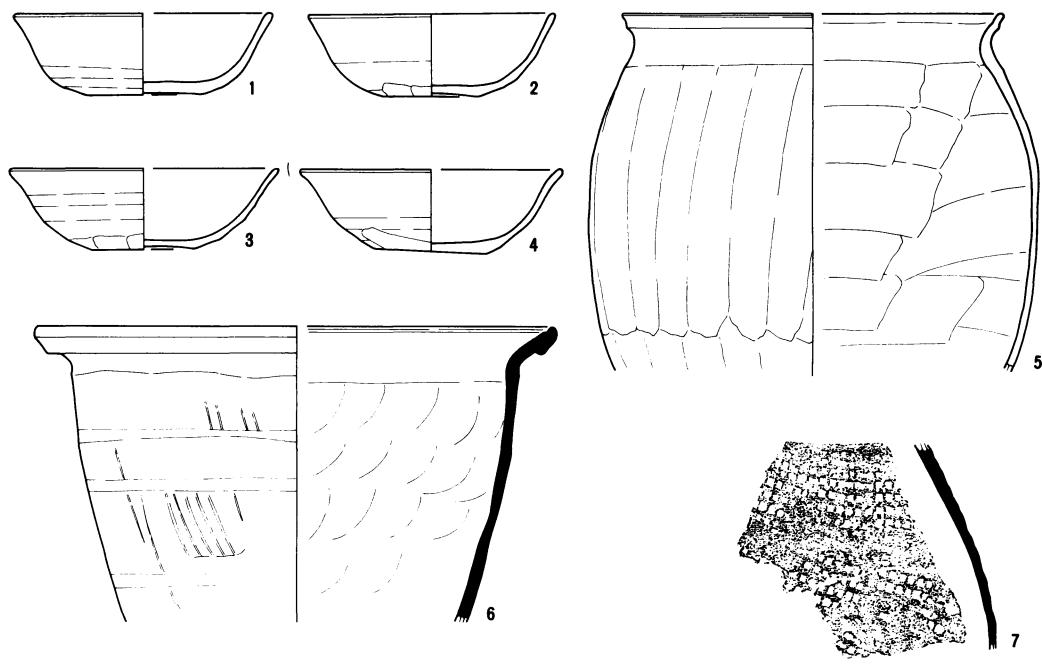
5は土師器甕である。器表は内外面ともに黒褐色、器肉は橙褐色で石英粒を多く、雲母粒を少し含み、焼成は普通である。内面は木口部分を用いたヘラナデ調整が施されている。

6・7は須恵器である。6は甕か甌か不明で、7は甌である。6は乳橙色で、酸化鉄粒、石英粒を多く含み、焼成は良好である。7は外面が格子タタキで、内面には当具痕が残る。色調は外面が灰褐色、内面が暗褐色で、酸化鉄粒、石英粒を多めに含み、焼成は良好である。

SI-01



SI-02



0 15cm

第57図 SI-01・02出土土器

S I -03 (第58図、図版30)

1は土師器杯である。器表は暗橙褐色、器肉は赤橙色である。酸化鉄粒、長石粒を少し含み、焼成は普通である。

2は土師器小型壺である。赤橙色で、石英粒等を普通量含み、焼成は普通である。底部外面はヘラケズリで、内面は全体に磨耗がひどく、調整は不明である。

3は土師器甕である。常総型と呼ばれるもので、器表面は内外面ともに乳褐色で、内面過半には煤が付着している。器肉は乳橙色で石英粒、雲母粒等を多めに含み、焼成は普通である。

S I -04 (第58図)

1はロクロ使用の土師器杯である。器表は内外面ともに上半が乳橙色、下半が黒褐色で、器肉は乳橙色である。酸化鉄粒等を少し含み、焼成は良い。

2は土師器甕である。器表外面が黒褐色、内面が暗褐色、器肉が乳橙色で、酸化鉄粒、石英粒等を多めに含み焼成は良い。

S I -05 (第58図、図版30)

1はロクロ使用の土師器皿である。乳橙色で、石英粒を少し含み、焼成は良い。底部外面は手持ちヘラケズリ調整である。

2は土師器杯である。乳橙色から橙褐色で、酸化鉄粒、長石粒等をやや多めに含み、焼成は良い。底部内面には「×」の線刻がある。

3は土師器甕である。外面が乳橙色、内面が黒褐色で、酸化鉄粒、石英粒をやや多めに含み、焼成は良い。

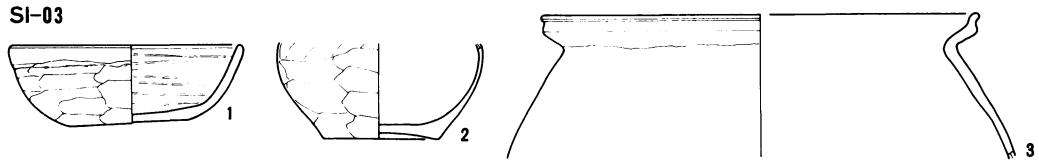
S I -06 (第58図、図版30)

1はロクロ使用の土師器杯である。かなり白っぽい乳褐色で、底部内外面は黒褐色である。石英粒をわずかに含み、焼成は良い。底部外面は回転糸切りの後に一方向の手持ちヘラケズリで調整している。

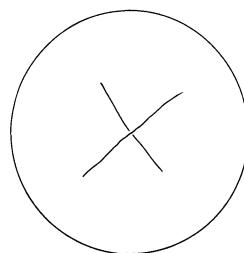
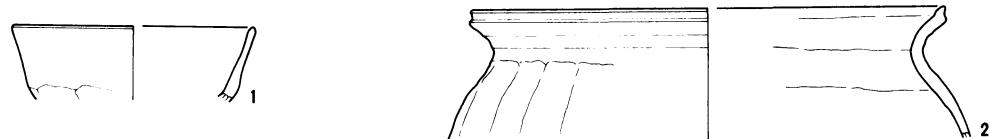
2から4は土師器甕である。2は外面橙褐色、内面黒褐色で、酸化鉄粒、石英粒などを多めに含み、焼成は良い。3は外面黒褐色、内面橙褐色で、胎土は2に同じで、焼成は普通である。底部外面はヘラケズリである。4は外面が黒褐色で、内面は暗褐色、器肉が橙褐色で、酸化鉄粒、石英粒等をやや多く含み、焼成は良い。

5は須恵器甕の底部である。五孔式のものである。色調は橙褐色で部分的に被熱で黒っぽくなっており、酸化鉄粒、石英粒をやや多めに含み、焼成は良好である。

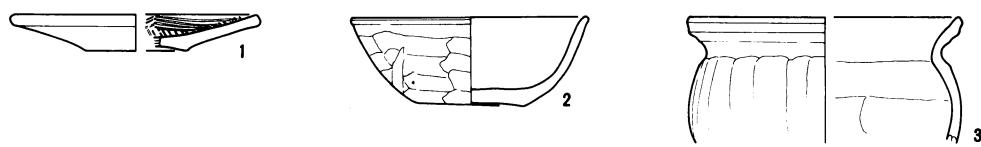
SI-03



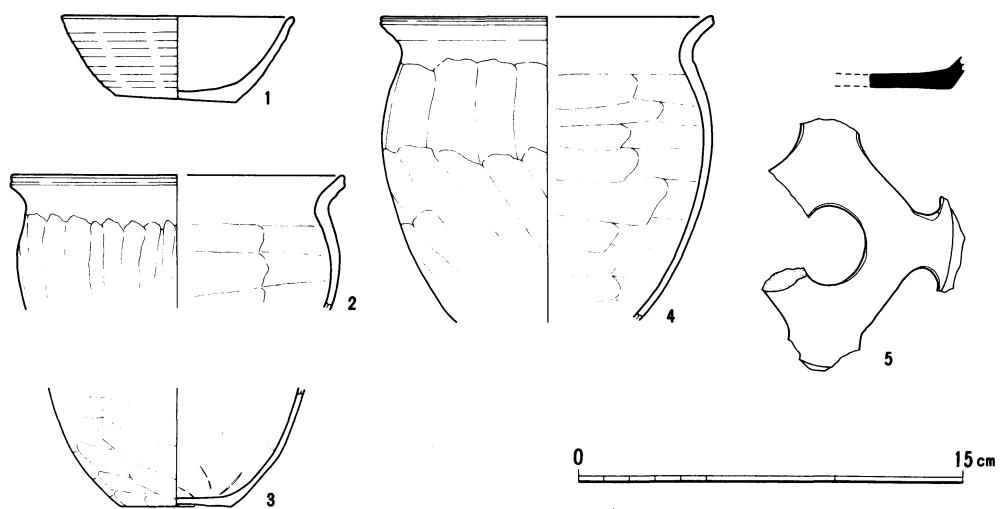
SI-04



SI-05



SI-06



第58図 SI-03～06出土土器

S I -08 (第59図、図版30)

1・2はロクロ使用土師器杯である。底部外面はともに回転糸切り後無調整である。1は乳橙色で、内面底部には白色のものが付着している。酸化鉄粒、石英粒等を多く含み、器表はザラザラしている。焼成は良い。2は内面黒色でそれ以外の部分は乳橙色である。酸化鉄粒、石英粒等をやや多めに含み、焼成は普通であるが、器面は全体にやや磨耗している。

3はロクロ使用土師器高台付椀である。内面黒色でそれ以外の部分は乳橙色である。酸化鉄粒、石英粒等をやや多めに含み、焼成は良い。底部外面は回転糸切り後無調整である。

4・5は土師器甕である。4は器表内外面が橙色、器肉は橙褐色で、石英粒等をやや多めに含み、焼成は良い。内面は横方向の布ナデ調整と考えられる。5は底部外面無調整で、色調は内外面ともに黒褐色で、器肉は橙色、石英粒等を多量に含み、焼成は普通である。

6は須恵器である。外面には上半に自然釉がかかっている。色調は灰色で鉄分を少し含み、焼成は良好である。

S I -09 (第59図)

1は土師器甕である。形状及び調整技法からみて常総型と考えられる。内面胴部は横方向のヘラナデ、外面は方向不明のナデである。色調は乳橙色から乳褐色で、酸化鉄粒、石英粒、雲母粒等を多く含み焼成は良い。

2は丸瓦である。内面は布目が明瞭に残っているが、外面は磨耗がひどく調整技法は見えない。橙褐色から褐色で、石英粒、長石粒等をやや多めに含み焼成は良い。

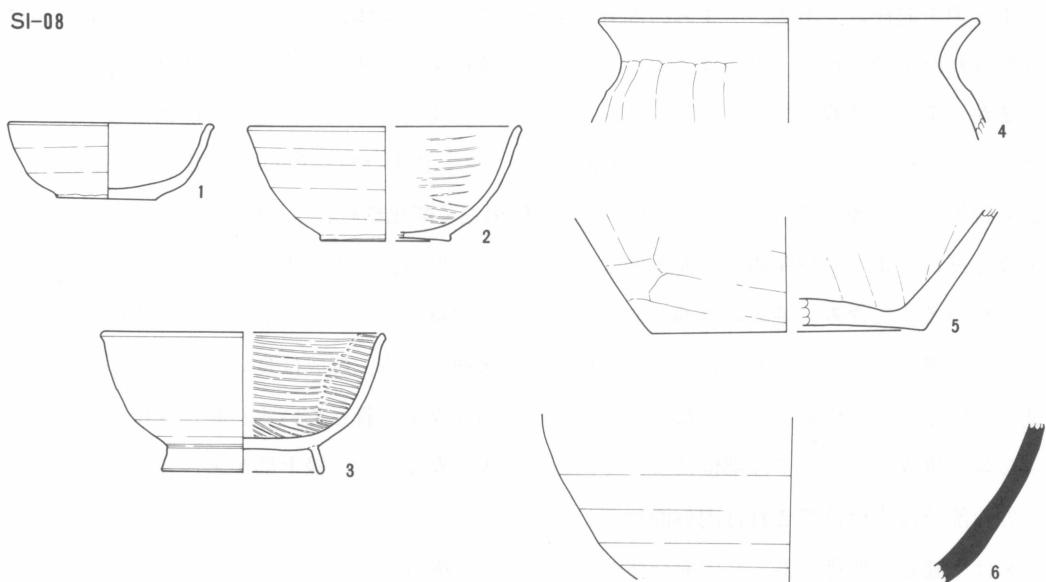
S I -10 (第59図、図版30)

1・2はロクロ使用の土師器杯である。2個体ともに外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整である。1は乳橙色で酸化鉄粒、石英粒を普通量含み、焼成は普通である。2は全体に乳橙色で内面のみやや黒い。酸化鉄粒、石英粒をやや多めに含み、焼成は普通である。

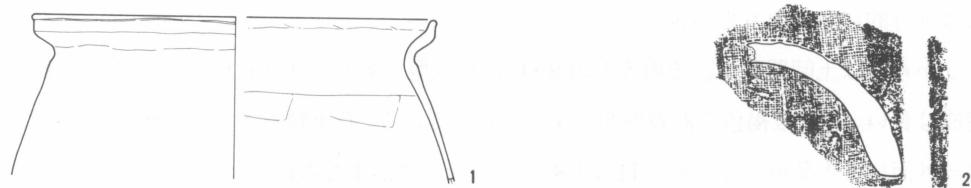
3は土師器椀である。無高台で底部外面は回転糸切り後無調整である。内面は黒色、外面は橙褐色で、器肉中央は小豆色である。石英粒等を少し含み焼成は良い。

4・5は土師器甕である。4は全体に薄手で口唇部の形状にも特徴がある。外面に縦方向のハケ目調整が施されている。内面はナデである。内面が黒褐色でそれ以外の部分は赤橙色である。石英粒をやや多めに含み、焼成は普通である。5は外面胴部はナデ調整後に下半にヘラケズリが施されている。底部外面は無調整である。内面が黒褐色で、それ以外の部分は橙褐色である。石英粒などを多く含み焼成は普通である。

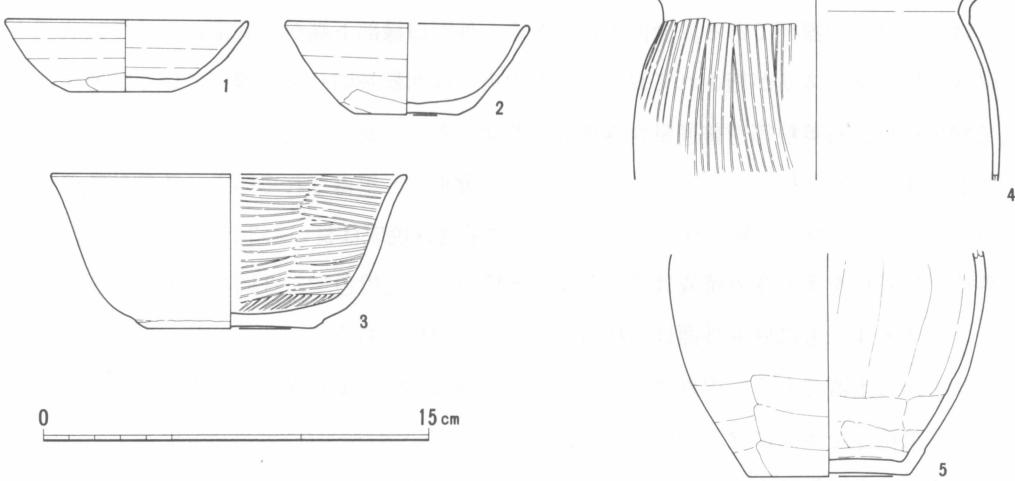
SI-08



SI-09



SI-10



第59図 SI-08～10出土土器

S I -11 (第60図、図版31)

1は須恵器杯蓋である。つまみの部分を欠失している。全体に暗灰色であるが、内面は硯に転用された可能性が高く黒っぽくなっている。石英粒をやや多めに含み、焼成は良好である。

2から7は土師器杯で、このうち7だけはロクロを使用している。底部外面はみな手持ちヘラケズリ調整である。2は底面に中と墨書されている。色調は橙褐色から乳褐色で、酸化鉄粒、石英粒等をやや多めに含み、焼成は良い。3は橙褐色で酸化鉄粒、石英粒等をやや多めに含み、焼成は良い。4はやや深めで、器表面は内外ともに赤橙色、器肉は黒色で、酸化鉄粒、石英粒等をやや多めに含み、焼成は普通である。内外面に剥離部分がある。5は褐色から橙褐色で、部分的に黒褐色である。酸化鉄粒、石英粒などを普通に含み、焼成は良いが全体にやや磨耗が進んでいる。6は橙褐色から乳褐色で、口唇部に油煙煤が付着している。酸化鉄粒、石英粒を少し含み焼成は良い。7は部位によって色調が大きく異なる。口縁上部が黒色と乳橙色、それ以外の部分は赤橙色でこれは内外面对応している。

8は土師器小型甕である。内面全体と外面口縁部は横方向のナデで、それ以外の部分は手持ちヘラケズリ調整である。暗赤橙色で、酸化鉄粒、石英粒等を多く含み焼成はやや悪い。器面には部分的に白色のものが付着している。

9から11は土師器甕で、そのうちの9・10は常総型である。9は乳橙色で石英粒を多く含み、焼成は良い。10は橙褐色で器表外面に煤が付着している。石英粒を多く含み焼成は普通である。底部外面には木葉痕が見える。11は黒褐色、暗赤橙色がまだらになっており、酸化鉄粒、石英粒をやや多めに含み焼成は普通である。

S I -12 (第60図、図版31)

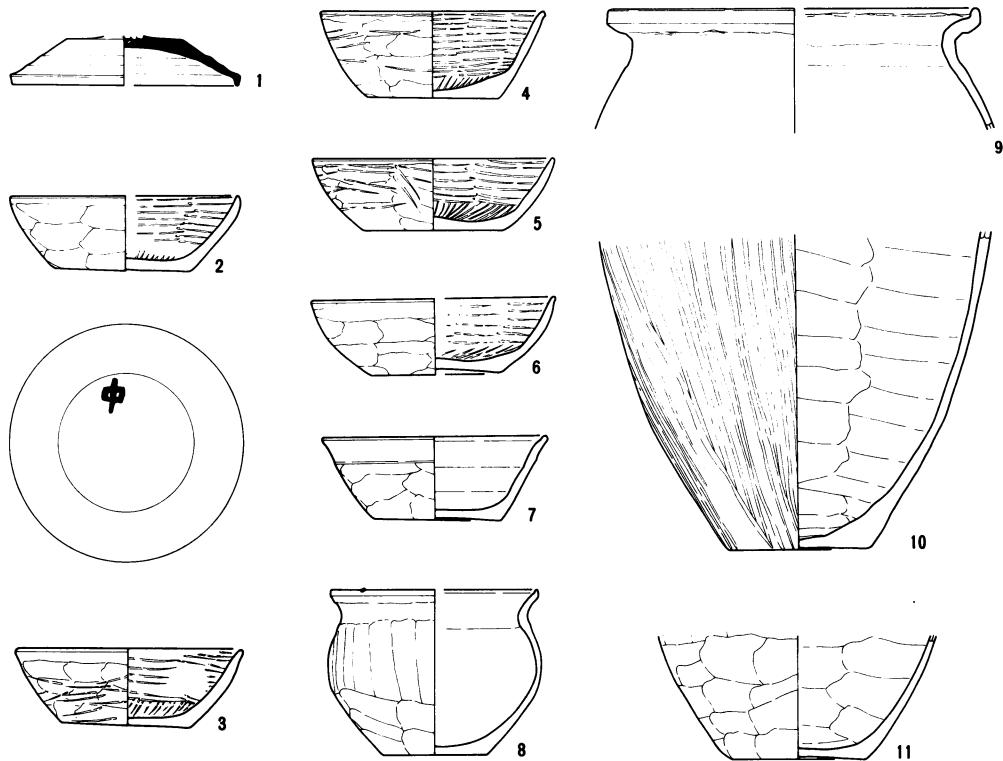
1はロクロ土師器杯である。全面赤彩である。外面口縁部下端から底部にかけては底部中心を除き回転ヘラケズリが施されており、底部中央には回転糸切り痕が残っている。器肉は乳橙色で酸化鉄粒、石英粒等を普通量含み焼成は普通である。底部外面に「〇」の墨書がある。

2から4は土師器杯である。2は外面底部に「會善」と墨書されている。色調は乳橙色で、部分的にやや白っぽい。酸化鉄粒、石英粒を普通量含み焼成は良い。3は赤橙色で、酸化鉄粒、石英粒、長石粒を多く含み焼成は良い。4は赤橙色から乳橙色で、3同様の混和物を持ち焼成は良い。3・4ともに底部外面は手持ちヘラケズリ調整である。

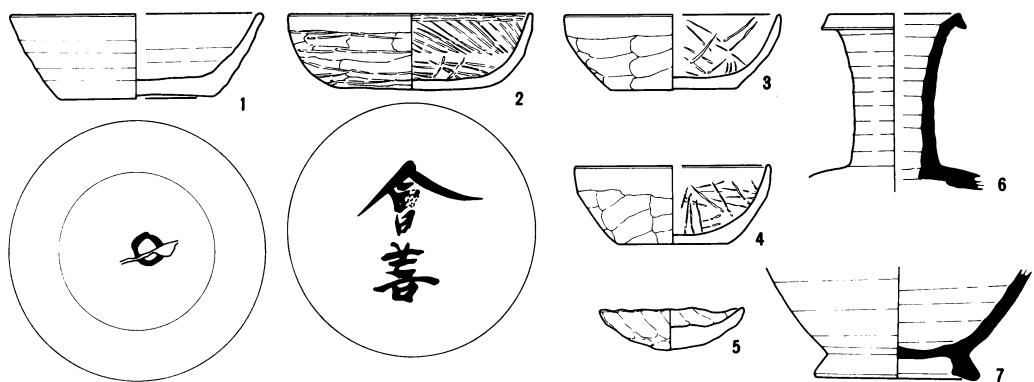
5は手捏ね土器である。内外面ユビナデで、色調は部位により異なり、赤橙色から乳橙色である。石英粒等を多量に含み焼成はやや良い。

6・7は須恵器長頸壺である。ともに灰色で、鉄分を少し含み焼成は良好である。6は口縁部の内外面と肩部外面に、7は底部内面に濃い自然釉がかかっている。7の底部外面中央部分には回転糸切り痕が残る。

SI-11



SI-12



0 15 cm

第60図 SI-11・12出土土器

S I -13 (第61図、図版31)

1は土師器杯である。内面は黒色でそれ以外の部分は暗橙褐色である。酸化鉄粒、石英粒等を少し多めに含み焼成は普通である。外面底部は手持ちヘラケズリ調整である。

S I -14 (第61図、図版31)

1は土師器杯である。乳褐色で酸化鉄粒を少し含み、全体にサラサラしている。焼成はよく、底部外面は手持ちヘラケズリ調整である。

S I -15 (第61図、図版32)

1から4は土師器杯である。4を除く3個体はロクロを使用している。1は内面黒色でそれ以外の部分は橙褐色である。底部外面は回転糸切り後無調整で、酸化鉄粒、石英粒等をやや多めに含み焼成は良い方である。2は外面口縁部下端から底部周縁部にかけて手持ちヘラケズリ調整である。外面底部中央には回転糸切り痕が残っている。器表外面が乳橙色、他の部分は赤橙色で石英粒等を少し含み、焼成は普通である。3も外面底部中央に回転糸切り痕を残し、その周辺と口縁部下端は手持ちヘラケズリ調整である。色調は黒褐色から乳褐色で、部位により大きく異なる。酸化鉄粒、石英粒をやや多めに含み焼成は普通である。4は器表外面が暗赤橙色、器肉が赤橙色で、酸化鉄粒、石英粒等を普通量含み焼成は良い。

5は土師器高台付杯である。器表内面は黒色で、それ以外の部分は乳橙色である。石英粒を多く含み焼成は良い。外面底部中央には回転糸切り痕が残っている。

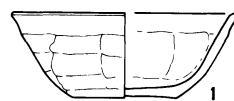
6は須恵器甕である。乳橙色で、酸化鉄粒、石英粒等を多く含み焼成は良い。ただし器表面は全体に磨耗が進んでいる。

7は土師器甕である。底部外面は磨耗がひどいが、おそらく無調整であったろうと考えられる。器表外面は黒褐色から乳褐色で、それ以外の部分は乳褐色である。石英粒を普通量含み、焼成は良い。

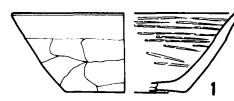
S I -16 (第61・62図、図版32)

1から6はロクロ使用の土師器杯である。1・2は内面黒色処理されており、さらに口縁部外面には正立の状態で「隆」と墨書きされている。外面底部は周囲を手持ちヘラケズリ、中心に回転糸切り痕が残っている。1は乳橙色で、酸化鉄粒、石英粒等をやや多めに含み、焼成は良い。2は器表外面が乳褐色、器肉が灰色で、酸化鉄粒、石英粒等を普通量含み、焼成は良い。3は調整が1・2と同じだが、内面は黒色処理されていない。乳橙色で酸化鉄粒、長石粒、石英粒等をやや多めに含み、焼成は普通である。4から6は口縁部外面に正立状態で「子郷」と墨書きされている。外面口縁部下端から底部周縁にかけて手持ちヘラケズリが施され、底部中央

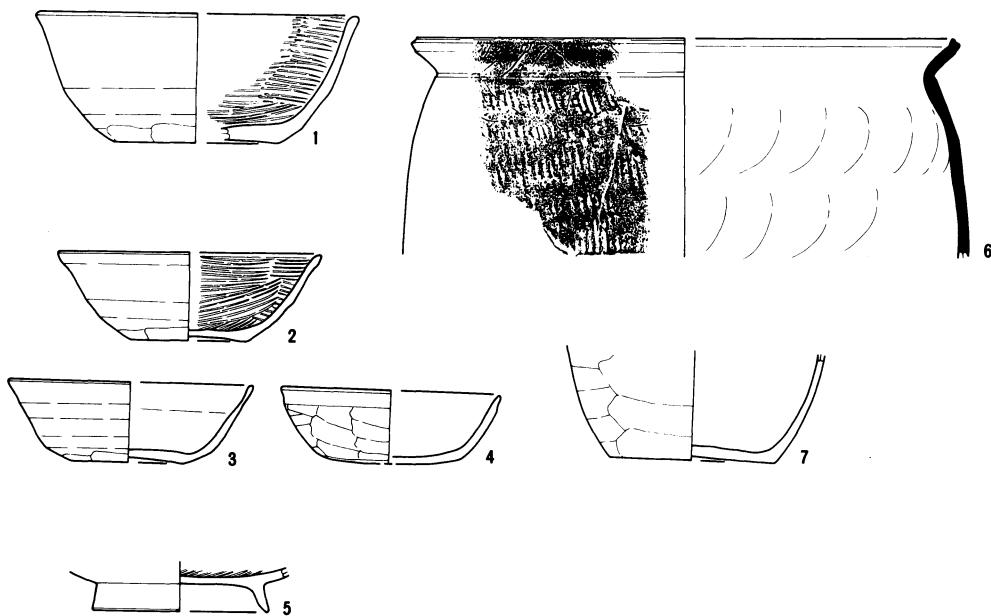
SI-13



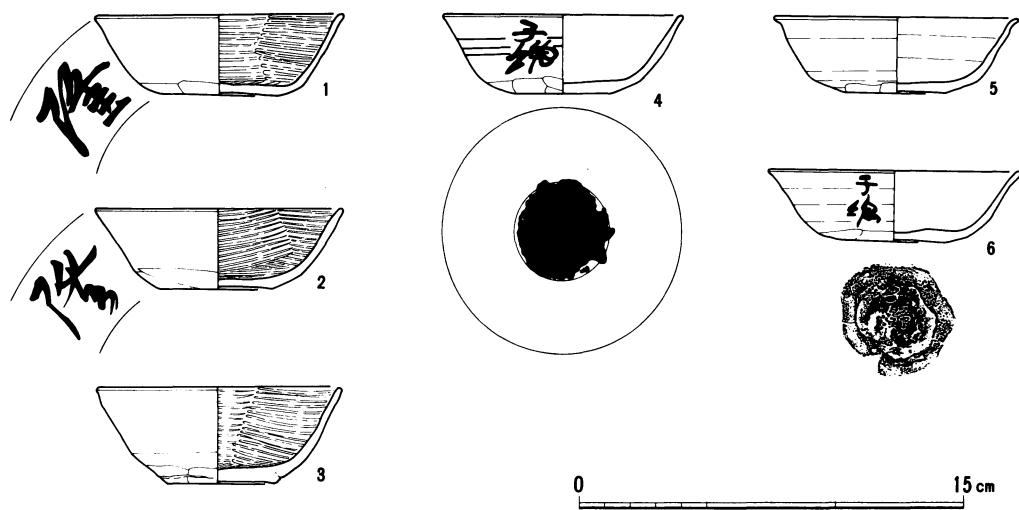
SI-14



SI-15



SI-16



第61図 SI-13~16出土土器

には回転糸切り痕が残っている。4は外面底部にも広く墨痕がある。乳橙色で、酸化鉄粒、石英粒等を普通量含み、焼成は良い。5は乳橙色から乳褐色で、酸化鉄粒、石英粒等をやや多めに含み、焼成は良い。6は乳橙色で、酸化鉄粒、長石粒、石英粒等を普通量含み、焼成は良い。

7はロクロ使用の土師器高台付杯である。底部外面は周縁が手持ちヘラケズリ、中央に回転糸切り痕が残っている。乳橙色で、酸化鉄粒、石英粒等をやや多めに含み、焼成は良い。

8は土師器小型甕である。底部内面にヘラ書きで「子郷」と記されている。底部外面には手持ちヘラケズリが施されている。器表内面は黒褐色、それ以外の部分は赤褐色で、酸化鉄粒、石英粒等を多く含み、焼成は良い。

9から11は外面口縁部に墨書が見える破片資料である。小片のため文字の判読は不能である。

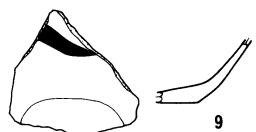
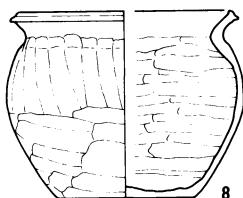
S I -17 (第62図、図版32・33)

1から8はロクロ使用の土師器杯である。1から3は内面が黒色処理されている。1は外面口縁部に正立の状態で「弥」と墨書されている。本遺跡検出の墨書資料の中では最も太字で、筆の運び具合から見て、毛先の短い太く丸めの穂先を持つ筆を使用しているものと考えられる。器肉色調は乳橙色で、酸化鉄粒、石英粒等を普通量含み焼成は良い。底部外面は回転糸切り後無調整である。2から5は外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリが施されている。2は橙褐色であるが、内面の状況からみて、本来黒色処理であったものがカマド内で被熱し、炭素がとんじたものと考えられる。外面口縁部下端から底部全面にかけては手持ちヘラケズリ調整である。酸化鉄粒、石英粒等を多めに含み焼成は良い。3もやはり破片によってはカマド内で被熱しており、部位によって色調に大きな差がある。器肉は乳橙色で、酸化鉄粒、石英粒等をやや多めに含み焼成は良い。4は内面に墨痕が見える。色調は橙褐色で、長石粒、石英粒等をやや多めに含み焼成は良い。5は外面口縁部に正立の状態で「財万」と墨書されている。色調は乳橙色で、外面のみやや赤っぽい。酸化鉄粒、石英粒等をやや多めに含み、焼成は普通である。6・7は外面底部中央に回転糸切り痕が見える。6は乳橙色から暗褐色で、酸化鉄粒、石英粒等を多めに含み焼成は普通である。7は部位によってかなり異なるが、暗褐色から赤橙色及び灰色である。酸化鉄粒、石英粒等をやや多めに含み焼成はかなり良い。8の底部外面は回転糸切り後無調整である。器表外面が暗褐色で、それ以外の部分は橙褐色、酸化鉄粒、石英粒等をやや多めに含み焼成は良い。

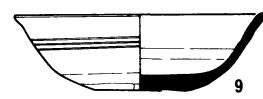
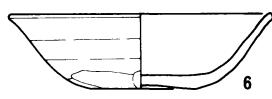
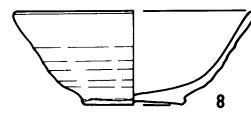
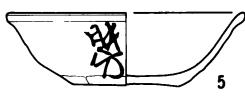
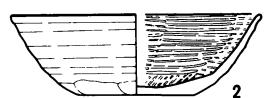
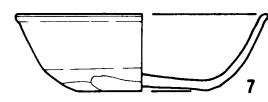
9は須恵器杯である。いわゆる「クスベ焼成」で、器表面が黒褐色で器肉は赤橙色である。酸化鉄粒、石英粒等をやや多めに含み焼成は良い。

10・11はロクロ使用の高台付杯である。10は内面黒色処理が施されている。器肉は橙褐色で、酸化鉄粒を少し、雲母粒をやや多く含む。焼成は良い。11は全面ロクロナデで、器表内外面が乳橙色から赤橙色で、器肉が黒灰色である。石英粒等を普通量含み、焼成は良い。

SI-16



SI-17



0 15 cm

第62図 SI-16・17出土土器

12は土師器小型甕である。底部外面は手持ちヘラケズリである。暗褐色から黒褐色で、酸化鉄粒、石英粒等を多めに含み焼成は良い。

13から15は須恵器である。15が甕で、他は甕である。13は全体に乳橙色で、部位により黒色、赤橙色、灰褐色である。酸化鉄粒、石英粒等を多めに含み焼成は良い。14は暗赤橙色で、石英粒等をやや多く含み焼成は良い。15は五孔式の甕である。赤橙色で、部分的に黒褐色である。酸化鉄粒、石英粒等をやや多めに含み焼成は普通である。

S I -18 (第63図、図版33)

1から3は土師器杯である。1はロクロ使用で、外面底部外面は周縁部が手持ちヘラケズリで中央には回転糸切り痕が残る。器表外面が暗褐色、内面が橙褐色で、器肉は乳橙色である。石英粒、長石粒等を普通量含み焼成は普通である。2は口唇部を除き外面全面が手持ちヘラケズリ、内面は横方向のナデ調整である。器表内外面が黒褐色、器肉が暗褐色で、酸化鉄粒、石英粒を多めに含み、焼成は良い。3はロクロ使用で内面黒色処理である。その他の部分は乳橙色で、酸化鉄粒、石英粒を少し含み、焼成は良い。

4は土師器甕である。外面口縁部から内面全面にかけて横方向のナデである。橙褐色で、酸化鉄粒、石英粒等を多く含み、焼成は良い。

5から7は土師器甕である。5は橙褐色で外面に黒斑がある。長石粒、石英粒、酸化鉄粒等を多く含み、焼成はやや良い。6は常総型と考えられる。器表内外面は暗褐色、器肉は乳褐色で石英粒、長石粒を多く含み、焼成は普通である。7はやや小型で、器表内外面が黒褐色、器肉が赤橙色で、焼成はやや良い。

(2) 土坑出土及び一括採集の土器

S K -06 (第63図、図版27)

1はロクロ使用の土師器杯と考えられる。内面黒色処理で、その他の部分の色調は橙褐色である。混和物は少なく、焼成は良い。外面には墨書が残るが、小片のため判読不能である。

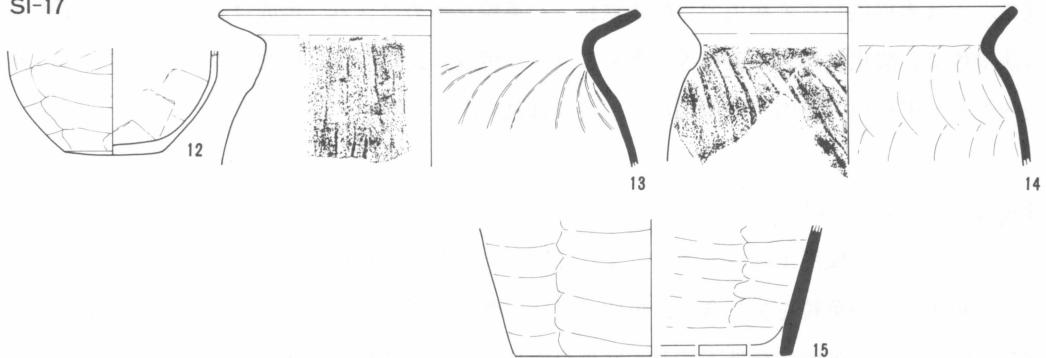
2は須恵器大甕片である。内外面ともに研磨痕があるが、鋸や墨の付着はない。色調は灰色で、鉄粒、石英粒等を少し含み、焼成は良好である。

3は土師器甕で、外面口縁部が灰褐色、胴部が橙褐色で、内面口縁部が橙褐色、胴部が黒褐色である。酸化鉄粒、石英粒等を多く含み、焼成は普通である。

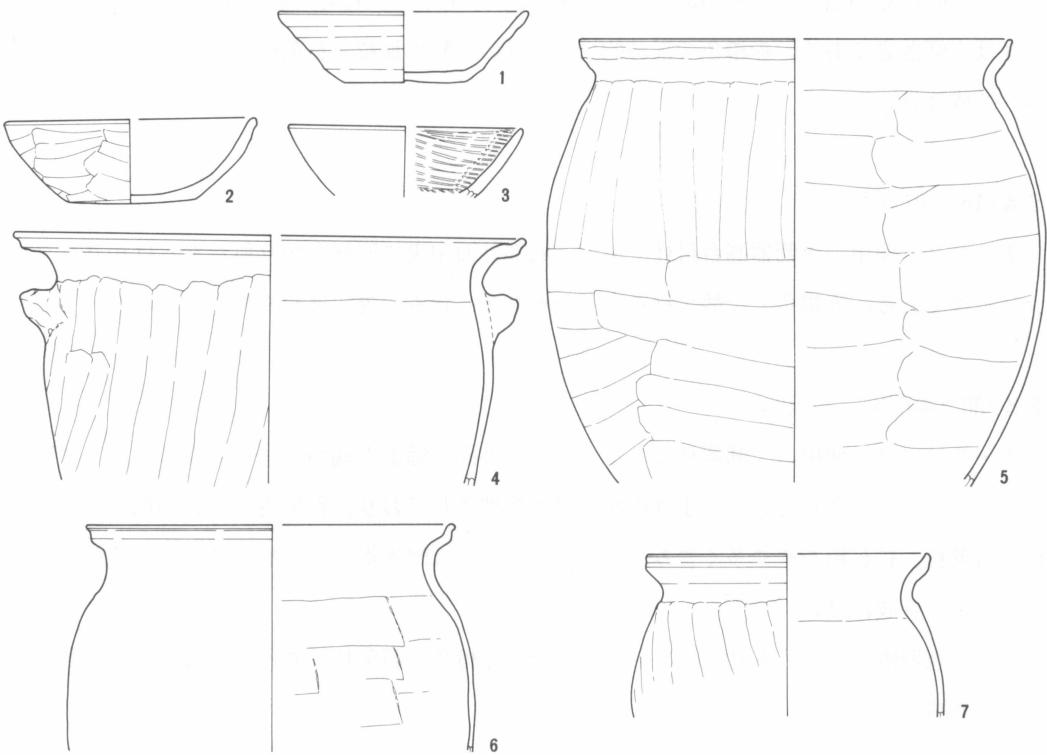
S K -13 (第64図、図版27)

1から3はロクロ使用の土師器で、1・2は杯、3は高台付杯である。1・2ともに底部外面の口縁部下端から底部周縁にかけて手持ちヘラケズリ調整で、底部中央には回転糸切り痕が

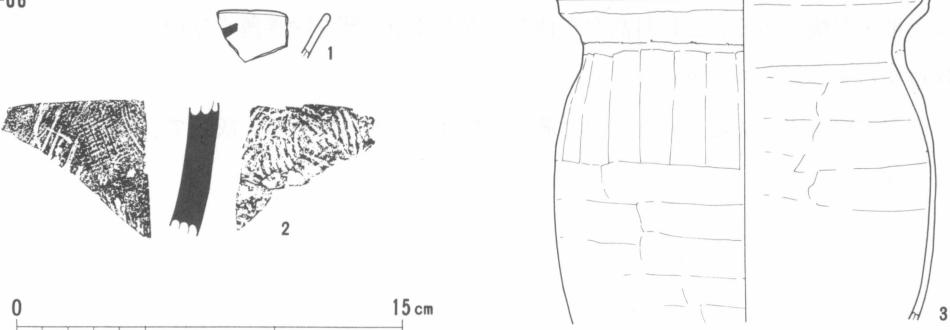
SI-17



SI-18



SK-06



第63図 SI-17・18、SK-06出土土器

残る。1は赤橙色から乳褐色で、酸化鉄粒、石英粒を多めに含み、焼成は良い。2は暗褐色から淡橙色で、酸化鉄粒、石英粒等を多めに含み、焼成は良い。3は全面ロクロナデ調整で、器表内外面が黒褐色、器肉が暗赤褐色で、焼成は良い。

S K -15 (第64図、図版28)

1・2はロクロ使用土師器である。1は杯であろうと考えられるが小片のため断定はできない。乳褐色で、石英粒を少し含み、焼成は良い。外面に墨書が見えるが判読不能である。2は回転糸切り後に、外面口縁部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリを施している。乳橙色で部分的に赤褐色のところがあり、酸化鉄粒、長石粒、石英粒等を普通量含み、焼成は良い。

3は土師器甕である。赤橙色で部分的に黒っぽい。酸化鉄粒、石英粒、長石粒等を普通量含み、焼成は良い。

S K -16 (第64図)

1はロクロ使用の土師器高台付杯である。底部外面中央に回転糸切り痕があるほかはロクロナデ調整である。乳褐色で、酸化鉄粒、石英粒を多く含み、焼成はやや良い。

S K -30 (第64図、図版28)

1・2はロクロ使用の土師器杯である。ともに外面口縁部下端から底部全面にかけては手持ちヘラケズリが施されている。1は内面を黒色処理されており、乳橙色から乳褐色で、酸化鉄粒、石英粒、長石粒をやや多く含み、焼成は良い。2は暗赤褐色で、酸化鉄粒、石英粒等を多めに含み、焼成は良い。

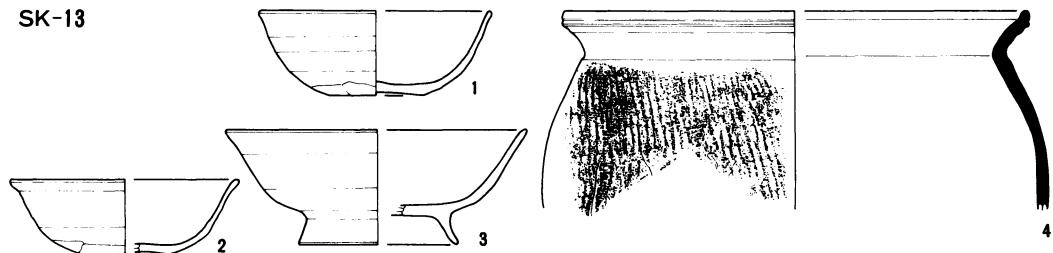
3は須恵器甕である。五孔式のもので、色調は赤橙色、石英粒、酸化鉄粒などを多く含み、焼成はやや良い。

一括採集の土器 (第64図)

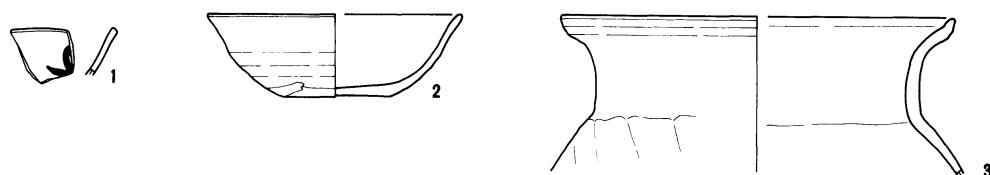
1は灰釉陶器碗である。三日月高台を持ち、内面は中央部を除き薄く施釉されている。石英粒、鉄粒をわずかに含み、焼成は良好である。

2は須恵器短頸壺である。底部内面に薄く自然釉がかかっている。灰色で、鉄粒を少し含み焼成は良好である。

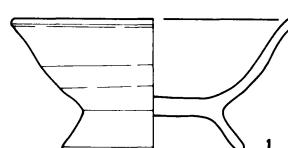
SK-13



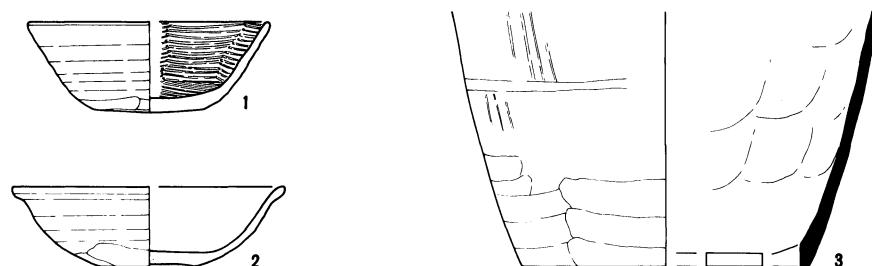
SK-15



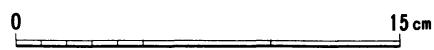
SK-16



SK-30



一括採集の土器



第64図 SK-13・15・16・30一括採集出土土器

(3) 鉄製品・石製品・土製品

鉄製品（第65図、図版33）

1は鎌である。着装部分の下部及び中央部を欠失している。2は不明品である。刃部はなく、形態から見て刀子の茎等の可能性があるが、小片のため断定できない。3は刀子の切先付近の資料である。4も刀子である。刃の先端から茎の途中までが遺存している。5は性格不明である。半円形の扁平部分に棒状のものが接続しているが、本来から現状のように折れ曲がった状態であったのか、それとも直交に接続していたものなのか不明である。6は鋤先金具である。7は紡輪である。棒状部分はわずかに残っているだけである。

石製品（第65図、図版33）

1は砂岩製の砥石である。2は滑石製の紡錘車である。

土製品（第65図、図版33）

1・2は紡錘車である。3は黒褐色の土玉である。小振りであるので漁撈用のものかどうかはわからない。

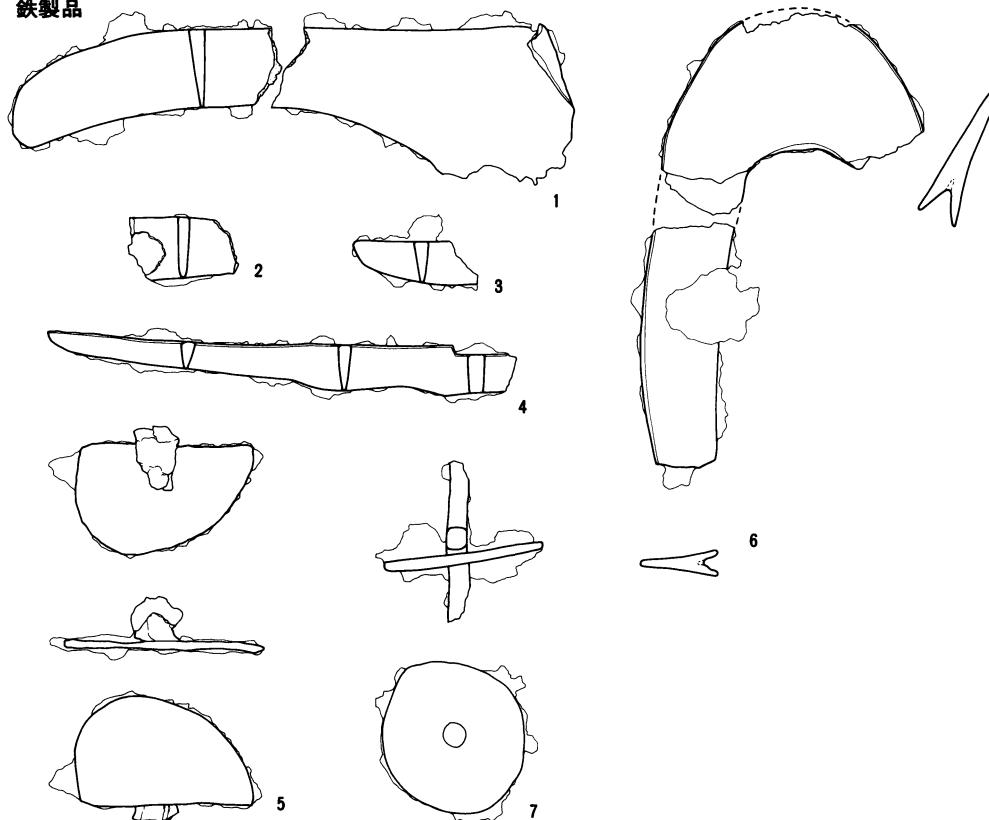
第4節 小 結

18軒の堅穴住居、1棟の掘立柱建物(そのほかに並びの不明な柱穴様掘込み群3群)、それに土坑群が、本遺跡で検出された奈良・平安時代の遺構である。8世紀半ばから10世紀にかけてのものである。古墳時代のものは全くない。遺構の中で特に注意をひくのは、SK-13・14・15・30の土器と焼土を覆土中に多く混入する盤状の土坑群である。狭い範囲に集中している上に、出土遺物から考えられる時期も10世紀前半ではぼ揃っているようである。遺構説明においても述べたように、床面や壁面に被熱痕のないことから芥塵を処理した穴として最終的に使用されたようであるが、本来的には別の機能を果たしていたものと考えられる。製鉄等の生産遺跡にしばしば見られる形態の土坑であり、本遺跡の性格を左右するものである可能性もある。

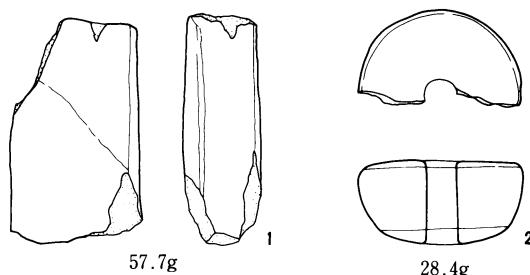
遺物の中では墨書土器が目をひく。SI-12出土の「會善」は本遺跡中最も古い墨書土器であり、その意味するところは不明ではあるが興味深い。また、SI-16では「隆」、「子郷」の文字資料があるが、このうち「子郷」はヘラ書きと墨書の双方が恐らく同一人の手になるものである。「子郷」という言葉の意味とともに注目すべきであろう。

細い路線幅の調査であるために遺跡の全容を想定することは無理であるが、周辺への遺構の広がりを想定するには十分な成果であった。

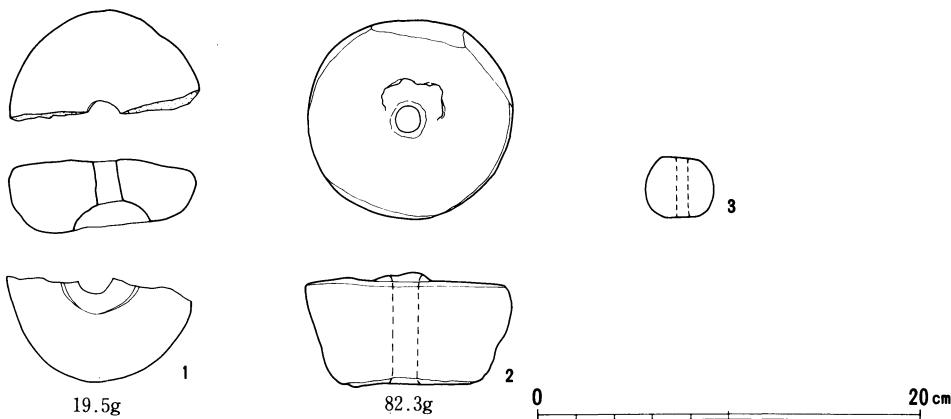
鉄製品



石製品



土製品



第65図 鉄製品・石製品・土製品

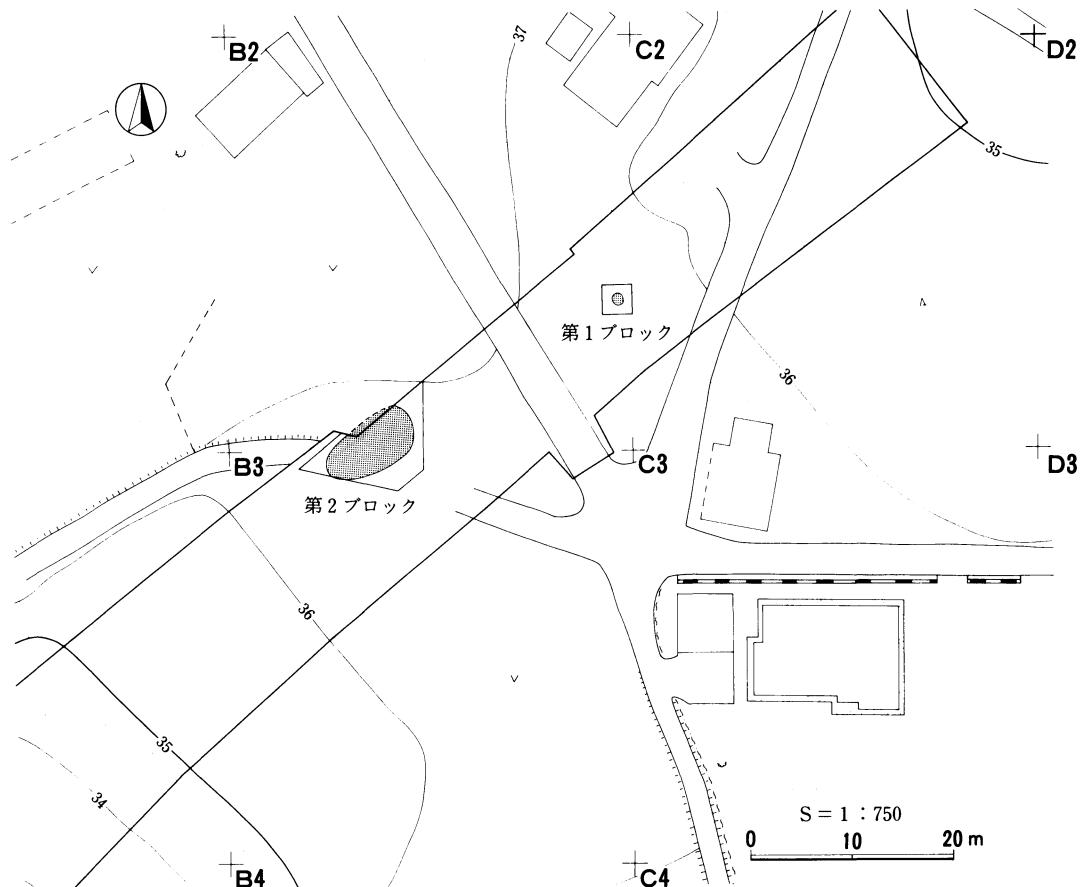


第66図 青山宮跡遺跡調査区

第III章 青山宮脇遺跡の調査

第1節 調査の経過

調査区は南西側と北東側から谷頭が入り込み、くびれて尾根状となっている箇所である。北側には奈良・平安期の集落が検出された青山富ノ木遺跡が接している。調査は平成2年の第1次と平成4年に第2次の2回に分けて行った。上層は第1次で確認調査を実施し、遺物が少量出土したものの、遺構が検出されなかったため、本調査は実施しなかった。引き続き行った下層の確認調査では、2か所の旧石器時代ブロックが検出された。東側の1か所(第1ブロック)は確認調査範囲内で収まったが、町道際の1か所(第2ブロック)については本調査を実施した。その結果、南半部が町道部分の下に入り込むことが判明し、工程上町道下の部分は同時に調査できないため、次年度以降に工事の進行に合わせて調査することとし、結局残ったブロック南半部の調査は平成4年に実施した。



第67図 ブロック分布図

第2節 旧石器時代

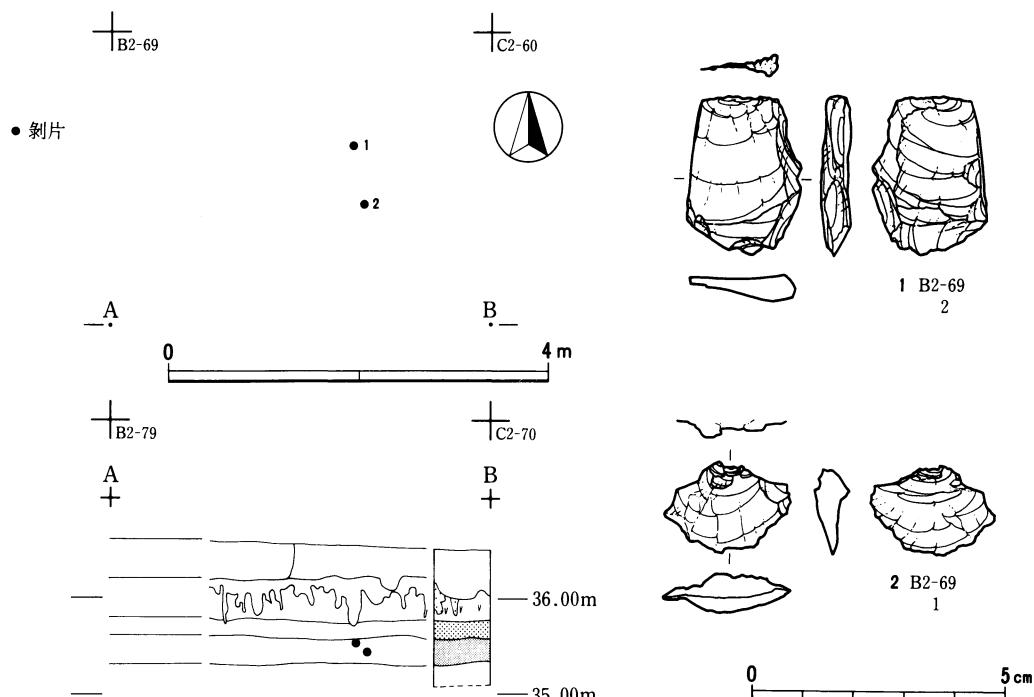
1. 概 要

旧石器時代の遺物は確認調査段階で2か所で検出された。本調査で1か所については確認時以上の広がりはみられず、小規模なブロックに収束したが、もう一方については遺物が集中して検出され規模の大きなブロックとなっている。これらの2か所のブロックは、北東方向、南西方向の二方向からの谷によって開析される二つの台地の結節部に形成される青山宮脇遺跡の中央部と南西方向の谷の谷頭部分に分布していた。調査の結果、IX層上部に産出層準があるブロックが1か所、VI層下部に産出層準があるブロックが1か所検出された。これらのブロックは出土層準から検討して2つの文化層を設定して報告する。第I文化層はIX層上部に産出層準をもつ文化層で第1ブロックが帰属する。第II文化層はVI層下部に産出層準をもつ文化層で第2ブロックが帰属する。文化層の特徴としては、第I文化層には特徴的な器種が存在せず明確ではないが、第II文化層では中形石刃と石刃素材のナイフ形石器が併出する良好な資料が得られている。

2. 第I文化層

(1) 第1ブロック

分布状況（第69図、図版35）



第68図 第1ブロック石器分布図

第69図 第1ブロック出土石器

調査区の中央部に位置している。地形では北東から南西に入り込む二つの谷に挟まれた頂部のちょうど分水嶺をなす部分に当たり、現地形ではほぼ平坦な面に位置している。B 2-69区に分布しており、分布範囲は南北0.6m、東西0.2mを測る。遺物総数は2点のみの出土であり南北に並んだようにせまい範囲に分布する。垂直分布ではおよそ0.2mの高低差があり、土層断面への投影ではIX層中部から上位にかけて分布し、ほぼIX層上部に垂直分布の集中が認められる。土層堆積状況は比較的安定しており、遺物の産出層準はIX層上部に帰属すると考えられる。

母岩分布

2母岩が認められる。母岩は安山岩とチャートのそれぞれ単独母岩である。

出土遺物（第70図、第8表、図版36）

出土総点数は2点で、器種は剝片である。1は安山岩を石材とする線状打面の縦長剝片であり、側面は左側面が自然面で右側面が切断状の先行する剝離面となっている。両極技法を示す剝離痕がなく剝片としたが、器体は裁断状に剝がされており、あるいは両極技法による可能性がある。2はチャートを石材とする線状打面の横長剝片である。

第8表 第1ブロック出土石器計測表

No.	遺物番号	器種	最大長×最大幅×最大厚 (mm)	重量 (g)	図版 番号	打面 形状	打面 調整	頭部 調整	背面構成				打角 (°)	調整 部位	母岩
									C	I	II	III	IV		
1	B2-69-1	剝片	16.8×24.6×6.8	1.50	2	線 線	—			1					チャート1
2	2	剝片	29.8×22.0×5.5	4.00	1	線 線	—			2					安山岩1

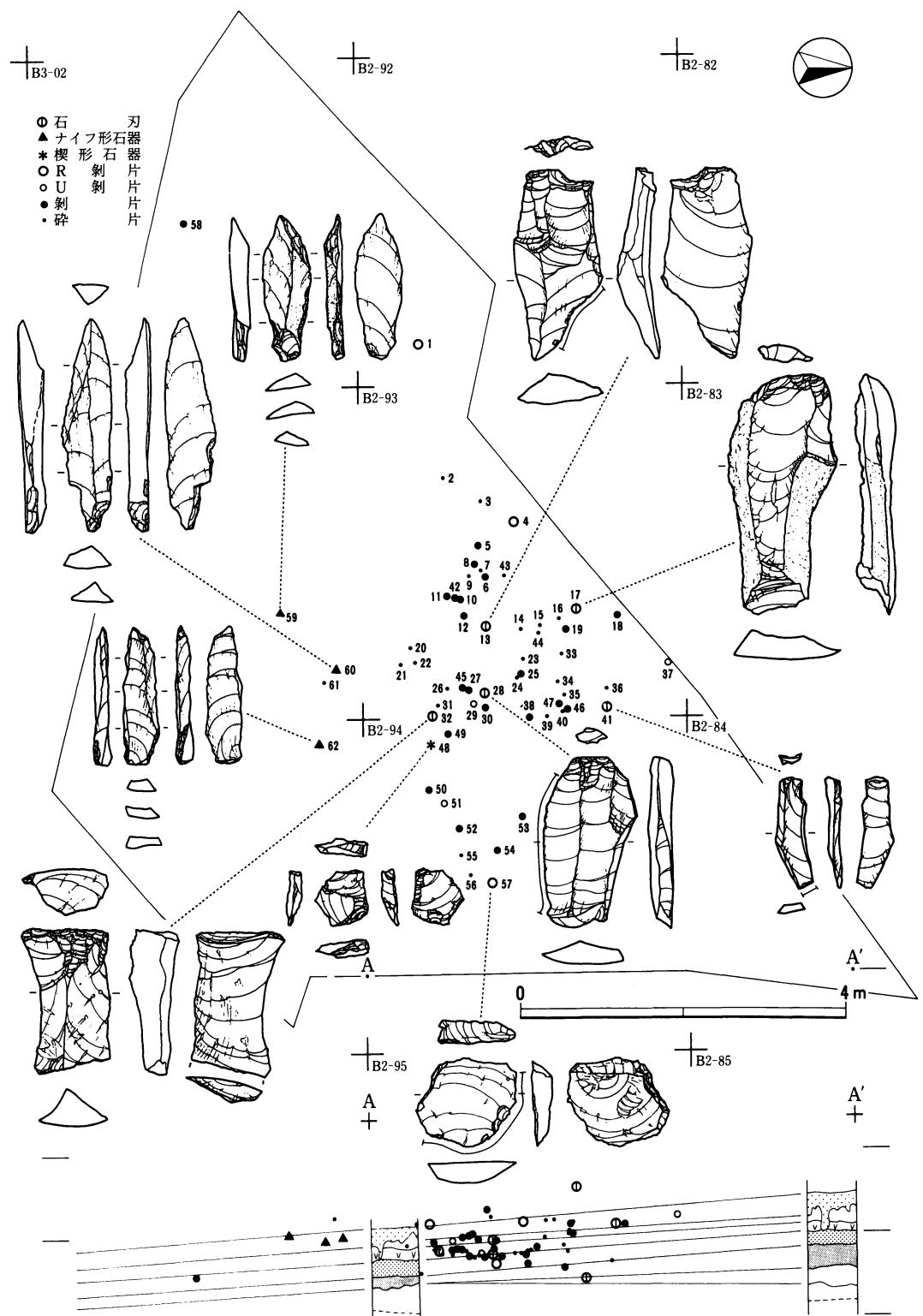
3. 第II文化層

(1) 第2ブロック（第70～73図、第9表、図版37）

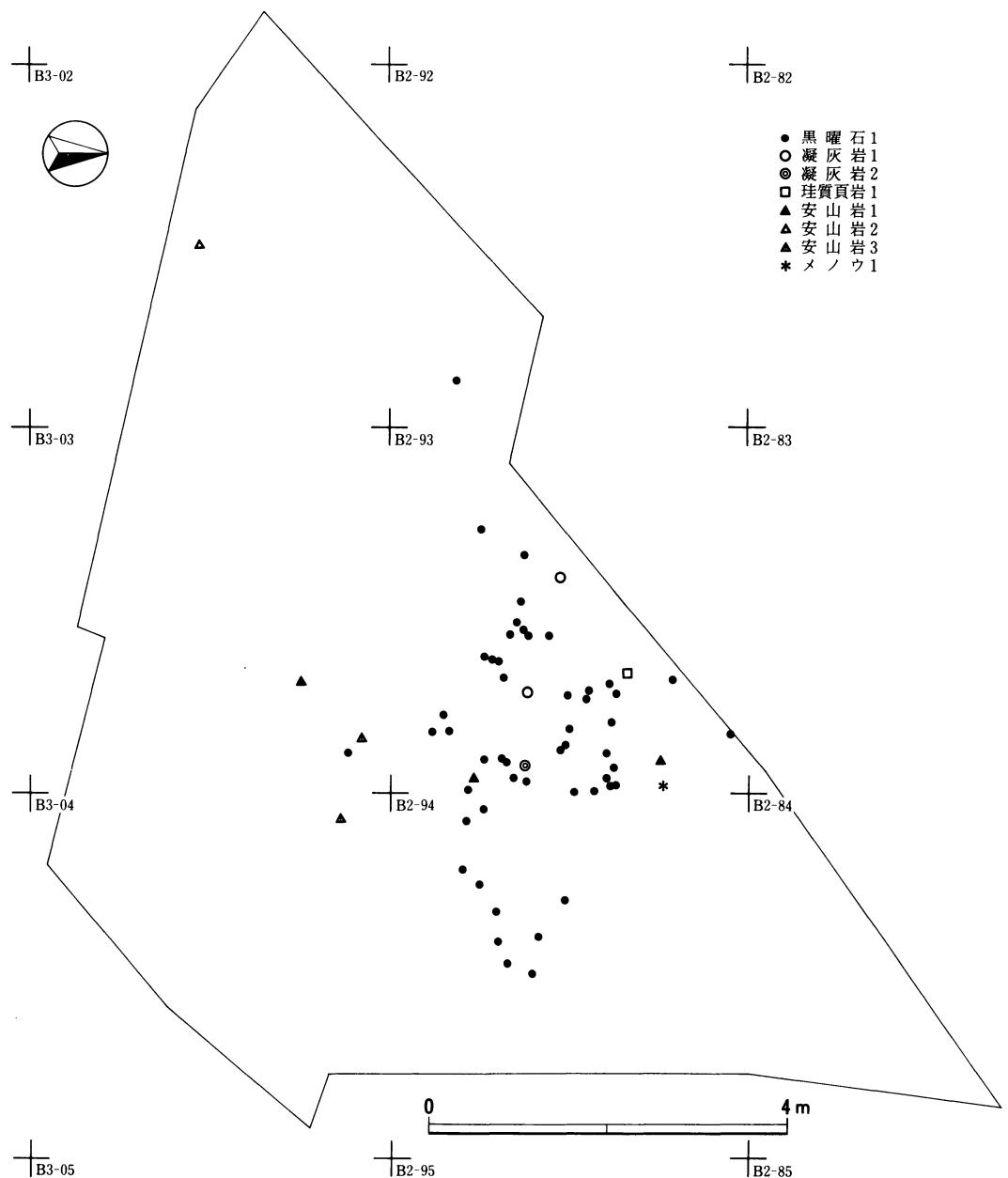
分布状況（第71図、図版35）

調査区の中央部南東側に位置している。地形では南西から入り込む谷の谷頭部分に当たり、現地形では谷に向かって緩やかに傾斜している。B 2-92・93・94区、B 3-02・03・04区に分布しており、分布範囲は南北5.9m、東西8.1mを測る。遺物の分布範囲は調査区の北東方向調査区域外にも広がると考えられるが、ほぼ集中部は完掘しており分布の概要は把握できる。B 2-93・94区に遺物の密集した部分があり、そこから西方向にまばらに遺物が散在している状況である。垂直分布ではおよそ1.1mの高低差があり、土層断面への投影ではIX層下面からII層下部にかけて分布し遺物の垂直分布幅が大きいが、ほぼVII層とVI層の境界付近に垂直分布の集中が認められる。土層堆積状況は安定しておらず、南西方向からの谷に向かって傾斜しており、遺物分布の西側付近ではX層からIX層下部がとりこまれるように粘性化して、いわゆる「水つきローム」化している。遺物の産出層準は垂直分布幅が広く判断が難しいが、VII層上面からVI層下部に帰属すると考えておく。

母岩分布（第72図）



第70図 第2ブロック器種別分布図



第71図 第2ブロック母岩別分布図

8母岩が認められる。黒曜石1の母岩が大部分を占め、他の珪質頁岩、凝灰岩、安山岩等の母岩は単独母岩あるいはごく少数で構成される母岩である。黒曜石1の母岩は碎片、剝片を主体に構成されており、分布の密集部分を形成している。安山岩3は3点すべてがナイフ形石器であり、密集部分の西側に比較的近接して出土していることが特徴的である。母岩と器種の関

係を見てみると、珪質頁岩1、珪質凝灰岩1のように黒曜石以外の母岩は中形の石刃の素材となつており、ブロック内での製作の痕跡が見られず搬入されたような状況である。一方黒曜石1の母岩では、中形の石刃、楔形石器がそれぞれ1点ずつ存在するが、小剝片、碎片が数多く存在するのに比して製品が少なく、また石核も存在せず、それらはブロック外に持ち出されたような状況を示している。

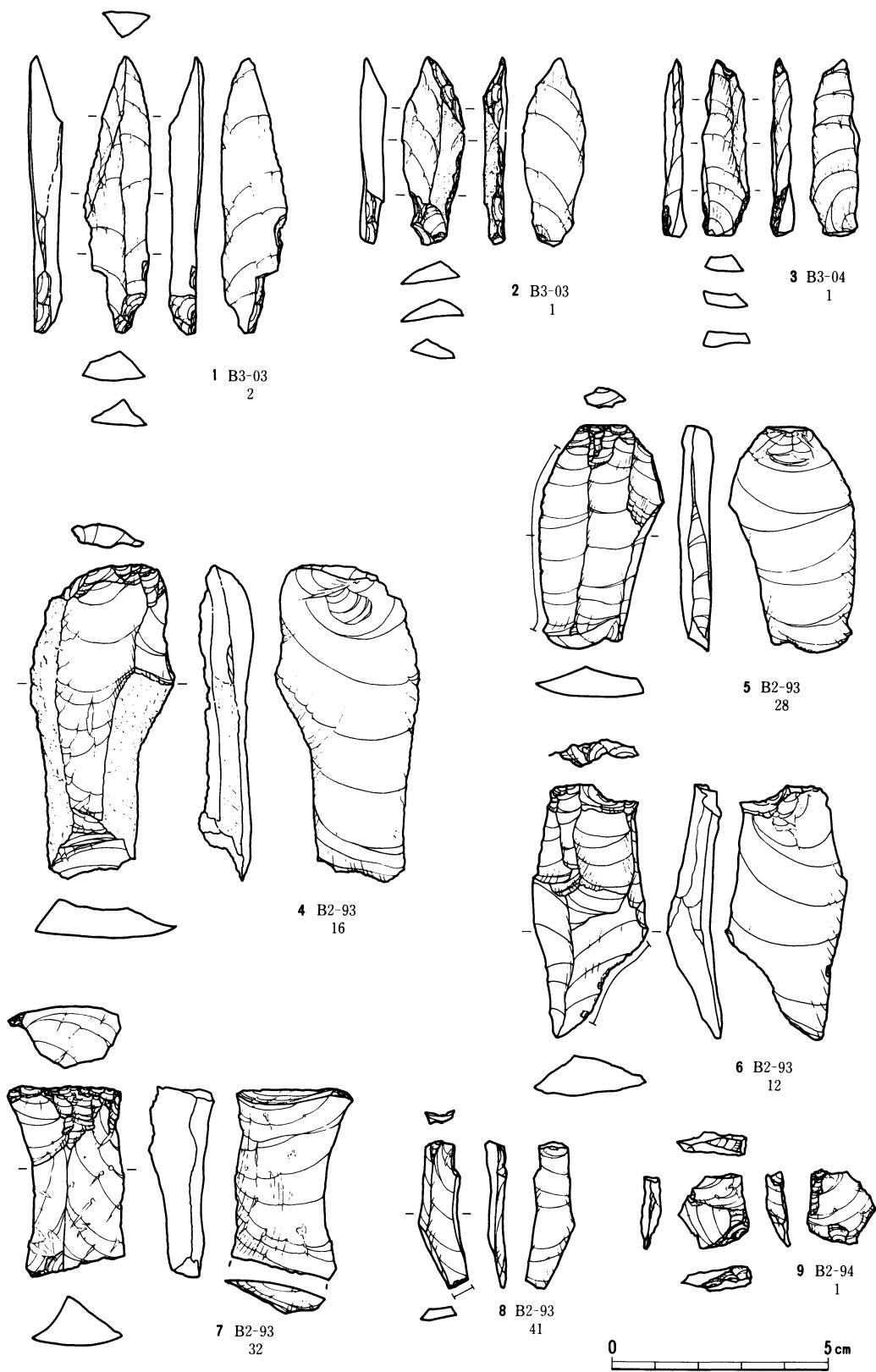
出土遺物（第72・73図、第9表、図版36・37図）

出土総点数は62点で、器種構成はナイフ形石器3点、石刃5点、楔形石器1点、二次加工を有する剝片3点、使用痕を有する剝片3点、剝片22点、碎片25点で構成される。

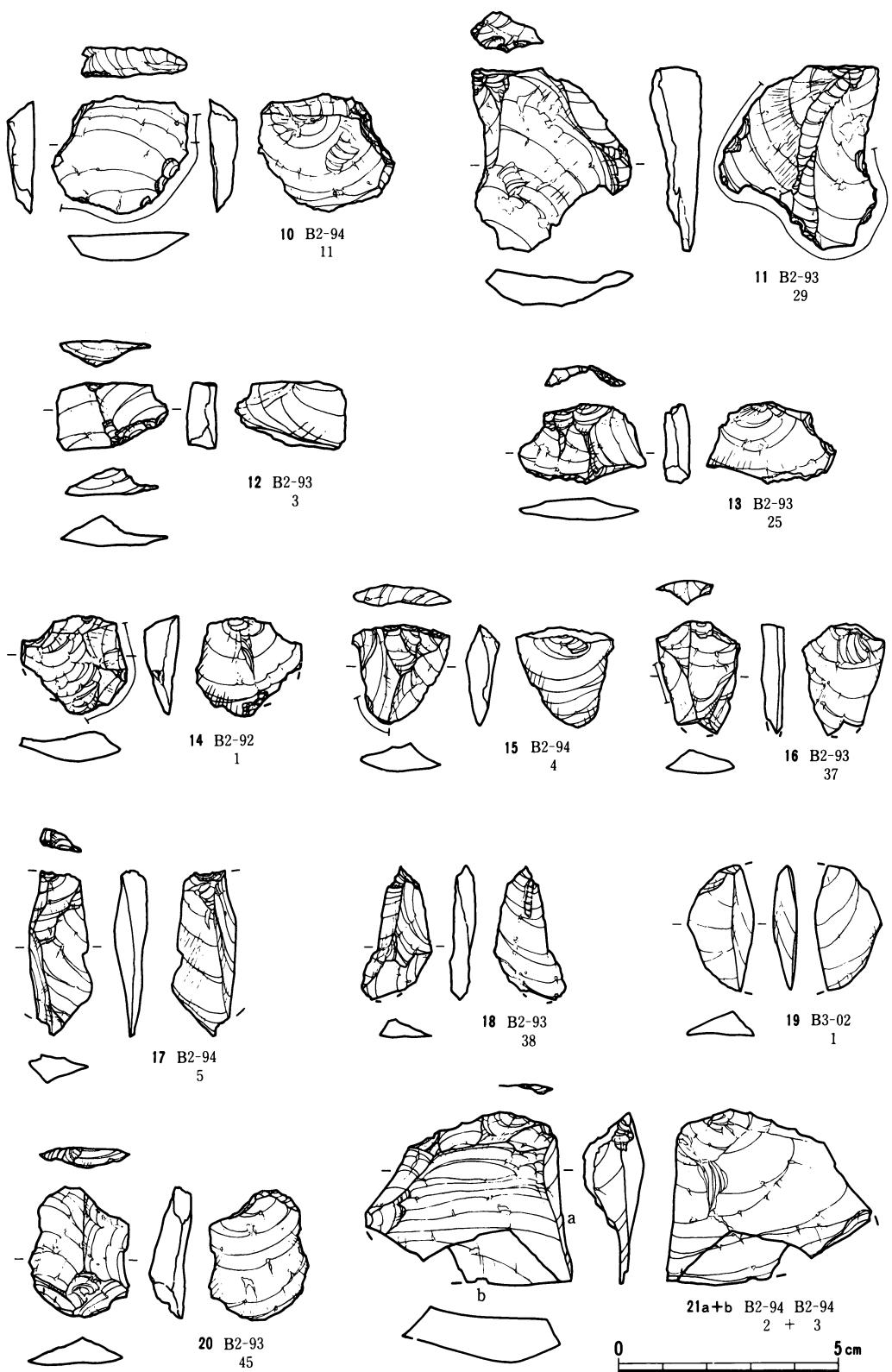
1～3はナイフ形石器である。これらは同一母岩の安山岩3を石材としている。1は先細りで長い石刃を素材として、基部右側縁には主要剝離面からのプランディング状の調整加工が見られるが、基部左側縁には主要剝離面、背面の両面からの器体を切断する調整加工が看取される。2は自然面を残す石刃を素材として、調整加工は左側縁では主要剝離面より器体の基部側のみに調整が施されるが、左側縁には器体の下半部及び先端部に調整が施されて調整が連続し、2側縁加工となるが、素材の打面部は一部残置する。3は直線的な両側縁をもつ石刃を素材として、基部側両側縁と先端部右側縁に細かな調整が加えられるが、素材の打面部は広く残置している。これらの3点のナイフ形石器はいずれも素材の打面部を器体の基部に設定するという技術的共通性が認められる。

4～8は石刃である。最大長の長さを基準にして10cm以上を大形石刃、5cm以上10cm未満を中形石刃、5cm未満を小形石刃と分類すると、8以外の4点は中形石刃に8は小形石刃に分類される。4は平坦打面で自然面を両側縁に広く残し、背面には主要剝離方向からと反対方向からの剝離面がみられる。5は平坦打面で円みをもつ背面左側縁に刃こぼれ状の微細剝離痕が認められる。6は剝離面打面のもので先細りする先端部に微細剝離痕が観察される。7は石刃としたが、厚味のある石刃の打面部を切断した後、その切断面からの調整加工が顕著に行われており、あるいは石核のプランクとも考えられるものである。8は瑪瑙を石材とする平坦打面のもので下端部に微細剝離痕が看取される。いずれの石刃も頭部調整が認められ、特に4・5は頭部調整が顕著である。母岩分布でも記したがこれらの石刃は、黒曜石の石材が主体を占める本ブロックにあって、7の石刃のほかは黒曜石以外の石材にその素材を求めており、石刃という器種における石材選択の傾向が強いと考えられる。

9は楔形石器とした。裏面に上端方向からの細長い剝離痕と下端部に潰れがみられ、両極技法によるものと考えられる。10・12・14は二次加工を有する剝片である。10は左側縁から末端部にかけて微細剝離痕とまばらに細部加工がみられる。12は切断面から連続した細部加工が顕著である。14は右側縁に刃こぼれ状の微細剝離痕と細部加工が認められる。11・15・16は使用痕を有する剝片である。11は刃こぼれ状の微細剝離痕が側縁を巡っている。15・16はやや縦長



第72図 第2ブロック出土石器(1)



第73図 第2ブロック出土石器(2)

第9表 第2ブロック出土石器計測表

No.	遺物番号	器種	最大長×最大幅×最大厚 (mm)	重量 (g)	図版 番号	打面 形状	打面 調整	頭部 調整	背面構成				打角 (°)	調整 部位	母岩	
									C	I	II	III	IV			
1	B2-92-1	R剥片	21.0×23.6×7.3	2.70	14	平			1	2	1		67	T	黒曜石1	
2	B2-93-1	碎片	12.2×8.3×2.9	0.30											黒曜石1	
3	2	碎片	10.6×13.0×1.6	0.20											黒曜石1	
4	3	R剥片	14.3×24.6×6.6	2.20	12	一			1	1				T	凝灰岩1	
5	4	剥片	18.0×13.7×3.4	0.70		平		T	6	1			127		黒曜石1	
6	5	剥片	14.5×14.3×2.8	0.40		点	—		2						黒曜石1	
7	6	碎片	7.0×9.2×4.2	0.30											黒曜石1	
8	7	剥片	20.3×7.0×4.8	0.60		—			2						黒曜石1	
9	8	碎片	7.6×5.3×0.7	0.02											黒曜石1	
10	9	剥片	15.2×12.8×3.8	0.50		—			1	1	2				黒曜石1	
11	10	剥片	17.1×8.0×5.0	0.30		—			1	1					黒曜石1	
12	11	剥片	27.2×8.6×4.5	0.60		—			2	1					黒曜石1	
13	12	石刃	56.5×26.7×11.5	10.80	6	複3		T	7	2			107	R T	凝灰岩1	
14	13	碎片	12.2×9.3×3.3	0.20											黒曜石1	
15	14	碎片	4.9×4.5×2.3	0.05											黒曜石1	
16	15	碎片	8.6×7.0×3.9	0.10											黒曜石1	
17	16	石刃	70.8×33.3×12.2	23.50	4	平		T	○	2	1		126	R M	珪質頁岩1	
18	17	剥片	9.8×17.7×4.7	0.60		平		T	2						黒曜石1	
19	18	剥片	17.1×8.0×2.3	0.20		—	—	—	2						黒曜石1	
20	19	碎片	9.3×4.3×1.5	0.04											黒曜石1	
21	20	碎片	7.2×10.5×1.7	0.10											黒曜石1	
22	21	碎片	13.6×13.0×4.6	0.50											黒曜石1	
23	22	碎片	10.0×6.4×1.0	0.07											黒曜石1	
24	23	碎片	7.1×9.4×1.9	0.10											黒曜石1	
25	24	剥片	17.4×28.1×5.8	2.90	13	2	D	T	1	1			129		黒曜石1	
26	25	碎片	10.6×7.0×1.4	0.10											黒曜石1	
27	26	剥片	16.2×17.7×2.7	0.70		—			2	1					黒曜石1	
28	27	石刃	50.0×28.8×7.7	10.00	5	平		T	4	1			114	L	凝灰岩2	
29	28	U剥片	41.0×36.0×11.5	10.00	11	平	D	T	2	1			116	R~T	黒曜石1	
30	29	剥片	17.6×11.6×1.9	0.30		平			2	1					黒曜石1	
31	30	碎片	9.7×3.0×1.3	0.10											安山岩1	
32	31	石刃	42.5×27.2×14.8	12.30	7	平		T	2	1				R, T	黒曜石1	
33	32	碎片	8.8×5.4×0.7	0.04											黒曜石1	
34	33	碎片	10.2×6.2×1.6	0.10											黒曜石1	
35	34	碎片	5.0×9.6×3.2	0.10											黒曜石1	
36	35	碎片	9.1×2.6×0.9	0.04											安山岩1	
37	36	U剥片	24.6×18.2×5.0	1.91	16	多	D	T	4	1			103	L M	黒曜石1	
38	37	剥片	29.7×16.0×5.7	1.40	18										黒曜石1	
39	38	碎片	12.4×5.8×4.4	0.20											黒曜石1	
40	39	碎片	8.6×8.0×0.7	0.03		8	平								黒曜石1	
41	40	石刃	32.8×11.5×4.2	1.30	8	平			2	1			131	T	メノウ1	
42	41	剥片	18.2×18.6×7.7	1.90		—			1						黒曜石1	
43	42	碎片	14.0×14.7×3.8	0.70											黒曜石1	
44	43	碎片	10.6×6.5×1.0	0.07											黒曜石1	
45	44	剥片	28.9×22.5×5.9	3.60	20	—				1	3	1			黒曜石1	
46	45	剥片	17.9×17.3×4.0	0.90		平		D	T	1					黒曜石1	
47	46	剥片	13.8×12.6×6.7	0.70		—									黒曜石1	
48	B2-94-1	楔形石器	16.0×15.7×5.1	1.00	9										黒曜石1	
49	2	剥片	38.1×47.4×12.9	15.70	21a	1				2	1			80		黒曜石1
50	3	剥片			21b					2					黒曜石1	
51	4	U剥片	21.8×21.8×6.8	2.50	15	2		T	3	2			118	L T	黒曜石1	
52	5	剥片	36.2×13.5×7.1	2.30	17	2	D		3	1			120		黒曜石1	
53	7	剥片	15.2×18.0×3.6	0.70		—			1	1					黒曜石1	
54	8	剥片	28.0×14.7×4.5	1.20		平			1	1					黒曜石1	
55	9	碎片	7.1×11.5×1.3	0.10											黒曜石1	
56	10	碎片	12.2×10.9×4.2	0.50											黒曜石1	
57	11	R剥片	26.1×30.8×6.0	5.00	10	平			1				132	R~T	黒曜石1	
58	B3-02-1	剥片	27.7×14.6×4.9	1.70	19	—			2						安山岩2	
59	B3-03-1	ナイフ形石器	43.0×14.3×5.0	3.20	2	平		○	1	1			112		安山岩3	
60	2	ナイフ形石器	62.9×15.1×7.4	6.70	1	—			3						安山岩3	
61	3	碎片	13.4×11.8×4.9	0.50											黒曜石1	
62	B3-04-1	ナイフ形石器	40.0×10.0×4.7	2.20	3	平			2				120		安山岩3	

のもので、15は左側縁末端部に、16は左側縁中間部に微細剝離痕が連続する。13・17~21は剝片である。17~19は縦長剝片の細身のものであり、側縁及び末端部が欠損している。20は縦長剝片のやや幅広のもので、打面部が切断されている。13・20は横長剝片で、13は小形で打面が幅広のものである。21は大形で厚味のある横長剝片で、下端部が欠損している。

第3節 縄文時代以降

1 土器

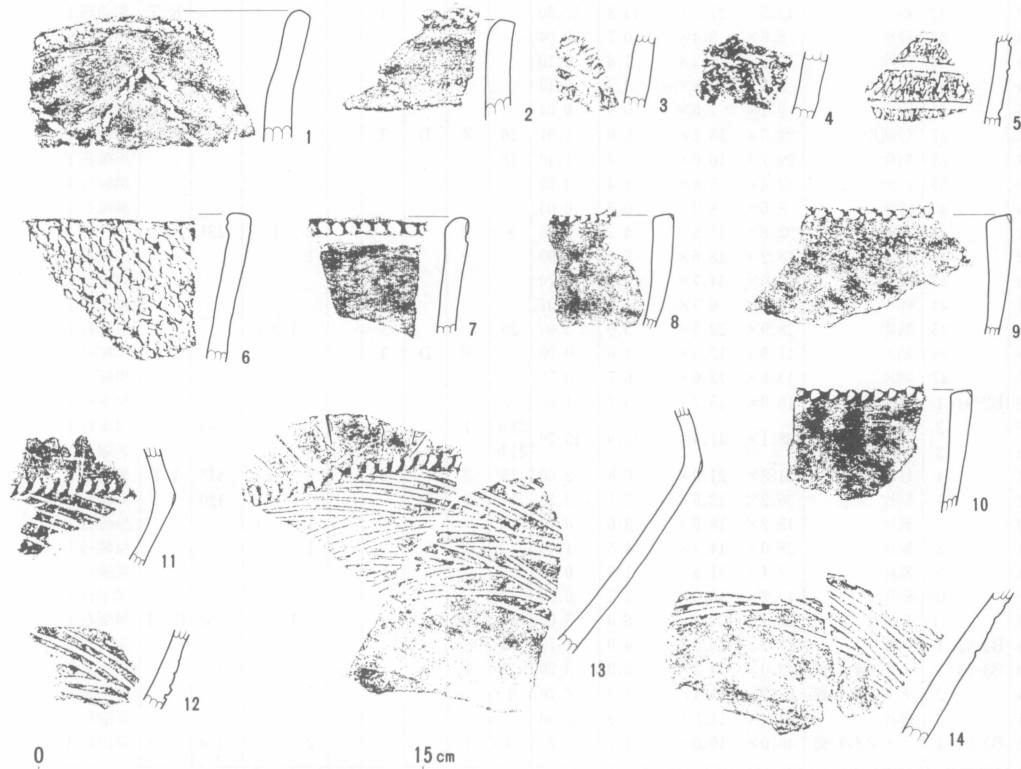
縄文土器（第74図、図版38）

1~4は前期末から中期初頭の土器である。1・2は鋸歯状の撲紐側面圧痕を有する波状口縁の土器である。原体はRLの単節縄文で、口唇部にも施文されている。3・4は横位の結節斜縄文を施文された土器で下小野式とされるものである。

5~14は後期の土器である。5は斜縄文を地紋に沈線が施されている。6は単節斜縄文の施文された深鉢形口縁部で、内面上端に横位沈線文が巡らされている。8~10は断面がやや内傾する無文の口縁部で、口唇外縁に刻み目を有する。内外面はミガキが顕著である。

7は口縁上端に沈線で区切る刻文帯を有する深鉢形土器の波状の口縁部である。

11~14は鉢形土器で、算盤玉形の器形をなす。稜線には刻文列、体部には綾杉状の沈線が密接施文されている。



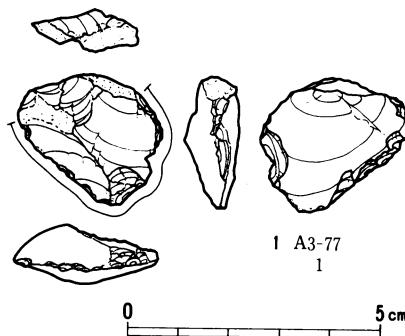
第74図 縄文土器

その他の土器

小破片で図示しなかったものについてふれておく。縄文土器の出土は一点であった。土師器は50点余りであった。赤彩の高杯片1点以外は、平安時代以降のものとみられる。須恵器もほぼ同量で、平行叩き目を施された甕類、底部回転ヘラケズリの箱形杯など、奈良・平安時代のものとみられる。回転糸切りの土師器、須恵質のこね鉢片等、やや時期の下りそうなものもみられた。また中世の遺物には内耳土鍋片、カワラケ片があった。

2 石器（第75図、第10表、図版38）

本遺跡で検出した石器は1点のみであった。1は二次加工を有する剝片である。広い剝離面打面の横長剝片を素材としている。両側縁にわたってまばらな細部加工と微細な剝離痕が観察される。背面の稜線は敲打痕のように潰れており、そこに微細な鉄分の付着が観察される。火打石の可能性がある。A3-77区より出土した。石材は石英である。長さ24.2mm、幅28.1mm、厚さ10.1mm、重量6.3gを測る。



第75図 縄文時代石器

第10表 縄文時代以降出土石器計測表

捕図番号	遺物番号	器種	石材	最大長×最大幅×最大厚 (mm)	重量 (g)	打角 (°)	調整角 (°)	調整痕部位	使用痕部位	折れ面部位
1	A3-77-1	R剝片	チャート	28.1×24.2×10.1	6.3	117		R～L		

第4節 小結

青山中峰遺跡で検出された遺構は旧石器時代のブロック2か所のみであった。1か所（第1ブロックは）は立川ロームIX層で2点のみの出土であった。他（第2ブロック）はVI層を中心狭い範囲に密集して62点の出土である。石材は黒曜石が中心で、石器としては安山岩製の縦

長のナイフ形石器が特徴的である。

この遺跡は2時期にわたるもので、特に第2ブロックには濃い集中が見られ、遺物量も多く、ブロックの在り方、石器製作技術の解明の面で貴重な資料が得られたといえる。単独でこれだけの集中をみせることは珍しく、路線外にもブロックの存在する可能性は高いといえよう。

縄文時代以降は後期を中心とした縄文土器と、若干の土師器・須恵器の出土があったのみである。調査地点が、小支谷が両岸から入り込み分水嶺となる地点であるので、遺構の立地条件が良くないためであろう。陥穴程度はあったかもしれないが、確認調査で検出されず、本調査に移行しなかったので何とも言えない。しかしながら、奈良・平安や中世の集落跡を検出した青山富ノ木遺跡が近接していること、加曾利B式の完形に近い土器が出土したほか、土師器・須恵器が出土していることからみて、調査地点から東西にのびている台地上に集落が存在する可能性が高い。

第IV章 ま と め

第1節 新シ山・柳和田台遺跡、青山中峰遺跡の旧石器時代について

今回の調査の結果、新シ山・柳和田台遺跡と青山宮脇遺跡でそれぞれ2つの文化層からやまとまつた石器群が検出されている。特に、新シ山・柳和田台遺跡第II文化層と青山宮脇遺跡第I文化層とした立川ローム層第VI層上部及び第VI層下部から検出された石器群は、資料としては両遺跡とも単独のブロックによる文化層の設定のため石器群の全体像の一部しか表出していないと考えられるが、下総台地北東部地域のVI層段階の石器群の変容過程の特徴の一端を表していると考えられるため、これらの石器群について簡単にまとめてみたい。

新シ山・柳和田台遺跡と青山宮脇遺跡ではVI層の認定に若干の異同がある。新シ山・柳和田台遺跡ではVI層を厚く取っており、石器群の検出部分ではVI層上部付近から上層がIII層（ソフトローム）に取り込まれている状況が観察されている。石器群の帰属層準はVI層上部としたが、当遺跡でのVI層の下半が下総台地の標準層序（島立・新田・渡辺 1993）のVI層に対比されると考えれば、広くVI層の中で幅を考えた方がよい資料であるかもしれない。一方、青山宮脇遺跡では松戸市彦八山遺跡における層序区分の提言（田村 1987）を踏まえてVI層とVII層の分層を行っており現在の標準層序に対応した下総台地東部地域の層序となっている。ただし、青山宮脇遺跡第II文化層の石器群は谷頭部分から検出されており、遺物の垂直分布幅が大きく明確な帰属層準の確定は困難であり、VII層上面からVI層下部の幅を考えておきたい。

上記のように新シ山・柳和田台遺跡第I文化層と青山宮脇遺跡第II文化層は検出層準の面でやや問題が残るもの、下総台地東部地域でのAT直下とAT直上の石器群と把握される。次に両遺跡の石器群の特徴を挙げその変容過程について考えてみる。

青山宮脇遺跡第II文化層（第2ブロック）は、①石材は量的には黒曜石を主体としているが、母岩数という質的な面では珪質頁岩、珪質凝灰岩、安山岩が単独母岩あるいはごく少量の母岩という搬入形態で数多く存在する。②器種は珪質頁岩、珪質凝灰岩を石材とした中形石刃と安山岩製の石刃状剝片を素材としたナイフ形石器、黒曜石製の楔形石器などで器種構成される。ナイフ形石器は比較的厚味のある両側縁直線的な素材を用いて、素材の打面を器体の基部に置き、調整加工は基部及び1側縁に急斜角な刃潰し加工が施されるものである。③石器製作技術については、ブロック内で黒曜石が多量に消費されているが、同一母岩で縦長剝片から横長剝片の多様な剝片が作出されており、また同一母岩の石核、製品との関係が不明なためその具体的な剝片剥離技術は明確でない。ここでは、中形石刃がブロック外で製作されブロック内に搬入されている点を注目しておく。

新シ山・柳和田台遺跡第Ⅰ文化層は、①石材は量的には珪質頁岩と黒曜石の2つの石材が主体を占める。②器種は珪質凝灰岩製の大形石刃、珪質頁岩製の搔器、削器が存在し、これに黒曜石製の小石刃、楔形石器が器種構成している。③石器製作技術は、ブロック内で珪質頁岩を石材とした横長剝片を剝片剝離する横打技法の剝片剝離技術と、黒曜石製の石刃を石核素材として小石刃を生産する剝片剝離技術が特徴的に認められる。この小石刃を生産する技術は「石刃リダクション・プロセス」(田村 1992) あるいは「下総型刃器再生技法」(新田 1995) 等と呼称されて近年注目されている石器製作技術である。新シ山・柳和田台遺跡の事例は石刃を素材とした楔形石器状の石核（両極石核）から剝離された小石刃の接合と考えられる。

二つの遺跡を各要素ごとに比較すると、石材面では黒曜石母岩による集中的な母岩消費と珪質頁岩・珪質凝灰岩・安山岩の母岩による製品の搬入的な在り方という基本的枠組みは変化していない。器種の面ではナイフ形石器、石刃、楔形石器という比較的単純な構成から、石刃、楔形石器、削器、搔器さらに小石刃などの複雑な器種構成をとるよう変容している。剝片剝離技術では石材の消費過程の相同意に連関して基本的枠組みは変容していないが、VI層上部の石器群には小石刃が生産される技法が存在することが注目される。同種の技法をもつ遺跡にはVII層上部段階の香山新田中横堀遺跡(空港No.7遺跡)、滝東台遺跡からその技法が認められ、黒曜石の素材消費過程や搔器、削器、楔形石器などの器種構成の等質的な石器群としては千田台遺跡(矢本 1991、1995)がVI層下部より検出されおり、おそらく栗野Ⅰ・Ⅱ遺跡(田島 1991)もVI層段階の石器群に比定されると考えられる。石器群の変容過程はここでは詳述しないが、VII層段階で良質の珪質頁岩のみで石材構成され小石刃を生産する技術が、VI層段階では黒曜石石材の相対的増加に伴い黒曜石石材にも技術転嫁され、また、下総台地北東部地域のVII層段階で遠山天ノ作遺跡、出口遺跡で特徴的に見られるチャート小円礫素材の楔形石器とそれを製作する両極技法には、VI層段階の同種の石器群への技術系統が考えられる。つまり、石刃素材の石核から小石刃を生産する技術に両極技法が介在し、逆に楔形石器に切断された石刃を積極的に素材活用するという「技術置換」的な変容過程の構造が図式化できる。

青山宮脇遺跡第Ⅱ文化層と新シ山・柳和田台遺跡第Ⅰ文化層の差異は、下総台地北東部地域のVI層段階の石器群の構造の基本的な枠組み内での振幅と考えられるが、VII層段階からVI層段階の石器群の変容過程と社会構造を考える上では、小石刃を生産する技術構造の解明が重要な鍵を握ることとなろう。その場合、今回は特に触れなかった石材獲得戦略の問題への指向が必要となることは言うまでもない。

引用・参考文献

島立 桂・新田浩三・渡辺修一 1992 「下総台地における立川ローム層の層序区分—平成2・3年度職員研修会からー」『研究連絡誌』35 勧千葉県文化財センター

- 田島 新他 1991 『佐倉市栗野 I・II 遺跡—佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 VIII-』 勝千葉県文化財センター
- 田村 隆 1992 「遠い山・黒い石 武藏野II期石器群の社会生態学の一考察」『先史考古学論集』 2
- 新田造三 1995 「下総型石刃再生技法の提唱」『研究紀要16—20周年記念論集一』 勝千葉県文化財センター
- 矢本節朗 1995 「千田台遺跡」『石器文化交流会 2』 石器文化研究会

第2節 新シ山・柳和田台遺跡 SX-02出土土器とその性格について

SX-02出土土器

本遺構から出土した土器群はその出土状況から一括資料と考えられる。すべて北関東系土器で、器形は明瞭な甕形と広口壺とでも称すべき形態の二種類に分けられる。このうち、連弧文及び重四角文を施す土器は中期の終わりに茨城県から本県北部にかけてみられる特徴的な土器で、その時期的位置付けも本県成田市関戸遺跡や茨城県旭村浜山古墳群墳丘下出土土器群の様相から中期後半足洗式土器の後半として間違いないであろう。そして、胴部に横位の縄文帯のみを施す甕形土器もこの期によくみられるものである(ただし、頸部のみという例は少ないが)。類例に乏しいのは算盤形の胴部を有し、結束(縄文原体を工具に結んだもの)かと思われる縄文線を頸部から胴部にかけて3~4条施した土器で、口縁部は直口縁か断面三角形の複合口縁をなすかと推測される。このような土器が前2者に伴うという事実も収穫といってよいだろう。

さて、足洗式土器に伴うこれらの土器群は従来の出土例からすれば、東茨城から千葉県北東部に分布するもので、印旛郡と香取郡の境界でしかも利根川にほど近い本遺跡の地理的条件と矛盾するものではない。そして、尾羽根川を越えた南側の成田市関戸、松崎白子遺跡では中期北関東系土器に宮の台式土器が伴っているのに対して、本遺跡ではたとえそれが墓跡に伴う一括資料であったとしても、北関東系土器のみで占められていた事実にも注目しておく必要がある。

一括遺棄土器群の性格

今回の調査は道路敷という限定された細長い調査範囲ではあったが、3個の土器を除いて弥生時代に属する遺構・遺物は全く検出されなかった。台地の広さとその中央を南北に分断するかたちで調査範囲が当たっていることを考慮すると、この台地に集落が存在する可能性は少ないであろう。つまり、3個体の土器は集落から離れた地で、しかも表土下25cmという浅いレベルで出土したことになる。

従来、北総地域とりわけ利根川南岸では、意識的に頸部から上を欠いた壺形土器又はその上に甕形土器を被せた出土例が各地で認められており、その性格についても墓跡に伴う土器とい

う認識は共通しており、壺（甕）棺墓と呼称されてきた。ただし、この種の類例は後期に属する例がほとんどであったためか、中期前半の須和田期にみられる再葬墓との関係についてはほとんど論じられなかつたといってよい。これは、古くは阿玉台北遺跡、また近年では南羽鳥タダメキ第2遺跡等中期後半に属する類例が稀少なことにも起因しよう。両遺跡とも、せいぜい1mに満たない浅い土坑中に壺又は甕を埋納する点で共通するが、本遺跡のように、比較的小型の土器がしかも3個まとめて出土するような事例は珍しい。あるいはその下の掘込みを土壤とみて供献土器群とみられないこともないが、下部の円形土坑との関係はさらに類例の検討を経て解決されるべきであろう。ここでは、これら土器群がいわゆる甕棺墓の一類型として捉えられる可能性が高いことを指摘することとしたい。

写 真 図 版

青山中峰遺跡

青山宮脇遺跡

青山中峰遺跡

新シ山。柳和田台遺跡

遺跡周辺航空写真



調査前の遺跡（北から）

調査前の遺跡（南から）





南側調査区全景

北側調査区全景





第2ブロック
土層断面



第1ブロック
出土状況(南から)



第1ブロック
出土状況(西から)



2



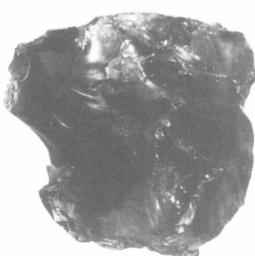
7



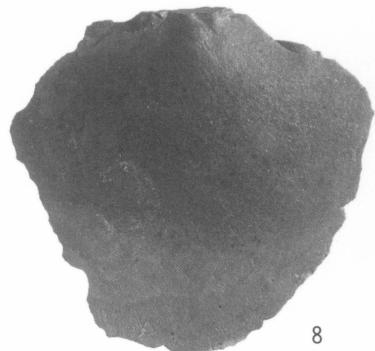
3



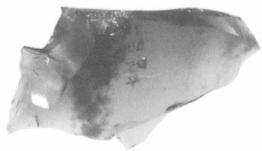
4



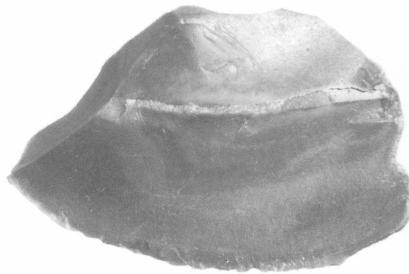
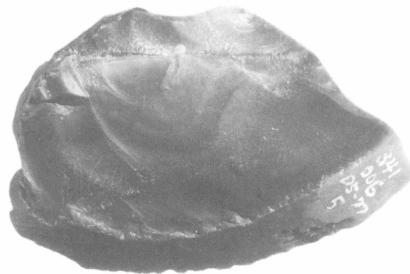
5



8



6



9a

第1ブロック出土石器（1）



9 a

9 a + 9 b



10a



10b



10a + 10b

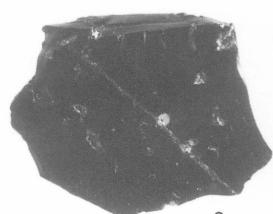
第1 ブロック出土石器（2）



1

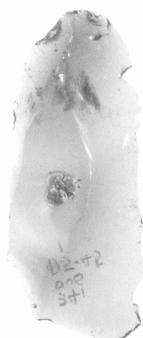


2



3

第2 ブロック出土石器

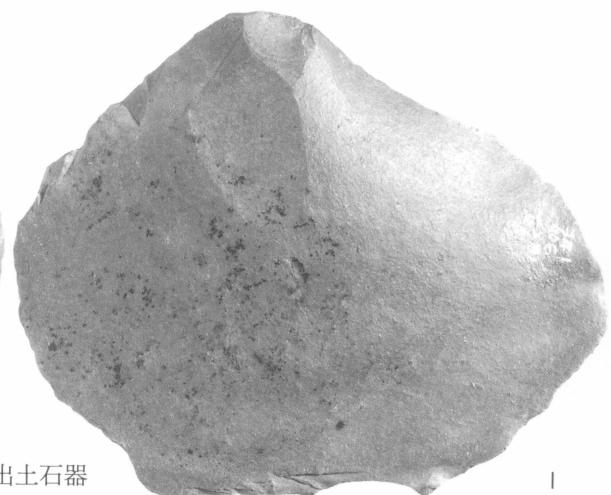


1



2

第3 ブロック出土石器



单独出土石器



SX-02
溝状部と
土器出土状況



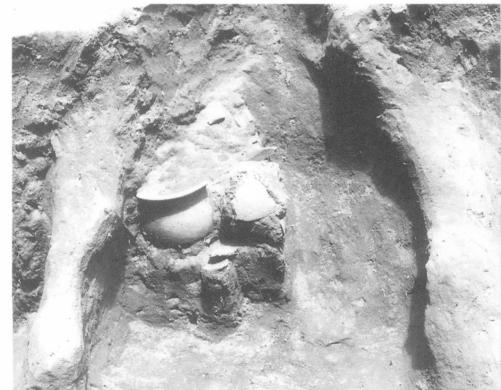
SX-02
土器出土状況



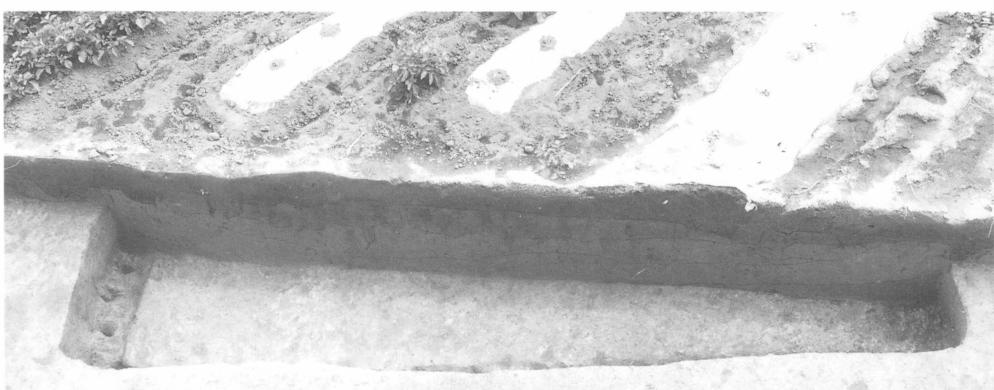
SX-02
全景



SI-01
全景



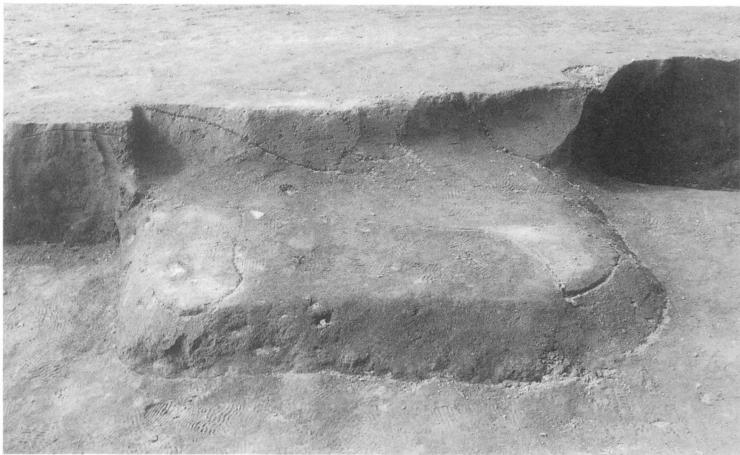
SI-01
出土状況



SI-02
全景



SI-03
全景



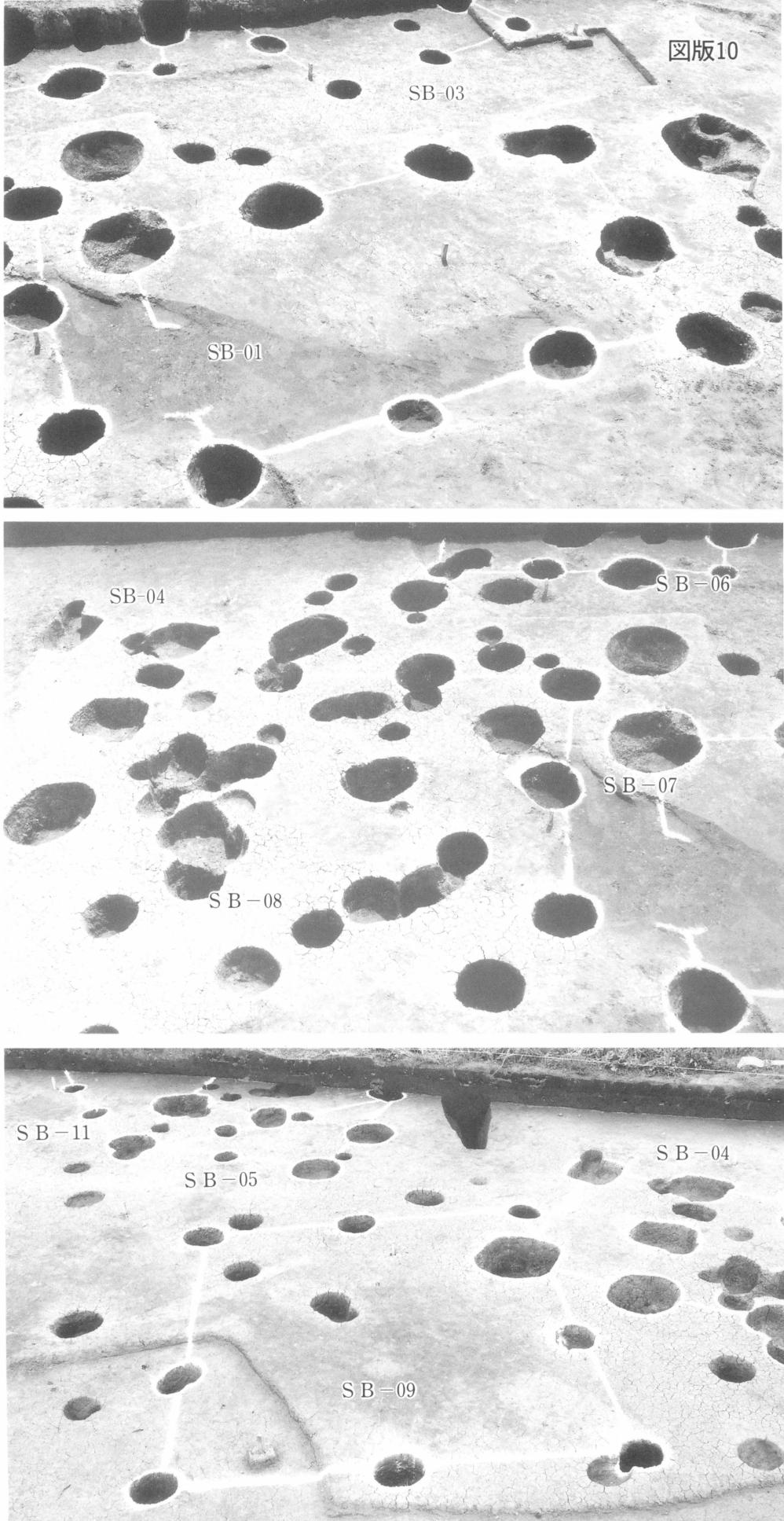
SI-03
カマド

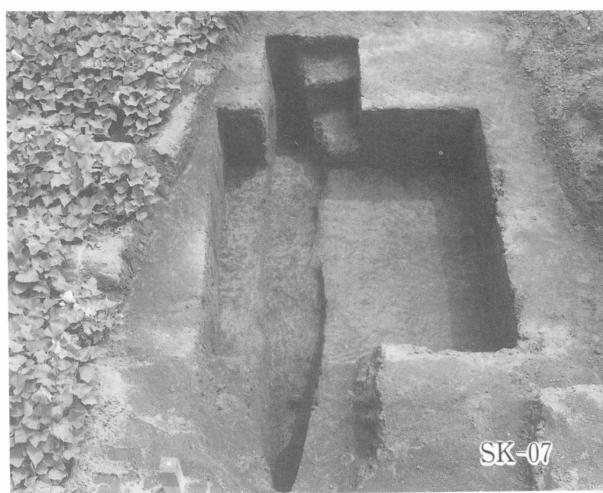
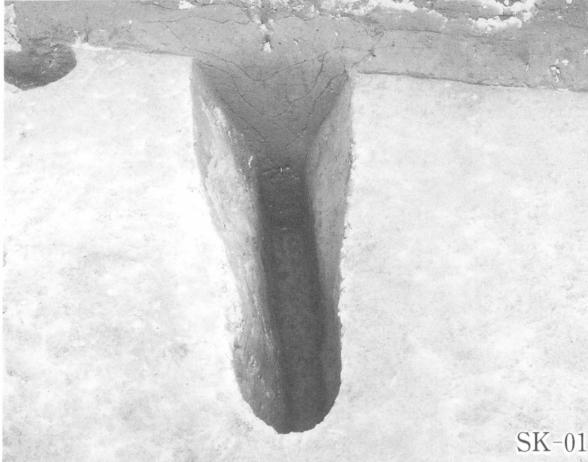
掘立柱建物跡

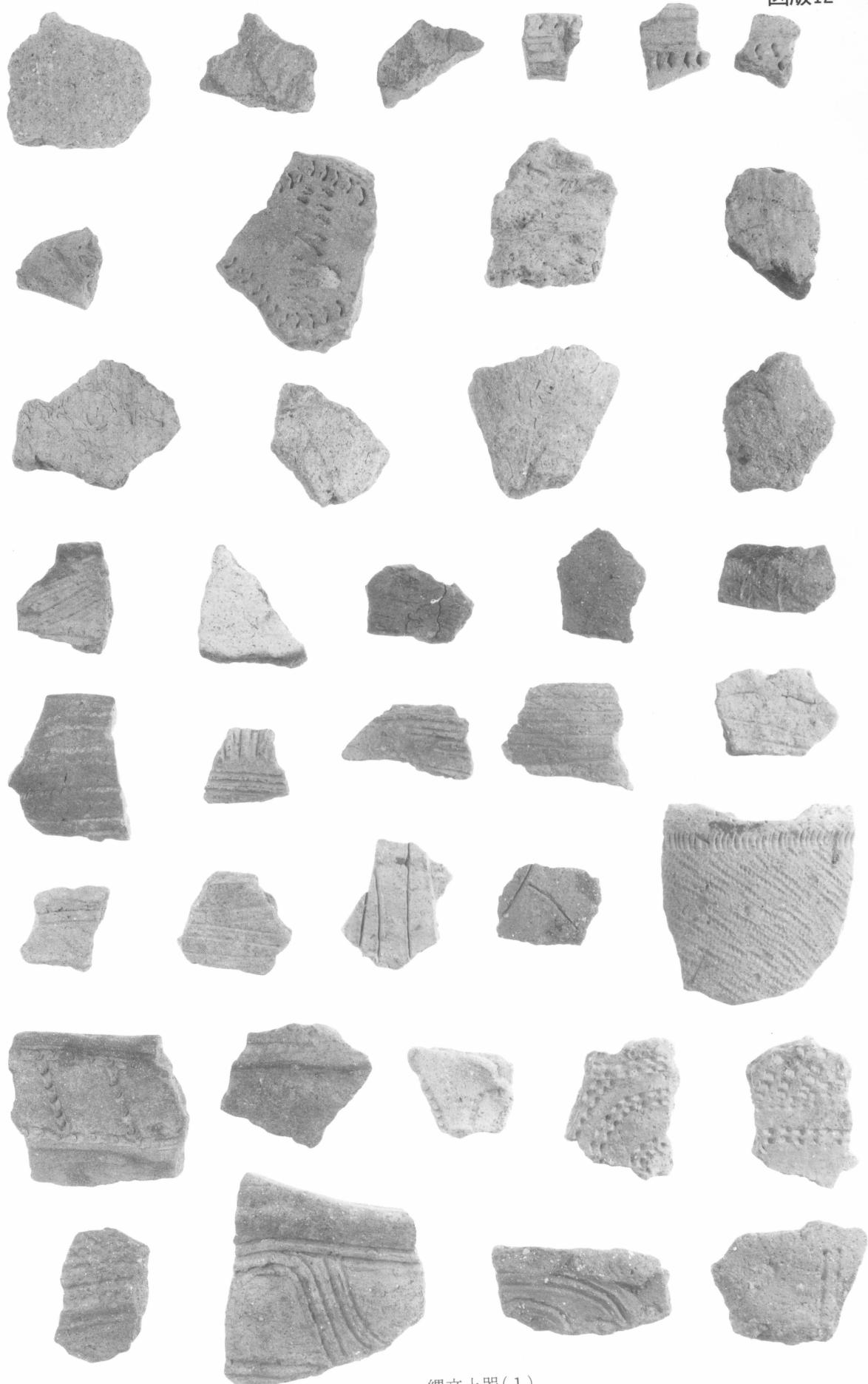


掘立柱建物群

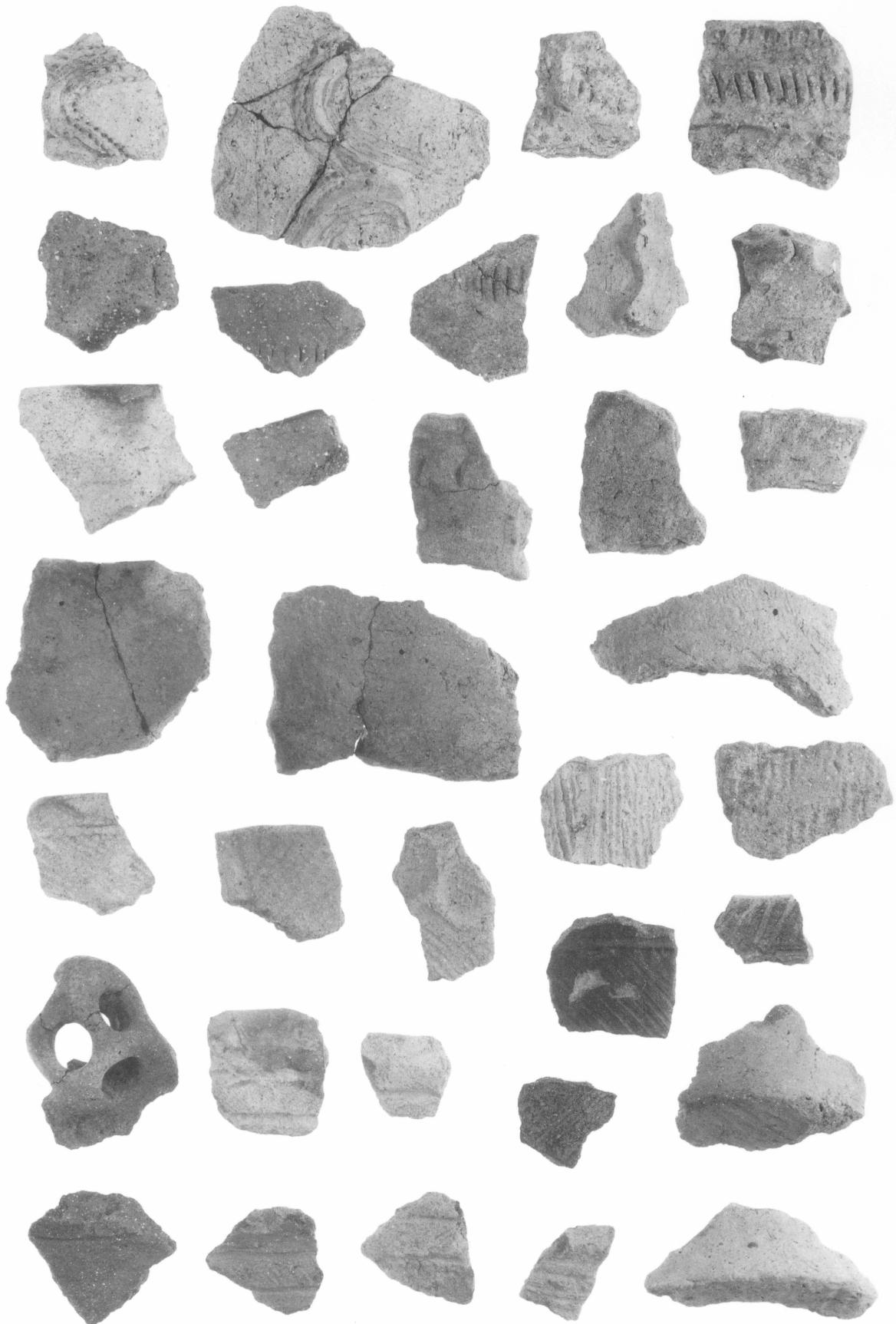
図版10







縄文土器(1)

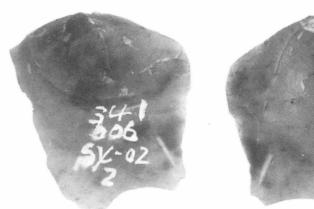
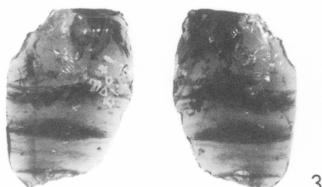


縄文土器(2)



土製品

縄文時代石器



4



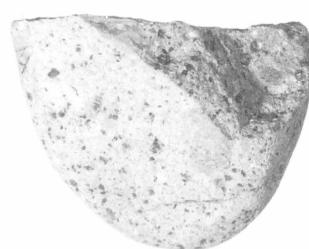
6



5



7



8



9



SX-02
1



SX-02
2



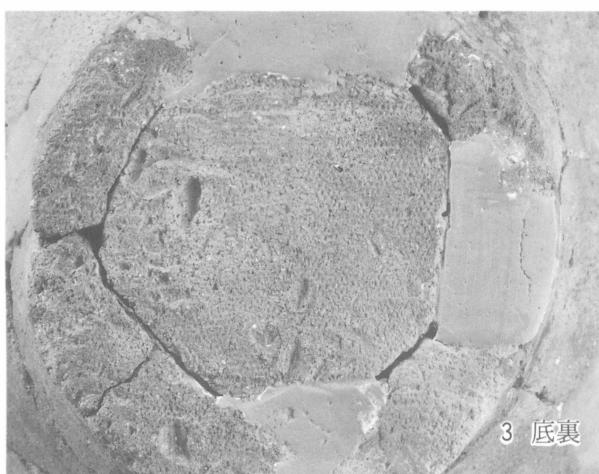
0
X線写真



2 粗痕



SX-02
3



3 底裏



SI-01
1



SI-01
6



SI-01
2



SI-01
7



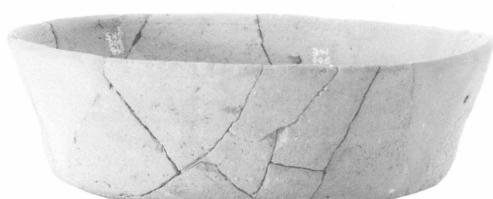
SI-03
2



SI-03
13



SI-03
3



SK
2



SK
2



金属製品



常滑甕出土状況



常滑甕



遺構検出状況（南から）

遺構検出状況（北から）





SI-01 (左)
SI-02 (右) 全景



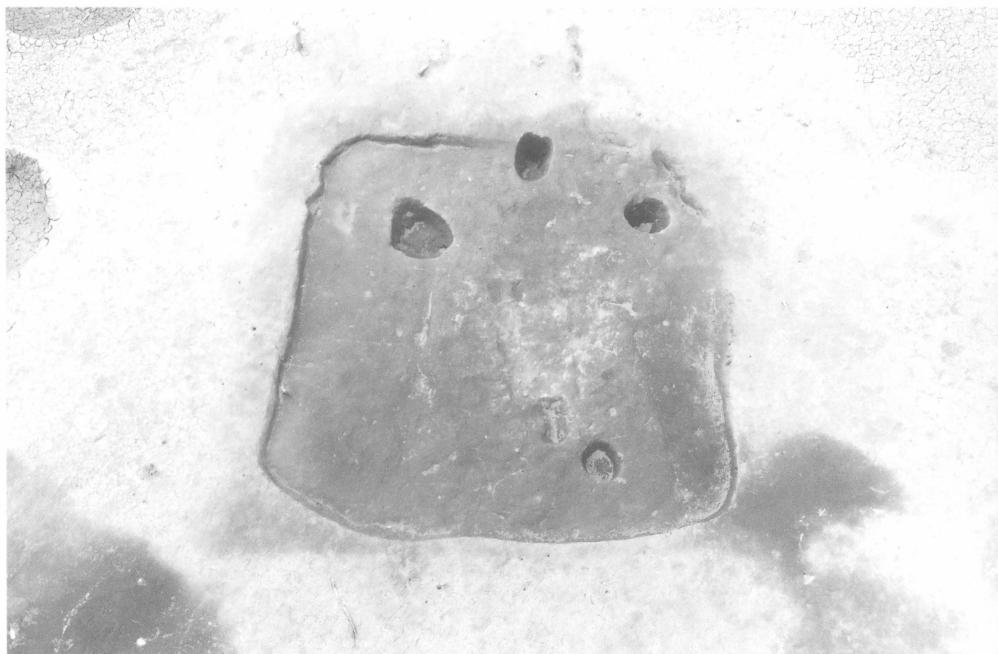
SI-03全景



SI-04全景



SI-05全景



SI-06全景



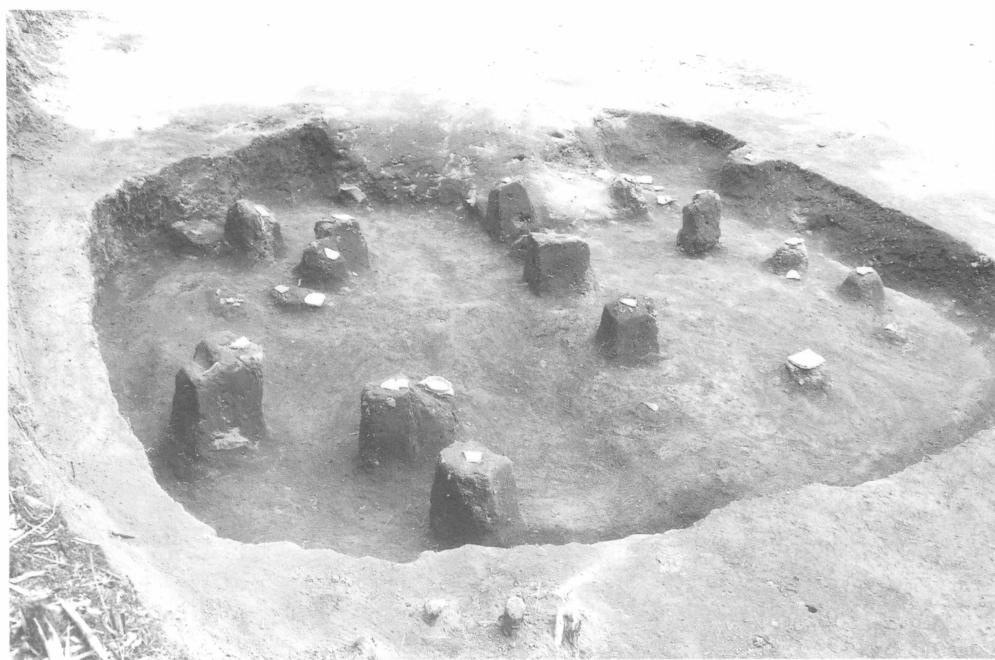
SI-06
遺物出土状況



SI-07全景



SI-08全景



SI-08
遺物出土状況





SI-12(下)
SI-13(上)全景



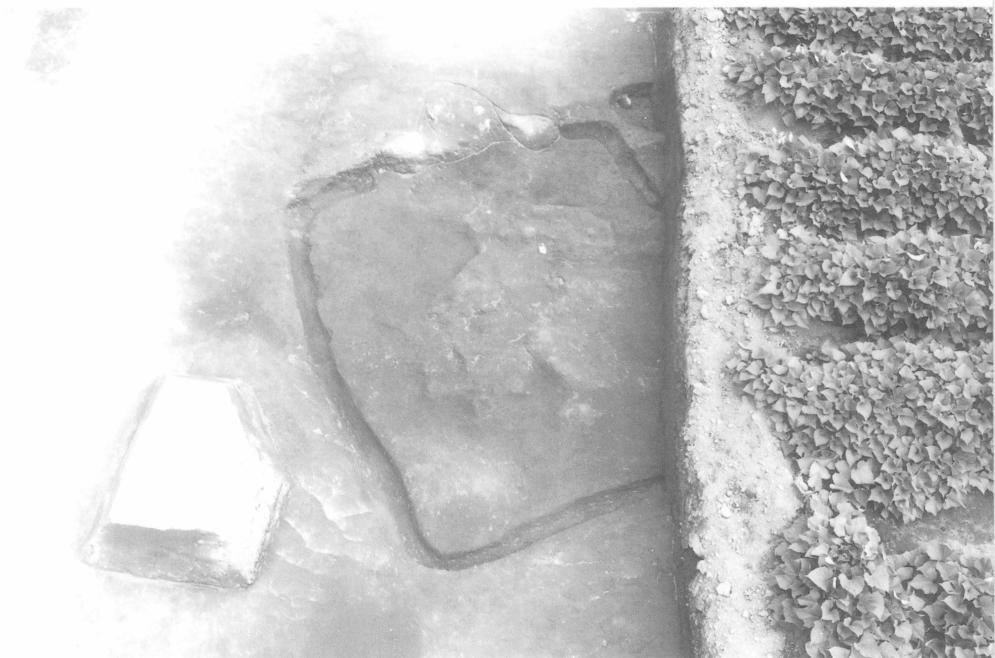
SI-12
遺物出土状況



SI-14(左)
SI-15(右)全景



SI-15カマド
遺物出土状況



SI-16全景



SI-16
遺物出土状況





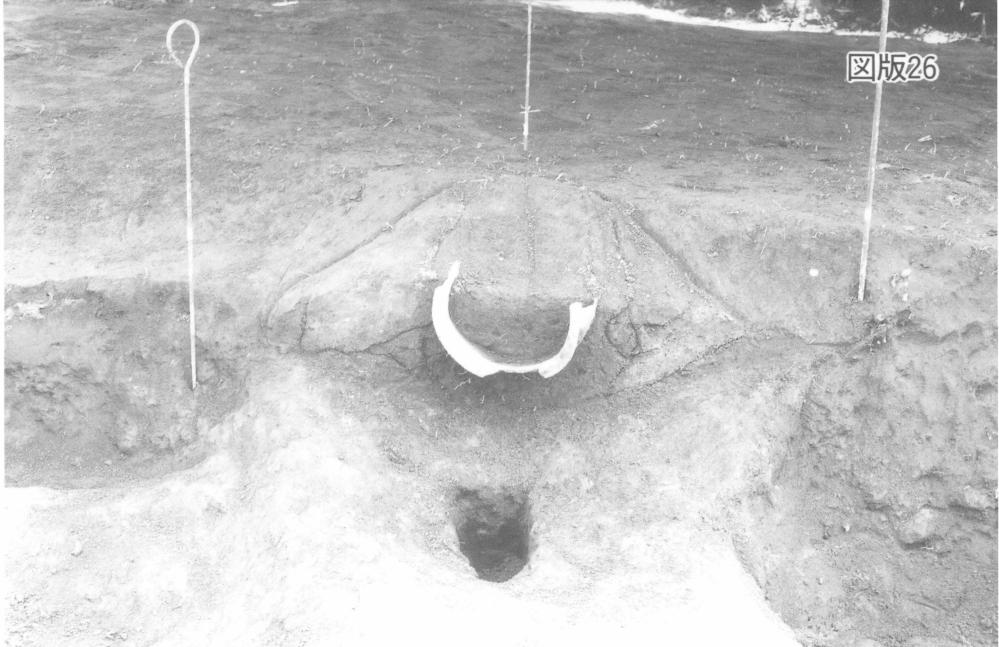
SI-17(右)全景



SI-18全景



SI-18
遺物出土状況



SI-18カマド
遺物出土状況



SB-01全景



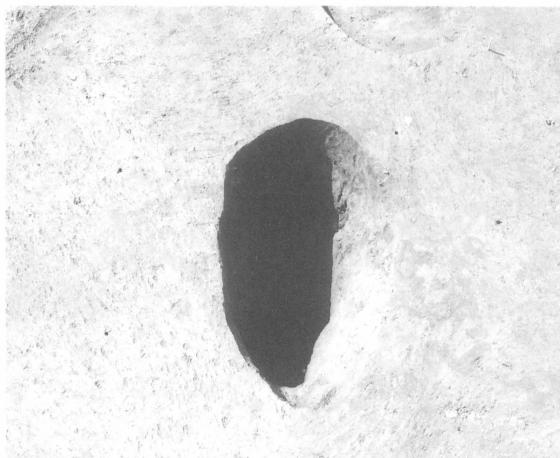
SB-01
02・03群全景



SK-01全景
SK-03全景



SK-03全景
SK-04・05全景



SK06～08全景
SK-13・14全景



SK-11全景
SK-13・14遺物出土状況





SK-15全景
SK-17・20全景



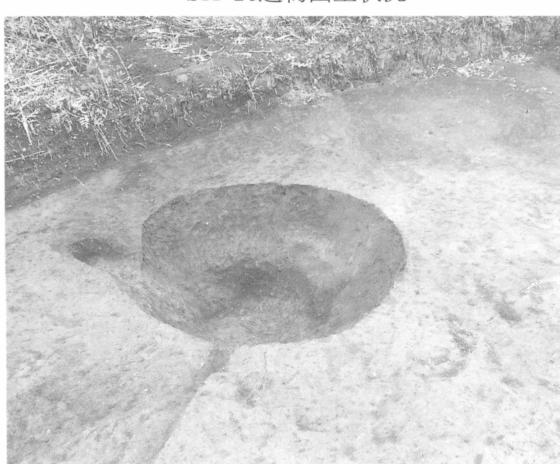
SK-15遺物出土状況
SK-18・19全景

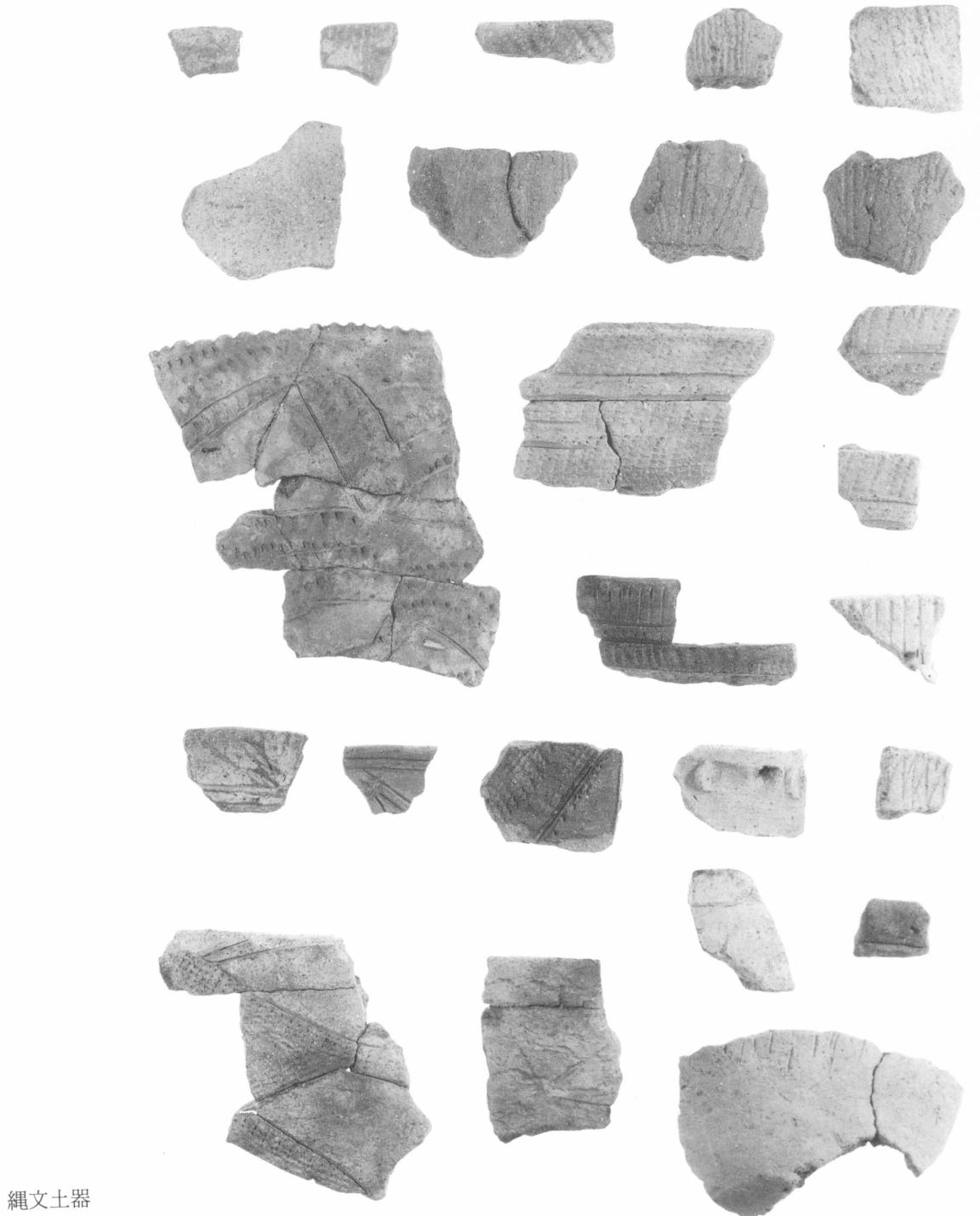


SK-21全景
SK-26遺物出土状況

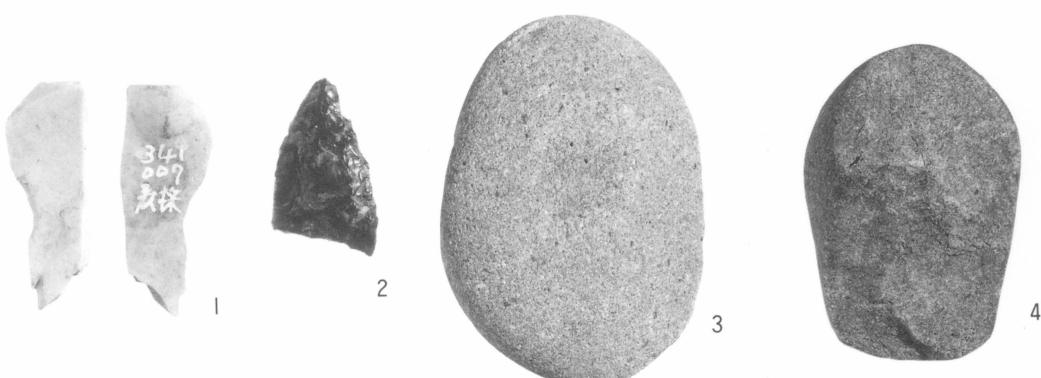


SK-24・25全景
SK-30全景

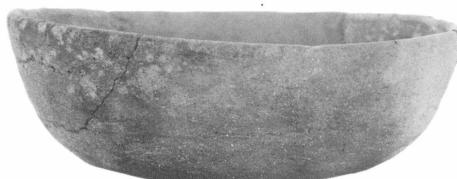
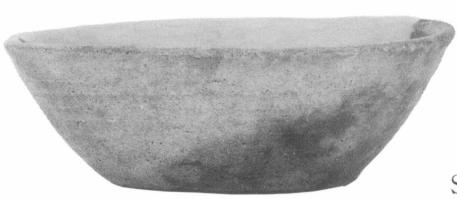
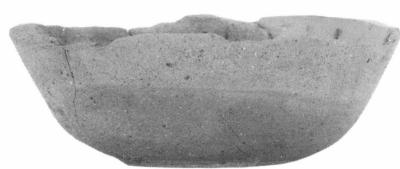


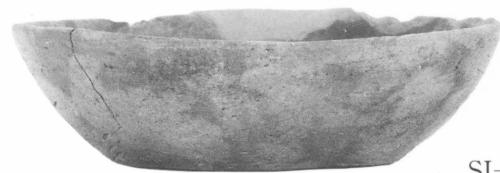
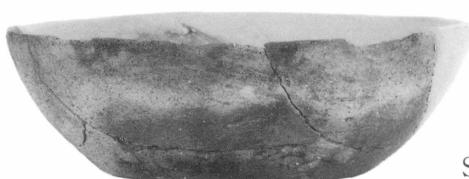
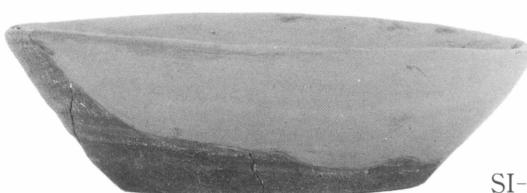
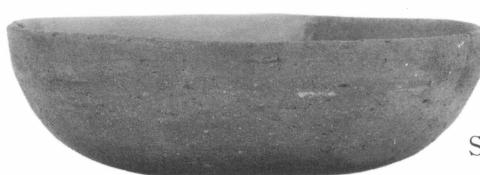
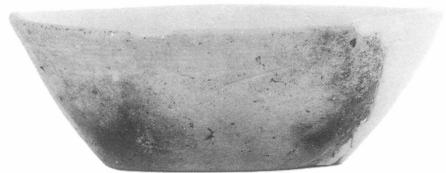


縄文土器



石 器

SI-01
1SI-01
2SI-02
1SI-02
2SI-02
3SI-02
4SI-03
1SI-05
2SI-06
1SI-08
3SI-08
1SI-10
1SI-10
2

SI-11
2SI-11
3SI-11
4SI-11
5SI-11
6SI-11
7SI-12
1SI-12
2SI-11
8SI-12
3SI-13
1SI-12
4SI-14
1

SI-15
2SI-16
1SI-16
2SI-16
3SI-16
4SI-16
5SI-16
6SI-16
7SI-17
1SI-17
2SI-17
3SI-17
5SI-17
6SI-17
8



SI-17
9



SI-18
2



SK-13
3



SK-16
1

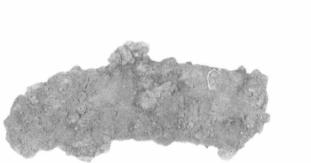


SK-30
1



SK-30
2

鉄製品・石製品・土製品





遺跡近景（調査前）

調査風景





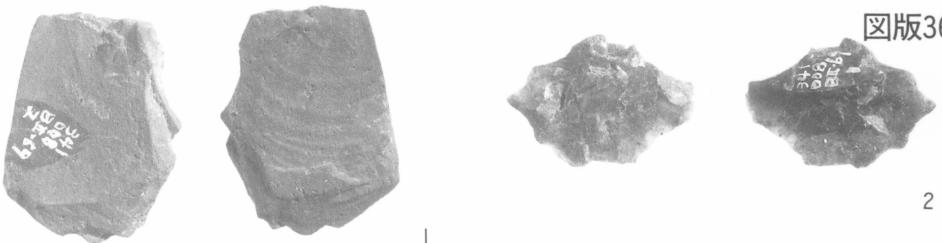
第1ブロック
出土状況



第2ブロック
出土状況



第2ブロック
出土状況



第1ブロック出土石器

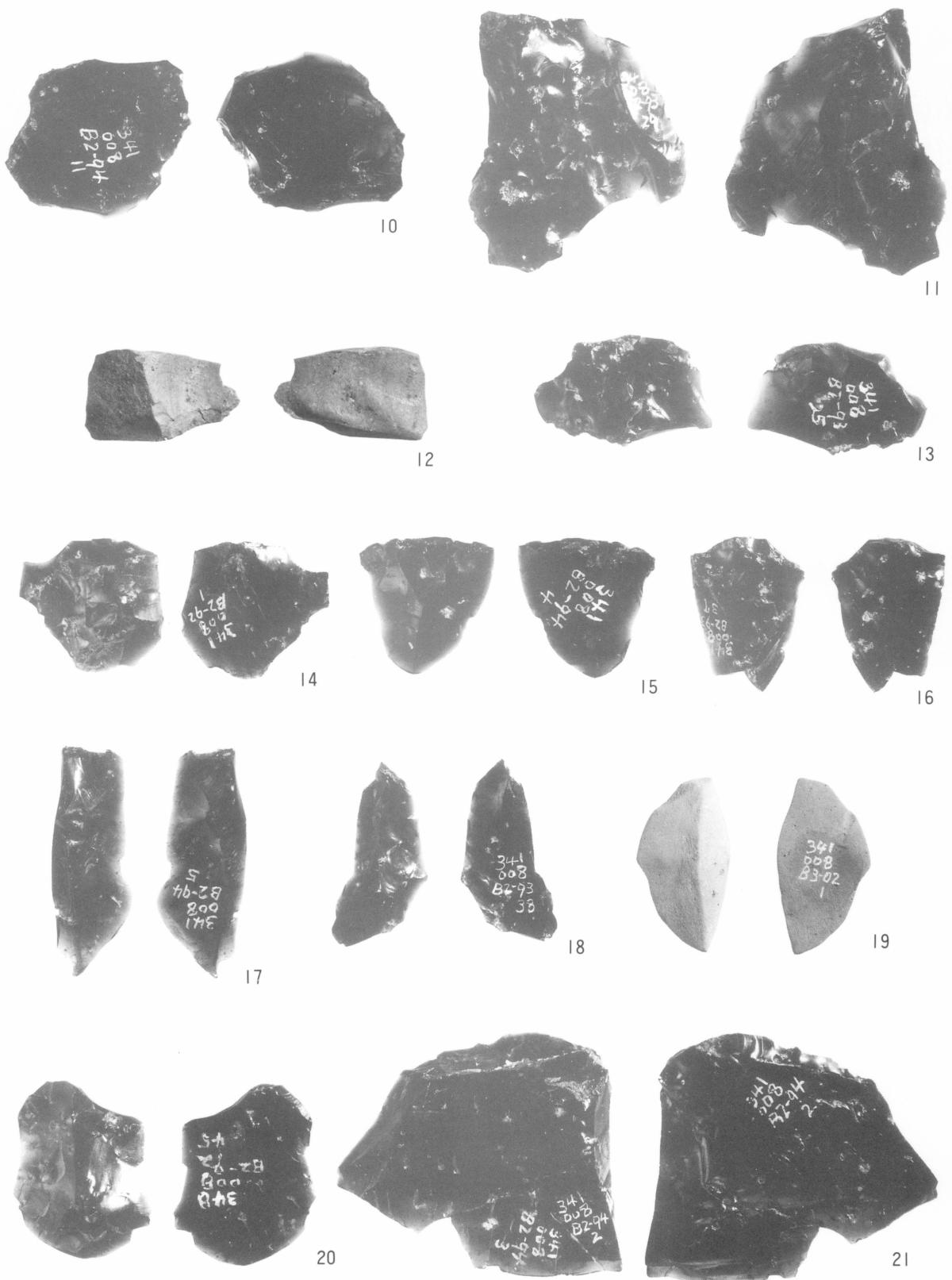


第2ブロック出土石器(1)

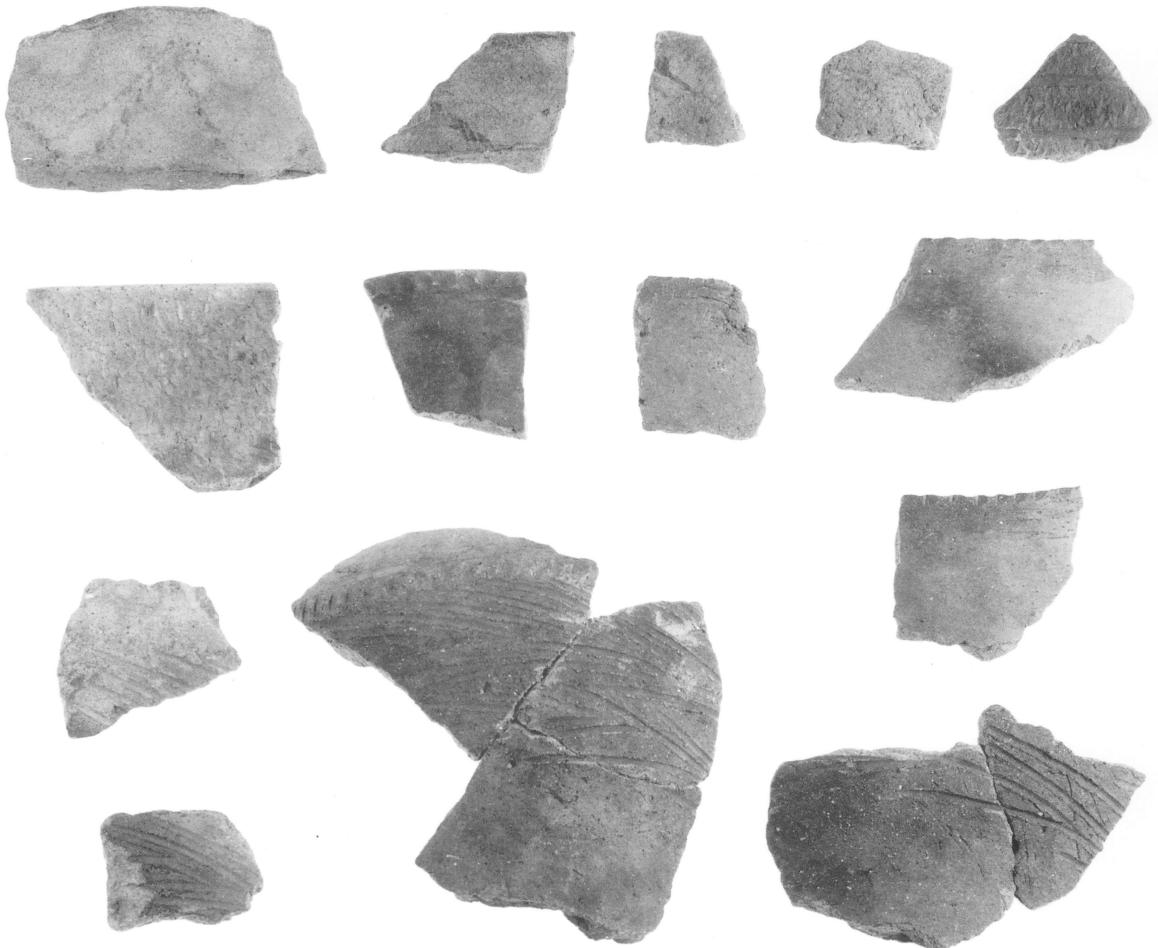
7

8

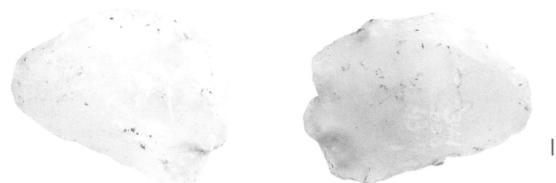
9



第2ブロック出土石器(2)



縄文土器



石器

抄 錄

ふりがな	しもふさまち あたらしやま・やなぎわだいいいせき あおやまなかみねいせき あおやまみやわきいせき
書名	下総町 新シ山・柳和田台遺跡 青山中峰遺跡 青山宮脇遺跡
副書名	主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書
卷次	V
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第265集
編著者名	宮重行 萩原恭一 矢本節朗 鳴田浩司 高柳圭一 小高春雄
編集機関	財団法人千葉県文化財センター
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809番地2 TEL 043(422)8811
発行年月日	1995年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新シ山・柳和田台	香取郡下総町 成井字新シ山 381-1ほか	12341	006	35度 50分 37秒	140度 22分 53秒	1989.04.10～ 1989.06.30	5,500	道路建設
青山中峰	香取郡下総町 青山字岩谷台 383-2ほか	12341	007	35度 50分 54秒	140度 23分 03秒	1993.07.01～ 1993.08.31	3,128	
青山宮脇	香取郡下総町 青山字新畑78 -1ほか	12341	008	35度 51分 27秒	140度 23分 26秒	1990.04.05～ 1990.07.27	1,900	
						1990.08.06～ 1990.09.28		
						1992.07.01～ 1992.07.28		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新シ山・柳和田台	集落	旧石器	ブロック 3か所 単独出土 1か所	削器・搔器・楔形石器 石刃・石核・剝片	下総町での初めての旧石器時代遺跡の調査例 土坑を伴い、土器棺とみられる弥生中期の土器が3個体出土
		縄文	炉穴、陥穴、土坑	縄文土器片・土器片錘 石鎌・打製石斧・磨石	
	弥生		土器棺墓 1基	楔形石器	
青山中峰	集落	平安	竪穴住居 3軒	弥生土器・貝	平安時代の集落の一部を調査
		掘立柱建物	12棟	土師器・須恵器	
青山宮脇	集落	縄文	柵列、井戸、土坑 陥穴・土坑	銅皿・鉄製品 繩文土器	ナイフ形石器を伴う密なブロックが検出された。
		平安	竪穴住居 18軒	石鎌・磨石・敲石・剝片 土師器・須恵器	
青山宮脇	集落	旧石器	掘立柱建物・土坑 ブロック 2か所	鉄鎌・刀子・紡錘車 ナイフ形石器・石刃 楔形石器・剝片 繩文土器片・剝片 土師器・須恵器	

千葉県文化財センター調査報告第265集
新シ山・柳和田台遺跡 青山中峰遺跡 青山宮脇遺跡
—主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書V—

平成7年3月27日 印刷
平成7年3月31日 発行

発 行 千 葉 県 土 木 部
千葉県千葉市中央区市場町1-1

編 集 財団法人 千葉県文化財センター
〒284 千葉県四街道市鹿渡809-2
phone: 043(422)8811

印 刷 株式会社 弘 文 社
千葉県市川市市川南2-7-2
